

長野県木曾郡南木曾町

太田垣外遺跡

— 農村基盤総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

「石に働きかけた縄文中期後半・後期前半の集落」

1998. 12. 1

南木曾町教育委員会
木曾郡町村会

長野県木曾郡南木曾町

太田垣外遺跡

— 農村基盤総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

「石に働きかけた縄文中期後半・後期前半の集落」

1998.12.1

南木曾町教育委員会
木曾郡町村会



北上空から見た遺跡



琥珀大珠



花崗岩をとりこんだ 8号住居址



花崗岩を削平し掘りこんだ穴群

序

南木曾町の南西部に位置する田立地区は、温暖な気候に恵まれ、南に面した緩斜面には耕地が広がり、お茶の栽培も行われています。長野県無形民俗文化財の花馬祭りや町無形文化財の田立歌舞伎など、豊かな民俗を伝承する所でもあります。

こうした田立の中央部の台地に太田垣外遺跡は位置し、南隣には産神である五宮神社の社叢が広がっています。太田垣外遺跡は、個人が圃場整備をした際遺物が出土したことが契機となって昭和23年に最初の発掘調査が、木曾西高等学校（現木曾高等学校）地歴部によって実施され、木曾郡内でも大規模な縄文時代中・後期を中心とした遺跡であることが確認されました。その後、道路改良工事に伴って昭和50年にも小規模な発掘が行われ、住居跡が確認されました。

第3次調査となった今回の調査は、昭和56年より南木曾町内で進められている「農村基盤総合整備事業」に伴うもので、水田6枚（約2,500㎡）にわたって大規模な発掘を行ったものです。調査は南木曾町教育委員会が事業主体となり、木曾郡町村会（埋蔵文化財調査整理作業所）に事業を委託し、平成6年5月から12月にかけて実施いたしました。調査にあたっては、地元の方々に作業員をお願いすることができ、丁寧な発掘を進めていただきました。

発掘調査後、木曾郡町村会の埋蔵文化財調査整理作業所に出土遺物は移され、平成7・8年度にかけて整理作業と図面作製、9年度には報告書の執筆が行われ、本年度『太田垣外遺跡（農村基盤総合整備事業に伴う発掘調査報告書）』として刊行することとなりました。

ここに至りますまでに、ご理解ご協力をいただいた地権者ならびに隣接地の方々、猛暑の中調査に従事していただいた作業員の方々をはじめ、関係の各位に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

平成10年12月1日

南木曾町教育委員会

例 言

1. 本報告書は平成6年(1994)に、南木曾町農業基盤整備事業田立地区向栗畑工区の事業実施に伴って発掘調査された「太田垣外遺跡」の調査報告書である。
2. 発掘調査は南木曾町教育委員会が事業主体者となり、木曾郡埋蔵文化財調査委託実施要綱により、木曾郡町村会と技術指導委託契約を結び、発掘調査、整理作業及び報告執筆を木曾郡町村会に委託した。
3. 木曾郡町村会では新谷和孝が技術指導担当者となり、補助員に磯村賢治、神村透がついた。
4. 発掘調査は平成6年8月から12月にかけて実施し、平成7・8年と図面整理及び遺物整理を行い、平成9年に報告書原稿を執筆した。
5. 平成8年1月、新谷が病気のため長期療養となり、そのまま退職してしまったため、調査の記録の引き継ぎはなく、調査時の詳細な観察状況は全くわからない。
6. 報告書作成のため、遺物整理、図面作成は木曾郡町村会埋蔵文化財調査作業所に残されたものをもとに神村が作成し、原稿執筆も行った。
7. 本遺跡の遺物は、南木曾町教育委員会が保管し、南木曾町博物館に収蔵、一部展示してある。
8. 本遺跡の遺図面・写真フィルム等は木曾郡町村会埋蔵文化財調査整理作業所(木曾郡上松町ヒケ畑2408)に保管してある。

目 次

序 例言

1. 遺跡
2. 発見から注目された遺跡
3. 第3次調査
4. 遺構と遺物
5. 調査して考えたこと

挿 図 目 次

- | | | | |
|------|-------------------|------|--------------------------|
| 1 図 | 太田垣外遺跡附近地図 | 25 図 | 5・6号住居址出土土器拓本 |
| 2 図 | 太田垣外遺跡地形図 | 26 図 | 7・8号住居址出土土器拓本 |
| 3 図 | 採集遺物及び1次調査出土遺物 | 27 図 | 8号住居址出土土器拓本 |
| 4 図 | 木曾出土の御物石器 | 28 図 | 9・10・11号住居址出土土器拓本 |
| 5 図 | 遺構配置図 | 29 図 | 11・13号住居址出土土器拓本 |
| 6 図 | 住居址配置図 | 30 図 | 14・15号住居址出土土器拓本 |
| 7 図 | 石の中の土坑群 | 31 図 | 15・16号住居址出土土器拓本 |
| 8 図 | 1・2号住居址 | 32 図 | 16号住居址出土土器拓本 |
| 9 図 | 3・4号住居址 | 33 図 | 16・17・18・19・20号住居址出土土器拓本 |
| 10 図 | 5・6号住居址 | 34 図 | 土坑出土土器拓本 |
| 11 図 | 7・9号住居址 | 35 図 | 土坑・遺構出土土器拓本 |
| 12 図 | 8号住居址 | 36 図 | 遺構外出土土器拓本 |
| 13 図 | 10・13・14住居址 | 37 図 | 剥片石器実測図(1) |
| 14 図 | 15・16号住居址 | 38 図 | 剥片石器実測図(2) |
| 15 図 | 17・18号住居址 | 39 図 | 剥片石器実測図(3) |
| 16 図 | 19・20号住居址 | 40 図 | 石器実測図 |
| 17 図 | 21・22号住居址 | 41 図 | 特種な遺物実測図 |
| 18 図 | 11号住居址、配石墓、土坑802号 | 42 図 | 土坑802号出土琥珀玉実測図 |
| 19 図 | 住居址出土土器実測図1 | 43 図 | 埋甕埋設状況 |
| 20 図 | 住居址他出土土器実測図2 | 44 図 | 住居址高図 |

21図 1・2号住居址出土土器拓本
22図 2号住居址出土土器拓本
23図 2・3号住居址出土土器拓本
24図 4・5号住居址出土土器拓本

45図 花崗岩と住居址
46図 花崗岩をうがつ土坑
47図 中部・関東の琥珀出土遺跡
48図 琥珀大珠

写真図版目次

第1図版 太田垣外遺跡附近航空写真
第2図版 南上空よりみた遺跡
第3図版 遺跡遠景
第4図版 A地区の遺構検出状況
第5図版 1号住居址(1)
第6図版 1号住居址(2)
第7図版 2号住居址
第8図版 3号住居址(1)
第9図版 3号住居址(2)
第10図版 4号住居址
第11図版 5号住居址
第12図版 6号住居址
第13図版 7号住居址
第14図版 8号住居址(1)
第15図版 8号住居址(2)
第16図版 8号住居址(3)
第17図版 8号住居址(4)
第18図版 9号住居址
第19図版 10号住居址

第20図版 11号住居址
第21図版 13・14号住居址
第22図版 15号住居址
第23図版 16号住居址(1)
第24図版 16号住居址(2)
第25図版 17・21号住居址
第26図版 19号住居址
第27図版 20号住居址
第28図版 22号住居址
第29図版 B地区土坑群(1)
第30図版 B地区土坑群(2)
第31図版 配石墓
第32図版 土坑802号
第33図版 出土土器(1)
第34図版 出土土器(2)
第35図版 出土土器(3)
第36図版 出土土器(4)
第37図版 スナップ(1)
第38図版 スナップ(2)

1. 遺 跡

太田垣外遺跡は、長野県木曾郡南木曾町田立地区元組に所在する（第1図）。

遺跡は、長野県埋蔵文化財包蔵地番号4349（南木曾町遺跡番号60）で登録されている縄文時代中～後期、平安時代の遺跡である。

田立地区は長野県南西部に所在し、木曾川右岸では県端の地区で岐阜県恵那郡坂下町と後山尾根で接している。田立地区の北東にある伊勢山（1373m）とその前山である摺鉢山（796m）の山麓に、水源をこれらの山にもつ長谷川が形成した押しだし扇状地が南に向かって広がっており、その扇状地がいくつかの沢によって南北に長い台地地形をつくっている。遺跡は長谷川の東側に接する南北にのびる台地中央部に位置する（第2図）。東西約100mが遺跡の範囲で、今回調査したのは長野県無形民俗として指定された花馬祭りの行われる五宮神社の北西、林美好氏宅を挟んだ上下の水田と東側の水田の6枚2,890㎡を調査しました。西側は深い崖で長谷川に落ち込んでいてその比高は約30mである。東側は下の沢が南流しており比高差は5mで、この沢を生活用水として利用していたものと思われる。調査地に北東には比高差6mの小さな舌状台地があり、その基部から南に遺跡の中心地があり、山寄り405m、南端で401mある。水田造成で地形が階段状に整地されているが、山寄り土手下が整地によって遺構が削平されているが、大半の遺構は保存状態はよかった。林美好宅は遺跡の中心地にあり、この付近には山津波の押しだしによる花崗岩の巨礫が点在しており、その礫の間を二次堆積のロームが埋まり、さらに上部に黒土層がある。遺構は巨礫のある所を選んで構築してあり、巨礫を取り込んだり、切り崩しながら住居地や土坑が構築されるという特殊な選地をしている。

田立地区は長野県南西部ということと、南面する台地ということで気候は温暖多雨である。温暖な気候を利用して木曾では最も茶畑の多い地区である。地区内には遺跡が16遺跡知られているが、太田垣外遺跡以外は表採で出土遺物は少ない。その中で馬留遺跡（第1図2）は有舌尖頭器があつて注目されている。隣接する山口村では縄文中期の住居地が調査されている原遺跡(3)、縄文後～晩期の川原田遺跡(4)、坂下町では縄文早期の上鐘遺跡(5)、縄文中期の門垣外遺跡(6)、そして草創期の椈の湖遺跡がある。

2. 発見時から注目された遺跡

太田垣外遺跡は昭和23年（1948）3月、宮川亮三氏が水田造成工事中に遺物の出土があり、それを採集していた。そのことを当時木曾西高校生であった安藤茂良氏が知り、遺物を見て直ちに木曾西高校教諭藤沢宗平先生に連絡した。藤沢先生は3・4・5月と現地を訪ねて調査し、出土遺物の豊富さに驚き、木曾地方としては重要な遺跡であると考え、12月11日～14日、19日と木曾西高校地歴部の生徒を中心に発掘調査をして竪穴居址を検出した。この調査を第1次調査とする。

遺物は地元の宮川龍夫氏、高橋功氏、森和也氏によって採集保管されている。第1次調査で出土した遺物の一部は木曾教育会郷土館に保管展示されており、御物石器は宮川氏の寄託によって郷土館に展示されている。

藤沢先生がこの遺跡について注目したのは、縄文時代後晩期の土器と石器の存在であった（第3・4図）。中でも石器の種類之多さと特殊な石器の存在であった。御物石器、石冠、石剣、石棒がそれで、特に御物石器は木曾では3例目の発見であった。しかも長野県内ではこの3例（第4図）のみである。後に藤沢先生は「木曾谷の御物石器」と題してまとめている。

発掘調査では竪穴住居址の炉を中心とした一部を検出し、東壁に接して2個並んだ埋甕も確認している。この埋甕は現在その所在が明確でないが、木曾教育会にこの住居址出土土器（第3図1）が保管されている。これが埋甕の1つかも知れない。

第2次調査は昭和50年（1975）6月8日、田立小学校伊深智先生が農道工事で住居址が発見されたとのことで調査し、縄文時代後期の住居址を確認している。

第3次調査以前の遺物については南木曾町誌資料編に詳細紹介されている。その中で注目される遺物は第3・4図にあげておく。資料編の中で「ある時期において拠点集落であったといえるのではないか」「南木曾のみならず当地方の考古学にとって見過ごせない内容と地理的条件をもつ遺跡であろう…」と、この遺跡の重要性を指摘している。

太田垣外遺跡に関する文献（第2次調査までの）

1949	藤沢 宗平	木曾谷の御物石器	信濃1-3
〃	藤沢 宗平	木曾谷の石冠	信濃1-8
〃	木曾西高地歴部	太田垣外遺跡発掘研究	校風1
1950	藤沢 宗平	考古学的に見た木曾谷の史前文化	信濃2-7
1951	藤沢 宗平	長野県西筑摩郡太田垣外遺跡	日本考古学年報1
1952	木曾西高地歴部	「木曾谷の考古学的考察」についての総合報告	校風4
1954	田立村	田立村史	
1957	藤沢 宗平	木曾谷における縄文文化より弥生文化への推移について	古代25・26
1975	木曾考古学研究会	南木曾町太田垣外遺跡	なかま2-5
1982	南木曾町	南木曾町誌 通史編・資料編	

3. 第3次調査

南木曾町では昭和56年（1981）より町内の農業基盤整備事業に取り組んでいた。平成6年（1994）は田立地区向栗畑工区がされており、その工区内に太田垣外遺跡があった。平成5年にこの計画を知り、長野県教育委員会文化課の指導で秋に現地協議を行った。工区内に太田垣外遺跡は入っているが、水田で遺跡の範囲が明確でないため、収穫後に試掘調査をして範囲確認をすることにした。冬、南木曾町教育委員会の委託を受けて木曾郡町村会が技術指導することになり、埋蔵文化財係新谷和孝が試掘した。結果、遺構の確認と遺物の出土があって、本調査の必要となった。遺跡中心地で整備事業実施で破壊されそうな水田6枚約2,500㎡を対象とし、平成6年度に調査することを決めた。この調査を第3次調査とする。

第3次調査は平成6年8月から12月の5ヶ月間行ない、平成7・8年は図面整理と遺物整理を行い、平成9年に原稿執筆となった。

発掘調査は南木曾町教育委員会が事業主体となり、木曾郡埋蔵文化財調査委託要綱により、木曾郡町村会に発掘調査、整理作業および発掘調査報告書の原稿執筆を委託した。

調査事務局 南木曾町教育委員会

・教育長 杉原良弘 ・文化係長 遠山高志 ・主事 磯村賢治（7～8年）
垂見吉孝（9年）

調査・整理 木曾郡町村会（埋蔵文化財調査整理作業所）

・事務局長 上原左近 ・主任 田沢文章
・埋蔵文化財係 新谷和孝（～8年） 磯村賢治（6年） 神村 透（6年～）
松原和也（7年～） 百瀬忠幸（8年～）

調査作業員

・松川秋芳・小幡慶一・大滝 広・森 定夫・長瀬昭夫・中越 誠・高橋千二
・松川正春・小幡良一・宮川龍夫・高橋 昭・宮川花子・桜井誠吾・森あさえ
・鈴木 勇・大滝良江・中原 工・宮川 稠・小幡和枝・小幡万寿美・柘植日出夫
・久保寺すみ子・大戸美恵子・徳原とら子

整理作業員

・久保寺すみ子・大戸美恵子・徳原とら子・上村由美子・丸山あつ子・横道ふさ子

調査協力

・遺構実測及び航空写真…ジャステック ・レプリカ作成…ムラヤマ
・剥片石器実測…アルカ（角張淳一） ・土器撮影…パスコ

指導・助言

・寺村光晴・室賀照子・野代幸和・末木 健・宮下健司・小林公明・鶴飼幸雄
・平出一治・会田 進・野村宗作・樋口昇一・田村栄一郎・霜出俊浩
・長野県埋蔵文化財センター・銚子市教育委員会・桜土手古墳展示館

中間報告

1994 石にはたらきかけた遺跡 上・下 長野日報 12月 9・10
1995 長野県南木曾町太田垣外遺跡 月刊文化財情報148
〃 木曾郡南木曾町太田垣外遺跡の調査 長野県埋蔵文化財ニュース41
〃 太田垣外遺跡（概報） 南木曾町教育委員会

4. 遺構と遺物

第3次調査で検出された遺構は竪穴住居址21軒（12号住居址は欠番）、土坑（柱穴、土壌墓を含む）は番号をつけたもので890、番号をつけていないものを入れると1,000をこえる。中世焼土址4がある。住居址は縄文時代中期後半19、後期前半1、平安時代1である（第5図）。

遺構全体図（第5図）をみると、台地中央部に縄文時代中期後半の住居址が集中し、南北に長く、西に張り出すように弧状に配置されており、住居址の切り合い、重複もあるので3～4期に分けられるものと思われる。集落のほぼ中央部に林美好宅があって調査できなかった。また北東にも続くようであるが、宅地造成が行われていて調査できなかった。この住居の集中する部分をA地区とした（第6図）。中央部西側には花崗岩巨礫が集中しており、この巨礫の間と風化してもろくなった巨礫は削平して柱穴や土坑などを掘りこんでいた。この土坑群部をB地区とした（第7図）。縄文時代後期住居址はB地区中央部北よりあって宅地造成の下にのびている。2次調査で確認された後期住居址（11号）は調査区東側にあって、後期集落は台地北側の下の沢に近い所に選地している。平安時代住居址（21号）は台地中央部に1軒だけあった。北側未調査区に住居址の存在が予想される。後期土器を副葬した配石土壌墓は巨礫群からはずれた東にある（X）。琥珀を出した802号土坑は巨礫からはずれた南東にある（Y）。第1調査時で検出された住居址は今回の調査で全面検出でき、17号住居址がそれである。

本報告書では遺構は住居址のみに限定し、土坑については配石墓と琥珀を出土した802号のみを取りあげた。遺物は土器を中心に、石器については技術的、経費的、時間的な問題で実測及び計測はできなく、剥片石器の一部については委託して実測した。

1号住居址（8・19・21図、5・6・33図版）

北西端に1軒だけ離れてある。入口部が少し張り出す円形で、主軸N20°E、入口は南にある。大きさは主軸方向4.20m直交方向4.05mをはかる。水田造成で削平されており壁高は北で10cm、南で3cm、周溝の残存でプランを確認できる。東壁に接して周溝が3重になっており、南へ拡幅しているようである。柱穴は4本主柱で、入口部に埋甕をはさんで対支柱がある。炉は床中央より奥よりにあるが石囲い炉の炉縁石は全てはずされている。西側壁に2ヶの花崗岩があり掘削しており、南西のそれは柱穴も掘り込んでいる。埋甕は口縁と底部を欠く胴部を正位に埋めており、埋甕のピットは花崗岩を掘り込んでいる。西壁中央に接して東西58cm、南北54cmの大きさの石敷石囲いの特種遺構があった。底部に偏平な石を2ヶ並べ、周囲を5～15cm大の礫で囲んでいる。石に被熱状況が観察されるので火にかかわる遺構と思われる。

遺物は少ない。埋甕（19図1）は深鉢胴部で剣先文のしっかりした唐草文のつく土器である。破片では唐草文のつく樽形土器（21図1）である。石器は打石斧3、磨石1が出土している。

2号住居址（8・21～23・37・39・40図 7図版）

北端にあって18号住居址の南西で切りあい、28cm深い。前後関係は不明である。奥壁が直線に近い円形で、主軸32°E、入口は南西にある。大きさは主軸方法5.00m、直交方向5.10mをはかる。壁高は削

平されているが西で22~24cm、周溝は全周している。北壁に花崗岩礫を巾1m、長さ2mに居住内に取りこんでおり、床面よりの高さ24cmある。東壁では花崗岩礫が一部壁となっている。炉は中央より奥よりにあるが石囲い炉の炉縁石は全てはずされている。床面に礫の投げこみがあり、そのうちの大きい石は炉縁石と思われる。柱穴は6本主柱であり、入口部に入口部ピットがある。

遺物は比較的多い。土器は中期後半I期(21図4~8)もあるが、多くは唐草文系土器である。下伊那系土器(22図8~19)があり、19は結節縄文がつくのでやや時期が新しいか。咲畑系土器(20~43・22図1~2)もやや多い。加曾利E系土器(3~9)も少量ある。石器は異形石鏃(37図1)、打石鏃3、玄武岩剥片石器2(39図12)、打石斧6(40図1)、磨石4、石錐2、ピエスエスキューユ1などがある。

3号住居址(9・19・23図、8・9図版)

北西に3~7号住居址と5軒切り合う住居群の北端で、6号住居址に13cmの高さでのっている。隅丸方形で、主軸N24°W、入口は南東にある。大きさは主軸方向4.00m、直交3.70mをはかる。壁高は北26cm、東20cm、西28cm、周溝は全周している。炉は中央より奥よりにあつて石囲い炉の炉縁石は全てとりはずされている。南壁床面に炉縁石と思われる石が2ヶあつた。炉床には唐草文系深鉢片を全面に文様を上にして敷きつめていた。土器片を入れてレプリカ復元したので接合及び拓本はとれない。レプリカは南木曾町博物館に保管されている。柱穴は4本主柱で、入口部に埋甕をはさんで対支柱がある。炉奥床に奥壁ピットがある。

遺物は唐草文系土器と少量の下伊那系土器と咲畑系土器がある。埋甕(19図2)は深鉢胴部で口頸部が方形区画文となつていて東濃地方につながる土器である。石器は打石鏃1、磨石5、磨石斧2と少ない。炉敷土器片は唐草文系土器2個体を使用している。

4号住居址(9・24・37・39・40図、10図版)

5軒切り合う住居群の南端で、5号住居址の南縁を24cmの比高差で切っている。前後関係は不明である。円形で、主軸N54°W、入口は南東にある。大きさは主軸方向3.90m、直交3.50mをはかる。壁高は西32cm、東20cm、周溝は全周している。西壁に花崗岩礫があり、南西壁には花崗岩巨礫があり居住内に取りこんでおり、最も高いところで床面より94cmある。炉は中央より奥にあり石囲い炉の炉縁石は全てとりはずされていた。炉上部には10cm大礫の集石があつた。柱穴は4本主柱と思われるが、南壁のが明確でない。入口部に対支柱があり。入口部ピットが主軸方向に2個並んでいる。

遺物は唐草文系土器と下伊那系土器、咲畑系土器があり、土器からみると4号住居址の方が5号住居址より古い。石器は打石鏃4、石匕1(37図2)、玄武岩剥片石器2(39図14)、打石斧3(40図2)、磨石斧1がある。

5号住居址(10・19・24・25図、11図版)

5軒切り合う住居群の中央西にあつて、6号住居址を5cm、7号住居址を4cm深く切り、4号住居址に24cm高くのっている。これらの前後関係については明確でないが、5号住が新しいように思われる。隅丸方形に近いプランで、主軸N13°W、入口は南である。大きさは主軸方向は約3.30m、直交3.50m

をはかる。壁高は北24cm、西20cm、周溝は全周する。南西で花崗岩礫をけずって壁にし、さらに床面を同平面にして周溝、柱穴を掘りこんでいる。西壁外に接して花崗岩礫がある。炉は中央より奥よりにあつて石囲い炉の炉縁石は全てとりはずされている。炉底には土器片を模様を上にして敷き詰められている。柱穴は4本主柱である。

遺物は唐草文系土器で、口縁に方形区画文をもつ土器(25図1)もある。炉底に敷かれていた土器(19図2)は深鉢上半分で、波上口縁をなす土器でこの時期としては珍しい。口縁にそつて2本の波状沈線、頸部にも連弧状沈線があり咲畑系土器である。石器は打石鏃1、玄武岩剥片石器1、打石斧1、磨石7、ピエスエスキュー1がある。

6号住居址(10・19・25・39・40図、12図版)

5軒切り合う住居群の中央にあつて、3号住居址より13cm低く、5号住居址より5cm高く、7号住居址より2cm低い。円形で、主軸N2°Wとほぼ南地となり入口は南である。大きさは主軸方向4.30m、直交方向4.50mをはかる。壁高は北23cm、東11cm、周溝は全周し、西側で2重になり、南西に拡幅したと思われる。西壁に花崗岩礫を壁とし、拡幅によつて住居ないに取りくんでいる。礫最高部は床面より25cmある。炉は中央より奥よりにあつて石囲い炉の炉縁石は東西の2石を残している。柱穴は4本主柱で、入口部に対支柱がある。入口部には埋甕とピットが主軸方向に並んでいる。埋甕は底部を欠く深鉢を正位に埋めている。

遺物は唐草文系土器を主として咲畑系土器がある。埋甕(19図4)は検出時には口縁があつたがやが欠けてしまった。底部を欠く深鉢で、頸部に突帯をめぐらしてその下部に突帯の連弧状文がつくめずらしい施文である。石器は打石鏃5、玄武岩剥片石器3(39図13)、打石斧3(40図3・4)、2石7、ピエスエスキュー2がある。

7号住居址(11・19・26図、13・33図版)

5軒切り合う住居群の南東部にあつて、6号住居址より2cm高く、5号住居址より4cm高くあつて、北半分はプランがわからなかつた。入口部が張り出す形の円形と思われる。主軸N12°W、入口は南にある。大きさは5m前後と思われる。壁は水田造成で削平され東4cm、南2cmしかない。周溝は全周している。東壁中央に花崗岩礫があり、頂部の床面からの高さ30cmある。炉は中央より奥よりにあつて石囲い炉の炉縁石は全てはずされている。柱穴は6本主柱と思われ、柱穴の状況、炉の状況から建て替えがあつたと思われる。入口部には埋甕とピットがある。埋甕は底部を欠く深鉢を正位に埋めている。

遺物は唐草文系土器が少量ある。埋甕は検出時に口縁部があつたがやがやが欠けてしまった。頸部に橋状把手をもち、胴部に腕骨文をつけており、切り合う5軒の中では最も古相である(19図5)。石器は打石斧2がある。

8号住居址(12・19・25~27・37・39・40図、14~17・34図版)

住居址群の中央部にあり最大の住居址であるので首長の家と思われる。大きい住居内に小さい住居があつて、大きい方を8旧、小さい方を8新とする。8号住居址北東に59cmの高さで9号住居址がのつている。

8旧住居址は奥壁直線の扁円形で、主軸N18°W、入口は南南東である。大きさは主軸方向6.20m、直交方向7.60mをはかる。壁高は北66cm、南22cmで南半は削平されている。周溝は全周する。北壁中央には南北にのびる巨大な花崗岩礫があって、それを直にけずって壁とし周溝を掘り、その先端部に炉穴も掘りこんでいる。また南壁には2この花崗岩礫があって、それをけずって壁とし周溝も掘りこみ、さらに柱穴や埋甕1ピットも掘りこんでいる。東側床面にも花崗岩を削平し柱穴を掘りこんでおり、この住居址が一番花崗岩礫を加工削平している。炉は中央より奥にあって石囲い炉の炉縁石は全てはずされ、8新住居址のために貼り床がみられた。貼り床は柱穴にもあった。柱穴は6本主柱でその直径は最大である。入口部に埋甕をはさんで対支柱がある。埋甕は口縁と底部を欠く胴部を正位に埋めていた。新住居址の周溝に接して埋甕2があり、底部を欠く深鉢が正位に埋められ、その上半が削られており、当初小さい住居址があって拡大したものと思われる。南壁巨礫中央に接するように柱状の石が床面に礫に対して直交するようにおかれていた。あるいは入口部石柱とも考えられる。この住居址は火災による焼失廃屋で、炭化材が多く北半分に集中してあり、壁には壁板材と思われる板状炭化材が直に並んでおり、また、柱材には柄穴と思われる孔のあいたのもあった。床面には部分的に被熱による赤化がみられた。

8新住居址は中心をやや西にずらし、主軸もN40°Wと約20°西にふって住居内に、旧住居址の床面を2～3cm深くけずってつくっている。入口は南である。主軸方向4.00m、直交方向3.80mとぐっと小さくなり入口部の張り出す円形である。住居内につくられた新しい住居であることは、旧住居址の炉や柱穴に貼り床してあるのでわかるが、新住居の壁の立ち上がりは観察土層からは明確につかめなかった。周溝は北西隅をのぞいてみられる。炉は中央より奥にあって旧住居址炉を埋めて南側につくっている。石囲い炉の炉縁石は全てはずされ、その一部が床面におかれていた。柱穴は4本主柱である。入口部に底部を欠く深鉢を正位に埋めた埋甕がある。

遺物は旧新の区別がはっきりできていない。埋甕1(19図7)、埋甕2(6)は旧住居に、埋甕3(8)は新住居のものであり、埋甕3は下伊那系土器である。勝板式土器や後半1期土器が1、2片混在しているが唐草文系土器が多く、下伊那系土器(27図9～21)も他の住居に比べ多い。この下伊那系土器は新住居址のものと思われる。咲畑系土器、加曾利E系土器もある。25図4は間違えて貼ってしまったが、新住居址床から出土した橋状把手のある咲畑系土器である。27図7・8も床面から出ている。40・41は台付土器である。石器は打石鏃12(37図3～13)、玄武岩剥片石器10(39図15～17)、打石斧10(40図5・6)、磨石斧1(7)、石図3(9～21)、磨石6、石錘2、石錐2(37図14・15)、敲打器1がある。石皿2個は多孔質安山岩製で両面を使用しており、19は旧住居、20は新住居である。21はこの時期としては珍しい平板石皿(花崗岩)である。

9号住居址(11・28図、18図版)

8号住居址の北東にのってある。円形で、主軸N5°Wでほぼ南北、入口は南にある。壁は北38cm、東27cmと高いが南2cmと削平されている。周溝は全周し、東壁で2重になっており、東へ拡張したものと思われる。炉は中央より奥よりあって、花崗岩礫を掘りこんでおり、石囲い炉の炉縁石は入口側をのぞいて三方に残るが全てではない。柱穴は4本主柱で、入口部に対支柱がある。入口部には主軸方向に並んで2個のピットがある。また、炉奥にも2個のピットと小ピット群があり炉奥石櫃があったものと思われる。南東壁に接して外に花崗岩巨礫がある。

遺物は土器片少量と、打石斧 2、磨石斧 1 と少ない。

10号住居址 (13・28・39図、19図版)

8号住居址の南西にあって、巨礫 2 個によって隔たっており、南半は宅地下にあって調査できなかった。円形で、主軸 N40° W、入口は南東にある。大きさは直交方向 4.00m であり、壁は削平されて西 5cm、東 8cm と近い。北側には花崗岩巨礫が 2 個並んでいて、この礫をはさんで北が 8号住居址である。上屋は礫をこえて 8号住居址までおよんでいたと思われる。柱穴は 4 本主柱で、炉は中央より奥にあって石囲い炉の炉縁石は全てはずされている。

遺物は唐草文系土器でも新しい土器が少量ある。石器は打石鏃 1、玄武岩剥片石器 2 (39図18)、打石斧 5、磨石 2 がある。

11号住居址 (18・28・29・38・39図、20図版)

調査区東側土坑群中において、中央北端に位置しており北半分は宅地下に入って調査できない。主軸が南北の方形か長方形で土坑群と重なりあっていて正確なプランや柱穴はつかめない。東西約 4.40m で、中央に焼土のある掘りこみがあるので、それが炉と思われる。

11号住居址の東側で同様な黒土の落ち込みがあって 12号住居址としたが、プランが明確につかめず住居と断定できないので欠番にした。

遺物は覆土中から中期後半でも新しい時期の土器片が多く (28図15~33)、この住居址のものとしては後期堀之内式土器が多い。石器は打石鏃 15 (39図 1~10)、玄武岩剥片石器 2、打石斧 4、石錐 2 (11)、敲打器 1、磨製石製品 (砥石?) (38図18) がある。

13号住居址 (13・20・29・37図、21・35図版)

礫群をはさんで南部住居址群の北端にあり、14号住居址北半をきっている。花崗岩礫に囲まれた中に住居址をつくり、北東と南東には比高差も高い巨礫がある。円形で、主軸 N12° E、入口はほぼ南にある。大きさは主軸方向 5.10m、直交方向 5.50m をはかる。壁高は 41cm がある。周溝はない。炉は床中央にあり石囲い炉の炉縁石ははずされている。柱穴は 6 本主柱と思われるが土坑もあって明確にできない。入口部に 14号住居址の炉を埋めた外側に埋甕がある。口縁部を欠く深鉢を正位に埋めていた。北壁は扁平な花崗岩礫を壁にし、北東壁や南東壁外には花崗岩巨礫がある。

遺物は唐草文系土器でも新しい土器があり、埋甕 (20図 1) は間延びした唐草文となっている。下伊那系土器の結節縄文が多く、器形のわかる土器として橋状把手をもつ壺形土器 (2) があり、底部は使用ずれの摩耗がみられる。石器は打石鏃 14 (37図16~22)、玄武岩剥片石器 2、打石斧 4、磨石 2、石錐 2 がある。

14号住居址 (13・20・30・37・39図、21・36図版)

13号住居址に大半を削平されて、入口部分が残っている。隅丸方形と思われるが明確ではない。主軸は N5° W で、ほぼ南北となっており入口は南にある。大きさは主軸方向は不明であるが、直交方向は約 5.00m がある。壁高は西 28cm、南 13cm で周溝はない。南東隅に花崗岩巨礫があり、住居内にとりこんで

おり、炉や西壁の一部も花崗岩を掘りこんでいる。13号住居内に残存する炉は炉縁石は全てはずされており、掘りこんだ花崗岩礫が柱状にその上部をのぞかせている。柱穴は土坑もあって明確にできない。4本主柱と思われる。入口部に口縁と底部を欠く深鉢を正位に埋める埋甕がある。

遺物は唐草文系土器と下伊那系土器があり、後者は13号住居址のものと思われる。埋甕(20図3)は口縁と底部を欠く唐草文系土器深鉢である。この土器からも13号住居址の埋甕より古いことがわかる。石器は石鏃4でその中に水晶製(37図23)もある。玄武岩剥片石器2(39図19)、打石斧2、石皿1、磨石1、ピエスエスキュー2がある。

15号住居址(14・30・31・37~40図、22図版)

南部住居群の北西端にある。巨礫をはさんで17号住居址と接している。円形で、主軸N77°W、入口は南東にある。大きさは主軸方向4.00m、直交方向4.00mの大きさである。壁高は北西38cm、南東30cmで周溝は北に一部ある。南東壁に接して花崗岩巨礫があるため入口を南東にふったものと思われる。北東と南西で花崗岩をけずって壁にし、柱穴も掘りこんでいる。柱穴の状況から拡張しており、炉は中央よりややおくによってあり2つがずれてある。石囲い炉の炉縁石は全てはずされている。柱穴は新旧とも6本主柱のようである。入口部に入口ピット2個主軸方向に並んである。西壁に接してピットはよく焼けており、1号住居址の敷石石囲い施設と同様な目的施設と思われる。

遺物は唐草文系土器と下伊那系土器がある。唐草文系土器で縦の羽状沈線の中央に結節縄文をつけた折衷土器(30図57)もある。石器は打石鏃8(38図1~5)、剥片石器2(37図24・25)、玄武岩石器4(39図20・21)、打石斧8、磨石斧2、磨石13、小形石臼1(40図18)がある。

16号住居址(14・31~33・38~40図、23・24図版)

南部住居群の中央にあり、14号住居址の南に接している。住居の大きさやプラン、炉からみて新旧2軒となり、北半が旧住居址でそれを南に広げる形で新住居址が掘りこまれているように思われる。

旧住居址は北半で、円形、主軸は西にずれていると思われるが計測できない。入口は南南東にある。大きさは直交方向4.00mをはかる。壁高は北西37cm、周溝はない。北東壁に花崗礫が3個並び、けずられて壁となり、柱穴も掘りこまれている。炉は中央より奥にあって石囲い炉の炉縁石は全て取り外されている。主柱は6本主柱と思われる。

新住居址は南半にあって、円形で入口部が柄鏡状に張出す。主軸N4°Wでほぼ南北にあり、入口は南である。大きさは主軸方向推定3.00m、直交方向約4.00m、柄部長さ1.00m、巾約1.50mをはかる。壁高は西21cm、東24cmで、東壁では2この花崗岩礫をけずって壁とし、柱穴も掘りこんでいる。炉は中央にあって扁平な花崗岩礫4ヶを長方形にたてて囲んでいる。終末の方形石囲い炉の姿を見せている。柱穴は壁に沿っていくつも並んでおり、中期後半の4本主柱、6本主柱とは全く違っており、後期的な様相を見せている。入口部に2このピットがあって、その中に埋甕の残存と思われる土器片がある。このピットの外に対ピットがあって、柄鏡張出し部主柱と考えられる。なお、16号住居址と14号住居址都の中間部に埋甕があり、それが住居址に伴うものか土坑になるのかは不明である。

遺物は下伊那系結節縄文土器が主体となっており、中期後半終末期の土器もあって、これが新住居址のものと思われる。埋甕1(32図42)は深鉢胴下半分である。埋甕2(33図1)は台付甕の下部である。

石器は打石鏃14（38図6～12）、剥片石器1（14）、玄武岩剥片石器6（39図22）打石斧8、磨石斧2（40図8・11）、磨石6、石錐1（38図13）、平板石皿1、丸石1がある。

17号住居址（15・33・39図、25図版）

南部住居群の南端にあり、集落全体からも南端にある。この住居址は昭和23年（1948）に調査されたもので、その時に炉と埋甕はとりはずされていた。円形で、主軸W-E、入口は東となっており、15号住居址と共にほかの住居址と全く違っている。巨礫との関係と考えられる。大きさは主軸方向4.70m、直交方向5.20mをはかる。壁高は北39cm、東27cm、周溝は全周する。北西に15号住居址との間に横たわる花崗岩巨礫があつてそれを壁としている。炉は中央より奥にあつて、発掘当初は数多くの小石で囲まれていたという。柱穴は6本支柱で、柱穴状況から改築されている。入口部に対支柱があつたようである。また、炉奥に接して浅い奥壁ピットがある。入口部に主軸方向に2この埋甕が口縁を上にしてあり、1つには花崗岩円礫を蓋にしてあつたという。記録によると1つは口径30cm、1つは口径27cmあつたという。図がないのでどのような土器か不明である。

遺物は今回の調査で、唐草文系土器、下伊那系土器など少量ある。木曾教育会郷土館に保管されている結節縄文土器（3図1）は本住居址出土と思われる。石器は打石鏃4、玄武岩剥片石器1（39図23）、打石斧2、磨石1、礫石器1がある。

18号住居址（15・33図）

北部住居群の中央にあつて、南西部が2号住居址によって切られている。壁は削平されていて周溝の存在で住居と確認できた。主軸は明確にできないが、入口は南と思われる。大きさは南北4.90m、東西5.10mの円形である。炉は床中央に焼土痕があり、余り床を掘りこまない地床炉と思われる。柱穴は4本支柱と思われるが明確にできない。

遺物は以上に少なく、中期後半Iと思われる土器片がある。石器はない。

住居の炉の様子、柱穴の不規則さ、そして土器から中期後半Iと推定され、当住居址群の中では一番古いといえる。

19号住居址（16・33図、26図版）

北部住居群の北東端にあつて、住居北東部が宅地下に入っていて調査できなかった。円形で、主軸N11°E、入口は南南西にある。大きさは主軸方向3.70m、直交方向3.70mである。壁高は北17cm、南は削平されてない。東壁中央北よりに花崗岩巨礫が住居内炉近くまで入りこんでおり、南東隅にも巨礫が壁となっている。周溝は全周する。炉は中央より奥にあつて、石囲い炉の炉縁石は全てはずされている。柱穴は4本支柱ある。

遺物は唐草文系土器、下伊那系土器が出土している。石器は磨石1がある。

20号住居址（16・20・33・38図、27図版）

北部住居群の南東端にあつて、壁は削平されてなくなっており、埋甕と炉の確認で住居とした。北西部が8号住居址にのっている。円形と思われるが、周溝の確認もなくプランや大きさは全くわからない。

実測図でみると、炉や埋甕の関係から中心が東にずれている。炉と埋甕からみると主軸はほぼ南北で、入口は南にある。土坑もあつたりして柱穴をおさえることはできない。入口部に花崗岩をけずって深鉢底部を正位に埋めた埋甕がある。

遺物は下伊那系土器が少量ある。埋甕（20図4）は深鉢底部で水田造成の削平によって胴上部が切りとられている。石器は打石鏃2（38図15）がある。

21号住居址（17図、25図版）

住居群と土坑群の中間にあつて、今回調査住居址の中で唯一平安時代住居址である。花崗岩を削平し壁とカマド、柱穴を掘りこんでいる北壁部分を検出して確認した。方形で、主軸N7°E、入口は南である。北壁部推定4.00mの大きさで、壁溝は32cm、カマドは内法で入口部40cm、壁上部で30cmと上に狭くなるように左右に巾10~20cm、深さ10cm前後に溝をほり、そこに石組みの石をすえたと思うが、石はずされてない。火床部は浅い凹み状になっていて火熱で焼けている。カマドの外左右に支柱穴があるが、入口側の柱穴は数多くの柱穴があるため確定できない。

遺物はないがカマドの構造から平安時代である。遺構外から灰釉陶器の出土はある。

22号住居址（17・20図、25図版）

北部住居群東端にあつて、水田造成でほとんど削平されており、埋甕の検出があつて調査し、炉の焼土痕と柱穴を確認して住居址とした。形、大きさは全くわからない。炉と埋甕から主軸N53°E、入口は南西である。炉は中央より奥にあつて、焼土痕がわずかに残っている。炉東側は花崗岩巨礫で削平し柱穴を掘りこんでいる。埋甕も大半がけずりとられ深鉢底部がわずかに残り、正位に埋められていた。遺物は埋甕底部（20図5）のみである。下伊那系結節縄文土器である。

土坑群、配石墓（7・18・20・34・35・40・41図、29~32・36図版）

土坑群は調査区南東部に集中し、巨礫群とその周辺に広がり、住居址群の中にも広がり、北部住居群内では点在し、南部住居群ではやや密にある。1,000を軽く越えているがすべてに番号は付けられておらず、柱穴と土坑と土壇の区別はされていない。いわゆる貯蔵穴はない。大別すれば柱穴と土壇とに分けられ、柱穴は住居址（部分的に焼土があつたり、石囲い炉と思われるものもあつた）と掘立柱建物となる。時期は明確にできないが、中期後半終末から後期前半で、一帯からの出土土器は後期前半が多い。土坑の中には土器、石器の遺物があつたり、石を入れたものもあり、中には焼骨（人?）と思われる骨片のあるものもあつた。個々の中には注目されるものがあつたが観察記録がないためわからない。

花崗岩巨礫群とその周辺に集中するが、巨礫群の中（第7図）では風化によってやわらかくなった石は削平して平坦にし、その中に柱穴や土坑を掘りこんでいる。削平は東西には水平であるが、南北には地形傾斜にそつて北に高く南に低くなっている。けずれないかたい石はそのまま残し、その裾に接して土坑を掘っている。南側に堅い巨礫が並び、比高差1m以上となっている。削平された石はローム面から7~20cm高くなっており、当時の地表がこの高さであつたと思われる。7図でみると石Aが4.70m×3mと最大で、掘りこみも多い。接する北東の石も直径の大きい掘りこみがあり、ここが中心的な位置を示している。北西のB群3ヶは柱穴状の掘りこみが点在している。その南のC群も同様である。南西

のD・E群はかたい巨礫に挟まれてあって、柱穴と直径の大きいものがあり数も多い。南のF、南東のGは掘りこみの数が少ない。直径の大きいのは40～60cmの深さに掘りこんであり墓壙と思われる。それらの中には筋状の掘削痕が残っているものがある。

土壙802号 (18・41・42図、32図版)

巨礫群の東外、調査区東端にある。直径90cmの西にやや長い円形で、確認面からの深さ18cmと浅い。確認面上部、中央より北西よりに琥珀大珠が割れて出土した。接合により5×4.5cm、厚さ3cmの大きさととなり、ほかにも接合できない破片(6こ)があったので、もう1つ玉があった。また、粘板岩製の石匕もあり、土器片は中期後半土器が出土している。

琥珀大珠(42図)は側面左右から穿孔があり、そこに紐を通して吊下げたものである。中央より一方によつての孔であるため平坦面が表になり、巾広で分厚い方が上部に、丸味をもって尖り厚さも薄くなる方が下部になる。上部で巾4cm、厚さ3cm、孔の部分がわずかに巾広になって4.5cm、下部では左右と両側面から薄くなってきており、全長は5cmある。もろいために割れたためか、何か所も穿孔補修したらしく孔がうがたれている。重量27gである。覆土中から粘板岩製石匕(41図6)が出土しており、この石匕は両面とも全体的に磨かれており、さらに全面に丹彩されていたらしく彩痕が残っている。石匕としても特別な目的(祭祀具、呪具)に使われていたものと思われる。

配石墓 (18・20・41図、31図版)

調査区南東端にあって、東西2.80m、南北1.90mと東西に長く、深さ50cmの長楕円形の掘りこみである。北壁は2個の花崗岩礫を利用し、その南側にそつて掘りこみ、南側はやわらかい花崗岩をけずつて壁とし30～40cm大の礫を底部壁にそつて並べている。西壁際に50cm大の偏平礫をおき、その南側に長さ60cm、巾20cm大の円柱上の石を南東向きに横たわらせている。当初は樹立させていた物と思われる。偏平礫の内側に無文の注口土器(20図8)が東に向かつておしつぶれており、偏平礫の上には浅鉢(7)が上を向いておかれていた。普通は埋葬者の頭部に被せるように下向きにおいているが、ここでは正位であった。

浅鉢は精製土器で内面に沈線による模様があり、後期前半の加曾利B式土器である。注口土器は無文の大形土器で、この時期としては珍しい器形をしている。石器では敲打器(41図7)と小さい打石鏃が出土している。

土壙出土の遺物 (20・34・35・40・41図)

中期後半唐草文系土器の土壙は少なく886号(35図2～4)のみで、ほかは中期後半終末(235号、34図1～3)から後期前半の称名寺式土器、堀之内式土器、加曾利B式土器を出土しており、多くの土坑群は後期のものといえる。34図15・16・19は土製円板であり、18は貝殻庄痕文がつく宮滝式土器である。29は底に単孔のある特殊な土器である。器形のわかる土器としては235号からは無文深鉢(20図6)、356号から小形土器(10)、544号から精製鉢(9)が出土している。特殊なものとしては531号から丹彩された滑車型耳飾(41図2)、522号から黒色軟玉製の垂飾玉(3)、572号から翡翠の海浜石(4)、632号から後期のふんばり土偶の右脚(5)が出土している。

遺構外出土遺物 (35・36・38・40・41図)

遺構外からは多くの土器、石器、陶磁器などが出土している。それらのいくつかについてふれたい。土器でみると、当遺跡は前期末十三菩提式土器 (35図5～13) から足跡があり、中期にはいつて初頭の王領ヶ台式土器 (14・15)、前半の勝坂式土器 (16～18) があって、後半の唐草文系土器が特に多く、竪穴住居址がつくられる。中期終末 (20～22) から後期称名寺式土器、堀之内式土器、加曾利B式土器と続いている。今回は晩期土器は出土していない。陶磁器では灰釉陶器、山茶碗があり、中世の天目茶碗、常滑甕、黄瀬戸皿、そして近世の梁付などもある。

石器は打石鏃 (30図16)、剥片石器 (17)、打石斧と磨石 (凹石) は多い。磨石斧 (40図12・14)、石錘は打石錘と切目石錘があり、中に十字に切目を入れたもの (15) もある。石皿、石剣 (石刀)、敲打器 (17)、特殊磨石 (22) など各種がみられる。土器はなかったが弥生時代の太形蛤刃磨石斧刃部 (16) も出土している。

5. 太田垣外遺跡から

第3次調査で本遺跡の中心部を調査できた。結果、縄文時代中期後半の集落と後期の土坑群を確認できた。これにより木曾谷南部の拠点集落といえる。遺構と遺物が多くのかを私たちに呼び掛けているが、その呼び掛けに答えられる十分な力を持っていないため、すべてを聞きとったり、読みとったりできないのが残念である。遺構や遺物を整理して自分なりに受け止めたいいくつかについてとりあげたい。

1) 土器から

今回の調査では前期末から後期前半の土器が確認できた。今までの調査では晩期の土器もあるので、断続はしていても前期末（約5000年前）から晩期末（約2400年前）までの2500年以上、縄文時代の人々が断続してこの地に居住していたことがわかる。土器の出土量と遺構から中期後半（約4000年前）と後期前半（約3500年前）にこの遺跡の盛期があった。

住居をつくって住んだ人々は中期後半で、その土器を見ると、松本平・諏訪湖盆・上伊那北部に中心を持つ唐草文（渦巻文が特徴）系土器で、最近の調査で木曾もその中心地の中に入ることが解ってきた。北部からみると、木祖村深沢遺跡、日義村上の原・お玉の森・マツバリ遺跡、三岳村若宮遺跡、王滝村里宮・崩越遺跡、上松町金比羅・最中上・吉野遺跡、大桑村万場遺跡、山口村原遺跡などで住居址が調査され資料も多くなってきている。しかし、未報告の遺跡（深沢・お玉の森・万場・吉野）もあつたりして、比較検討して変化をたどる所まではいっていない。長野県史では後半を4期にわけている。それを参考にして当遺跡の土器を見ると、Ⅰ期は断片的な資料で、住居址も不確かである。Ⅱ期は唐草文系土器の盛行する時期で、整然とした唐草文や腕骨文がつけられている古い時期と、咲畑系土器が伴出する新しい時期とに区別できそうである。Ⅲ期になると下伊那系土器（沈線区画文）、咲畑系土器（方形区画や橋状把手）、そして加曾利E系土器が伴出する。Ⅳ期になると、唐草文は間のびした文様になり、下伊那系土器（結節縄文）が多くなる。これを古い時期とすると、U字形沈縄文がつく新しい時期とにわけられそうである。

中期後半のⅠ～Ⅱ期までは木曾谷上流部、松本平とのつながりが強いが、Ⅱ期の新しい時期から木曾川中流の東濃地方からの北上がみられ、さらに神坂峠、清内路峠、大平峠を越えての伊那谷からの進出も強くなり、Ⅳ期には伊那谷の勢力下に入っている。この点、木曾谷上流部とは違っている。

後期前半土器は関東から中部地方一帯を分布圏とする称名寺式・堀之内式・加曾利B式土器を出土している。断片的に東海地方や近畿地方の土器もある。

2) 石器から

数量や大きさの計測はできなかった。一見して思ったことでは石器の出土量が多いといえる。

剥片石器では打石鏃が多い。中期後半の住居址からの出土が他遺跡に比べて多い。中期は黒曜石原料とするものが多い。ついで下呂石となっているのは、隣接する坂下町から峠を越えて行けばすぐ下呂町であるためと思う。後期になると下呂石が主体となるのが木曾谷の一般である。11号居住址で下呂石が

黒曜石の4倍となっているのはそれを示している。原料で注目されるのは水晶である。東濃地方は鉱物産地として注目される地方であり水晶も多い。田立地区でも水晶が産出することもあって水晶の剥片が多く、石錐もある。大型の剥片石器は玄武岩製で多くの住居址から出土している。不定形の剥片の鋭利な側辺を刃部としているが、傾向としては横刃タイプが多い。2号居住址からは整形された石匕がある。王滝村大岩橋遺跡は中期から後期にかけての玄武岩剥片石器製造地であり、そこからの搬出品と思われる。

打石斧は木曾谷上流部とは石材と大きさが違いがある。石材はそのほとんどが凝灰岩で風化すると柔らかい石である。大きさは全体に小さく、製作もどちらかというと雑である。刃部を見ると使用による磨耗がみられ、花崗岩の前平や堀りこみに使われたものと思われる。

磨石斧は体部が丸い乳棒状磨石斧（伐採斧といわれる）が少なく、体部が長方形の定角式磨石斧（木材加工具といわれる）が多い。しかも大小があるので用途に応じて大きさが決まっていると思われる。乳棒状磨石斧が緑泥岩であるのに対して、定角式磨石斧はほとんどが蛇紋岩である。長さ3.5cmという小さく綺麗に磨かれたものもあって、これは実用品ではないと思われる。変わったものでは磨石斧片を磨いた5cm大のものもある。

磨石・凹石は併用されるものと区別できるものがある。遺構や遺構外どちらからも多くあったのが扁平石けん状の川原石で、表面が風化していることもあって磨石かそうでないのかを区別できないものがあった。いずれにせよ木曾川から持ち上げたものであり、安山岩は木曾川以外から搬入されたものと思われる。石皿は当遺跡だけではないが多孔質安山岩製が多い。特定遺跡で製作があって、そこからの搬入品と思われるがその生産遺跡はまだ知られていない。当遺跡の石皿で特徴的なのは両面が使用されている点である。側縁に刻文があるのは発見されていない。

翡翠の海浜石は3.7cm×26.0cmの厚さ1.0cmの扁平石である。まったく磨かれていない海岸で拾われたままである。長期間に渡って手で愛玩していたために油がついてテカテカに光っている。日本海の糸魚川市附近の海岸で拾われたものが多くの人の手を経てもたらされたものと思われる。

3) ふんばり土偶

右脚部しか出土していないが、足裏が5.0cm大、脚長約8.0cmと大きい。中空ではなく中実の立像土偶であって、脚部には沈線で区画された中に細かい縄文をつける磨消縄文で飾っており、縄文時代後期堀之内期の土偶である。この時期の完形土偶は上伊那郡辰野町新町遺跡、山梨県後田遺跡のものが有名である。いずれも中空土偶である点が違っている。どちらも全長20.0cm大である。脚部の長さでいくと太田垣外遺跡の方が1.0cm長いので、もし完形であれば軽く20.0cmをこえる大型土偶であったと思う。この時期の土偶は相撲の四肢のように足をふんばっているのが特徴である。

4) 住居址

住居址については、大きさ、主柱、入口等いくつかの視点があるが全体の検討はできていない。

炉緑石をはずしている。中期後半の住居址は非常に規則的で、プランはともあれ、大きな住居は6本主柱、小さなのは4本主柱で、入り口と奥を結ぶ主軸に対して線対称に配置される。炉は主軸の中点を炉前部にして、床面を深く掘り方形に石囲いをする石囲い炉で、炉奥と左右は扁平石をたて置き、入

口側は柱状か扁平石は横にしておくのが普通である。太田垣外遺跡では16号新住居址以外はすべて炉縁石がはずされて、完存する代表的な方形石囲い炉はなかった。炉縁石をはずす行為については、二つの説がある。一つは住居を廃棄する時にははずすという破壊行為、もう一つは新しい住居をつくる時再使用するためにはずして持って行く、である。調査した範囲内の住居に炉縁石がないということは、新しいのがこの遺跡の中につくられていないので、隣接する他遺跡へ運んだとも考えられるが、木曾川へいけば採取できるのだから、廃棄時の破壊行為が普通であつと考へたい。

入口部施設としては埋甕とピットがある。埋甕は19軒中12軒にあつて、割合的には多いといえる。いずれも口縁を上にする正位(第43図)に埋められている。埋甕はⅡ期からあつて、Ⅱ期は4軒中3軒(1、8旧、7)にあつて、いずれも唐草文系土器で底部を欠いている。Ⅲ期新は4軒中3軒(6、14、17)にあつて、6号住居を除いて唐草文系土器である。すべて底部を欠いている。Ⅲ期は3軒中2軒(3、8新)にあつて唐草文系土器ではない。底部を欠いている。Ⅳ期は6軒中4軒(13、16、20、22)にあつて新しい唐草文系土器(13、162)と結節縄文土器(20、22)がある。また13、20、22号住居址のは底部がある。傾向としては唐草文系土器成立と同時に埋甕が施設として採用され、唐草文系土器深鉢の胴下部を欠損させて埋めている。Ⅱ期新から異系統土器を使うようになり、Ⅲ、Ⅳ期にと多くなる。Ⅲ、Ⅳ期の異系統土器は下伊那系土器である。Ⅳ期になると底部を欠損させないで使用している。また、Ⅳ期の埋甕例は少ない。2個の埋甕を持つ住居址で、8旧住居址のは底面の前半で上部が削り取られている。17号住居址のは不明である。16号住居址のはどちらも土器片であつて、果たして埋甕かということについては検討の要がある。入口部ピットについては埋甕と同目的のものであるかについてはもう少し検討する必要があるが、2、5、9、15号住居址では単独に、1、6号住居址では埋甕と共にある。

奥壁部施設はこの時期に石壇遺構が注目されている。木曾では日義村マツバリ遺跡で石柱石壇、お玉の森遺跡で敷石石壇が知られている。石がなくてもそれにかわるものとして奥壁部ピットの存在が指摘されてきている。当遺跡では石壇遺構はないが奥壁部ピットは3、9、17号住居址で確認されている。1号住居址西壁中央に接してある石敷石囲い遺跡は奥壁部ではなく、入口からみて左居間になるが石壇に類する祭祀的な性格の遺構とも思われる。石はなかったが同様の位置にある15号住居址被火熱ピットも同じ性格のものと思われる。どちらも火を使っていることから、上屋が床面から相当高かったものと推定される。今後、他遺跡の類例を見て検討したい。

火災廃棄された住居址と考えられる8旧号住居址は、当遺跡で最大の住居址である。住居廃絶時に人為による火災廃棄は日義村お玉の森遺跡で3軒知られている(未報告)。こうした行為は各地であるが全ての住居地ではなく、集落内の特定住居址のみのようである。8号住居址では火災廃絶後、それ程時間をおかないで内部に新住居址をつくっている。同様なあり方はお玉の森遺跡でも1例あつた。

5) 集落立地

遺跡は北から南にのびる舌状舌地のどちらかといえば集落に近い所にある。住居址群は台地の中でも縁辺ではなく中央部にあつて、花崗岩巨礫群を意識し、その西側に北から南に、西へ張り出すような結果的は弧状になるように選地している。もっと上部や西へよれば巨礫はなくなるのに点在する巨礫は削れるものは削り、住居内に取り込めるものは取り込み、あるいは壁として利用したりして石との共存が強い。

今回の調査で集落の中心部を調査したが、南部にのびるほぼ中間に民家があってその部分は調査できなかった。そこと北東の民家下部にものびている可能性があるので、中期後半住居址は30軒前後はあったものと思われる。北から南への傾斜地であるため最北と最南とでは比高差が4 mある(第44図)。

今後、十分に検討する余地があるが、出土土器から大雑把に分類してみた所、I期の住居址は2軒(9、18)で、上部中央にあって、入口は南にある。II期古は4軒(1、2、7、8旧)で、入口方向からみると、1、2が南西、7、8旧が南であって、2軒がセットになっている。II期新は4軒(4、6、14、17)で、上部(4、6)と下部(14、17)との2群になっている。III期は4軒(3、5、8新、10)で、やはり、3、5号住居址と8新、10号住居址の2軒単位が考えられる。IV期は6軒(13、15、16旧、19、20、22)で、上部3軒(19、20、22)と下部3軒(13、15、16旧)にわけられる。IV期新は1軒(16新)となる。末調査部があるので推定通りとはいえないが、2軒1単位で当初1群だったのが2群(3群かも)となり、IV期には急減して1軒となっている集落の変遷が考えられる。後期になって、巨礫群の北東上部から東に集落を移しているようである。

巨礫群は伊勢山あるいは摺鉢山の山崩れによる押出しによってできたもので、ローム堆積後も巨礫は頭をのぞかせていた。縄文中期人がこの地に来た時も巨礫群は目に見えていた。意識してここを選地したとしか考えられない。同様な選地は郡下では上松町吉野遺跡群E地点(1997年調査、未報告)があり、県内では上伊那郡飯島町尾越遺跡がある。県外では山梨県釈迦堂遺跡がある。注意して調べれば同様な選地の遺跡はあると考えられる。尾越遺跡も釈迦堂遺跡も住居内に巨礫を取り込んである(第45図)。当遺跡では意識して削平したり、掘り込んでおり、何がなんでもここに住居を建てるんだという意欲が強い。

6) 石を刻む土坑群

調査B地区は巨礫群が集中する地区で、風化して軟らかくなった花崗岩は地表面と同じレベルに削平し、硬い花崗岩はそのままにして、その裾部や礫と礫の間の土層部に土坑を掘り込んでいる。土坑の中には直径の大小があって、小さいのは堀立柱建物の柱穴と思われ、直径の大きくて深いのは土壙(お墓)と思われる。削平と掘りこみの最もすごいのが第7図Aとした石(第46図)で、約5 m×3 mの大きな石で、北東に接する石と共に削平されている。この石の中に大小50余りの穴があり、浅いのは5 cm、深いのは60 cmの深さとなっている。No.245、246、292、294、561はその大きさから墓としてのものと思われる。282、283、285には石斧で掘り込んだ時の加工痕と思われる溝状痕がのこっている。

前にもふれたがこれらの掘り込みはほとんどが縄文時代後期のものである。日義村マツバリ遺跡では土壙の上に山状に集石しており、王滝村大岩橋遺跡では弧状の溝に集石しており、大桑村大明神遺跡で敷石遺構の上に集石などあって、後期という時期は石へのこだわりが非常に強い。しかも、それは墓と結び付いている。当遺跡には集石はない(水田造成する前にはあったかも知れないが)が、石の中に石を加工しており、石へのこだわりをみせつけている。石と縄文後期人との精神的な結び付きを考える重要な遺跡といえる。

7) 琥珀と翡翠

当遺跡で注目された遺物が琥珀玉であった。土坑802号から出土した。その形状からみると埋葬者に

着けたまま埋葬したのではなく、少し土を埋めてから埋納したもののようであり、2個あった。1個は破片化してその大きさは解らないが小玉ではないことは破片の大きさから推定される。

琥珀は松柏科植物の樹脂が化石化したもので、硬度は2～2.5と軟らかく、比重は1.05～1.09と軽く海水に浮くものもある。色は黄色、黄褐色、赤褐色などで、透明から半透明で美麗である。中国では虎の魂が石に変わったものだと信じられ、琥珀と呼ばれた。火に燃やすと香気を出すので、香気を放つ物質（アラビア語のアンバー）から「amber」と呼ばれた。また、擦ると電気を発する事で「エレクトロン」とも呼ばれた（古代ギリシャ）。琥珀の持つ美しさ、昆虫を中に有する、軽い等もあって、東洋、西洋で古くから宝石として大事にされていた。

日本では、縄文時代前期から古墳時代に玉に加工されており、現在でも宝石の一つとなっている。日本での産地は北海道から九州まで各地にあるが、縄文時代の産地で玉加工されていたのは、北海道聚富村附近、岩手県久慈市、福島県常磐岩田（いわき市）、千葉県銚子市の4地点といわれている。八王子市清川産は小さく軟質であって装身具としての加工はできないという。また、岐阜県瑞浪市産は小さすぎて加工できないという。久慈市では現在も採掘されており、最大塊は40cmをこえる大きさである。銚子市では20cm大のものがあり、粟島台遺跡は原石、未製品、製品の出土があつて、琥珀玉加工遺跡として知られている。江戸時代の書物によると産出地に信州とか飛騨井上があげられており、佐々木清文（1983、岩手）の報文によると根拠ははっきりしないが、長野県木曾郡付近があげられている。玉の研究をしている寺村光晴さんによると諏訪地方に琥珀玉出土地が集中していることから原産地存在の可能性を指摘している。

琥珀は風化に弱いため発掘時に壊れやすい。そのため形をしる資料が少ないし、調査時に見落としてしまう可能性が強い。現在、縄文時代の琥珀玉を出土する遺跡は50余である。北海道、青森、岩手、山形、福島などの東北、千葉、埼玉、東京、神奈川の関東、山梨、長野、岐阜の中部高地で、すべて東日本であつて西日本にはない。遺跡数では北海道（10）、岩手（12）、千葉（9）と原産地のある地域に多い、そうした中で長野の10遺跡は注目される。このうち9遺跡が諏訪に集中し、太田垣外遺跡のみ遠く離れて存在しているのが注目され、現在の所、縄文時代琥珀玉の西限となっている。同様な存在として注目されるのは岐阜県飛騨の丸山遺跡である。安房峠をこえた丹生川村にあり、太田垣外遺跡と同じく諏訪地方からの搬出品と思われる。

山梨県甲府原遺跡出土琥珀玉は赤外吸収スペクトルによって産地同定を行つて、福島県いわき地方産出の可能性が強いとされた。が、銚子産の可能性も捨てきれないという。中部・関東の琥珀出土遺跡の分布を見ると、銚子を東端として東京―山梨―諏訪―木曾と結ぶ線が考えられ、諏訪から関東へは甲州街道、諏訪から木曾は中山道である。諏訪を中心にして考えると黒曜石の道にもなり、「アーバンルート」と呼べる。

琥珀は原料の関係やもろさから大きな玉を製作するには限度がある。そうしたことから全長が3cmを越える玉を大珠と呼んでいる。現在大珠の出土遺跡は10遺跡位と思われる（第48図）。自分のつかめられた遺跡でその大きさ順にみると、東関戸遺跡1…6.5cm、中ッ原遺跡…6.4cm、粟島台遺跡1…4.7cm、棚畑遺跡…4.4cm、丸山遺跡…3.7cm、南平遺跡…3.7cm、東長山遺跡…3.6cm、粟島台遺跡2…3.5cm、向郷遺跡…3.3cm、がある。太田垣外遺跡は全国で6番目に大きい大珠といえる。これらの大珠は縄文時代中期で、その多くは土壌出土で、東関戸遺跡では同土壌内から翡翠大珠が出土している。

大珠といえば普通は翡翠と考える。5 cm前後の大きさを大珠と呼び、琥珀より一回り大きい。最大全長15.95cmあり、国の重要文化財となっている。現在全国で200余見つかっており、その分布は北海道から九州までであるが、そのほとんどが東日本で、中部・関東地方で70%をしめている。全国にいくつかの原産地があるが、縄文時代の原産地としては新潟県姫川と青海川で、そこからの転石を採取しての玉造遺跡は両川下流の日本海沿岸沿いに新潟県・富山県の分布し、姫川上流の長野県大町地方でも知られている。大珠の分布をみると、日本海岸沿いに南下するもの、北上するものがあるが、内陸部には糸魚川を溯上して松本平に入り、ここで2つにわかれて、1つは伊那谷を南下する東山道ルート、もう1つは甲府から南関東に至る甲州街道ルートがある。大珠ではないが、翡翠は木曾でも日義村芝垣外遺跡・マツバリ遺跡、三岳村白川遺跡、南木曾町太田垣外遺跡、山口村川原田遺跡で発見されており、中山道ルートもあった。これを「ヒスイロード」と呼んでいる。このヒスイロードを見ると、松本平南部塩尻地方でアーバンロードと交錯しており、甲州街道—中山道ルートは両者が重なる。

翡翠大珠の出現と盛行は縄文時代中期である。琥珀大珠の製作も全く同じであり、両者の製作は機を一つにするものと思われる。生産量が少ないだけに琥珀大珠はより貴重であったと思われる。

翡翠は石の硬さよりも、石のもつ色、緑色が好まれた。緑＝青と考えられ、縄文中期の住居内に持ち込まれる棒状川原石や石柱石壇の石柱の石は緑または青の石が多い。縄文人にとって特別視される色といえる。もう一つ特別視される色は赤である。朱（丹）で塗られた土器、土偶、耳飾、そして玉では琥珀を意識し、死からの再生、復活を意味しているといわれる。赤は火、血につながり、血は生命と考えられ、火は浄化であり、けがれをのぞくものであった。どちらも特別なものであり「聖なる玉」であった。

大珠の出土状況をみると、粟島台遺跡は表面採取、楯原遺跡は発掘調査中包含層の中から出土した以外は全て土壌出土である。千葉県東長山遺跡、東京都向郷遺跡、神奈川県東関戸遺跡、岐阜県丸山遺跡、県内では原村南平遺跡、茅野市中ッ原遺跡、同棚畑遺跡、岡谷市梨久保遺跡、そして太田垣外遺跡がそれである。東関戸遺跡では同一土壌から翡翠大珠と琥珀大珠が出土し、中ッ原遺跡では隣接する土壌から大珠が出土している。このことは両者が密接な関係、あるいは同一目的であったことを示す。土壌はお墓である。出土状態から見ると底部から出土するものと、底部から浮いて出土するものがあり、前者は埋葬者に装着したものであり、後者は埋葬者のものを副葬したものである。いずれにせよ、どちらの大珠もどの遺跡から出土するというものではなく、同一の遺跡の数多くの土壌の中でも出土する土壌は限られている。このことから大珠をもつ埋葬者は、集落の中でも特別な人であり、地域社会の中でも特別な人である。聖なる玉を身につけることが出来る人、聖なる玉は呪具であり、威信具でもあって保持する特別な人は祭祀者といえる。

縄文時代中期の東日本は遺跡数の急増があり、大集落が急増する。これは人口増を示している。温暖な前期から冷涼（寒冷）な中期へと気候変動があった時期で、食料獲得も狩猟中心から果実根栽へと変化している。こうした中で中期後半は気候の寒冷化が進み、自然景観が大きく変化し、人口増のひずみが食料獲得の苦勞と重なって、社会集団への強い規制、祈りによる働きかけが強い時期である。だからこそ社会集団の中で祭祀者は必要であり、強い力を持っていた。その力のシンボルとして大珠の所持となった。

太田垣外遺跡の琥珀大珠は特別な祭祀者の存在を示し、当遺跡が木曾谷南部の拠点集落であったこと

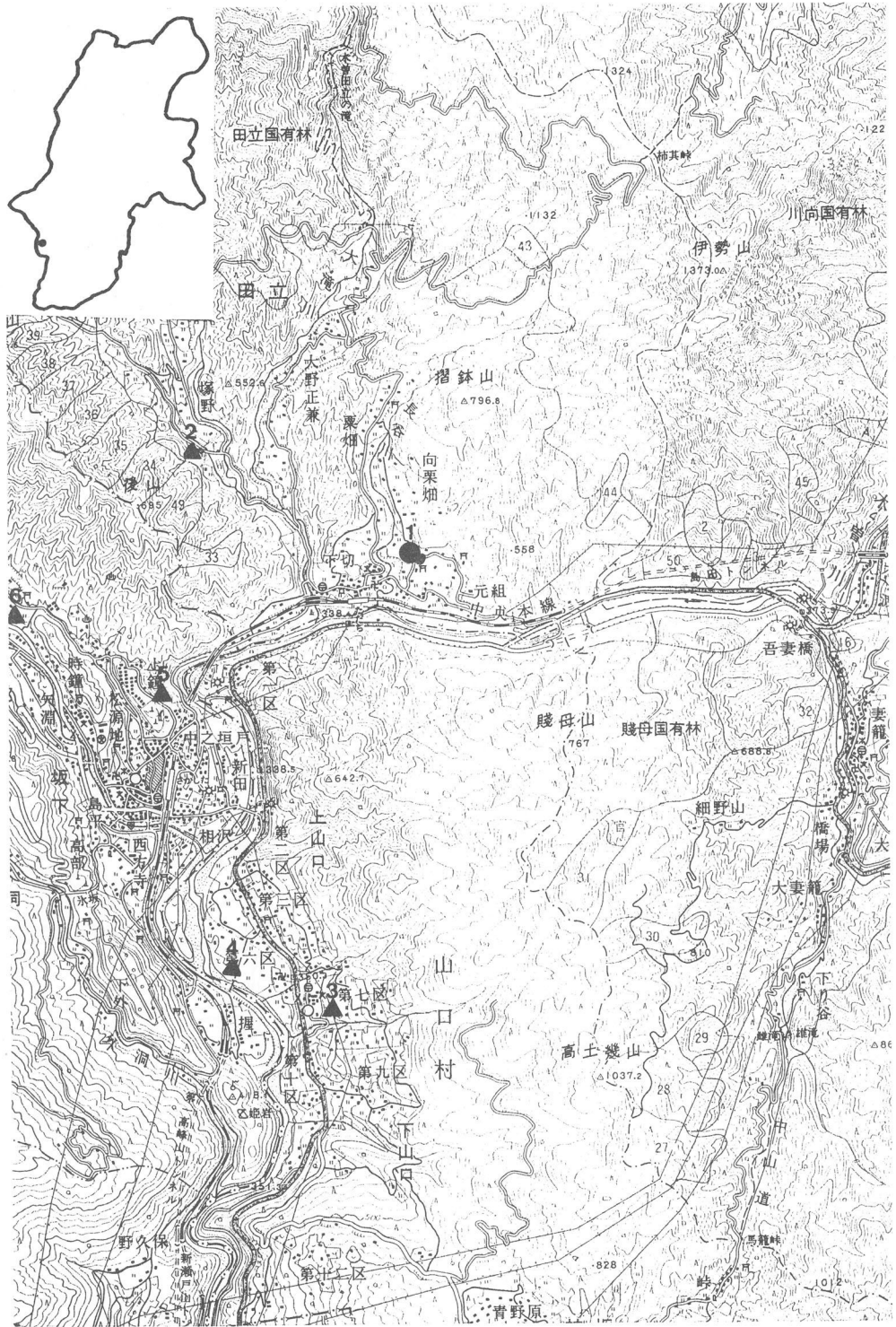
の証左でもある。

琥珀関係の文献

- 1952 野口 義麿 石器時代の琥珀について 考古学雑誌 38-1
- 1952 大場 磐雄 千葉県銚子市粟島台石器時代遺跡調査報告 上代文化 22
- 1971 八幡 一郎 交易 琥珀 新版考古学講座 9
- 1973 寺村 光晴 琥珀の大珠 その意味するもの 新版考古学講座 10月報
- 1973 寺村光晴 安藤文一 千葉県粟島台遺跡の調査 考古学ジャーナル 89
- 1974 室賀 照子他 本邦出土琥珀の産地分析 日本科学雑誌 9
- 1975 長野県教育委員会 中央道埋蔵文化財発掘調査報告書 諏訪市その3
- 1976 長野県教育委員会 中央道埋蔵文化財発掘調査報告書 茅野市・原村その1
- 1976 室賀 照子他 外国産及び本邦産コハクの産地分析 分析化学 25-1
- 1980 長野県教育委員会 中央道埋蔵文化財発掘調査報告書 岡谷市その4
- 1982 伊藤 睦憲 千葉県粟島台遺跡発見の琥珀製大珠 考古学雑誌 67-4
- 1982 福島県教育委員会 母畑地区遺跡発掘調査報告書 X
- 1982 松下 貢 琥珀 縄文文化の研究 8
- 1983 佐々木清文 琥珀の産地と流通 上野山遺跡発掘調査報告書
- 1984 寺村 光晴 古代人の交流・交易 別冊歴史読本 9-4
- 1985 寺村 光晴 日本先史時代の琥珀 和洋女子大文学部創設35周年記念論文集
- 1985 室賀 照子 琥珀は語る 末永先生米寿記念考古学論文集
- 1986 岡谷市教育委員会 梨久保遺跡
- 1986 茅野市 茅野市史 第1編 原始
- 1986 田村栄一郎 琥珀誌
- 1986 宮下 健司 滑石・翡翠・琥珀の分布 長野県史考古資料1-4
- 1988 富士見町教育委員会 唐渡宮
- 1989 藤田富士夫 玉 考古学ライブラリー52
- 1990 茅野市教育委員会 棚畑
- 1990 粟島台遺跡発掘調査会 銚子市粟島台遺跡発掘調査報告書
- 1991 下大槻東関戸遺跡 桜土手古墳展示館だより 2
- 1992 吉田 格 縄文時代の琥珀 考古学論究 2
- 1993 岡村 道雄 埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた時代の墓葬礼 論苑考古学
- 1993 山梨県教育委員会 甲ツ原 遺跡概報
- 1993 デッター・シュレー 日本の琥珀
- 1994 五味信吾・野代幸和 山梨県北巨摩郡大泉出土の産地童貞同定(1)研究紀要 1
- 琥珀大珠 桜土手古墳展示館だより 6
- 1996 山梨県教育委員会 甲ツ原遺跡 II

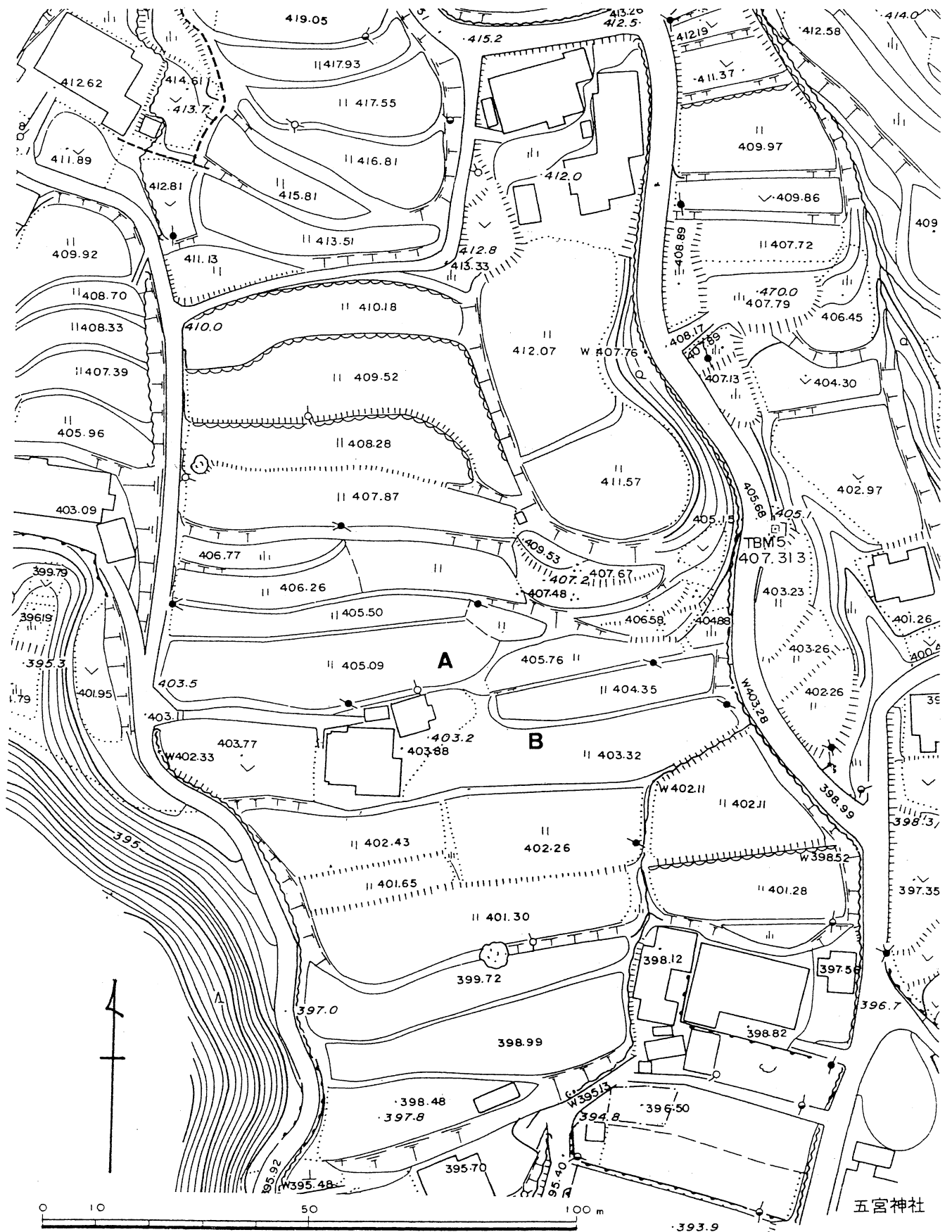
報 告 書 抄 録

ふりがな	ながのけんきそぐんなぎそまち おおたがいといせき						
書名	長野県木曾郡南木曾町 太田垣外遺跡						
副書名	農村基盤総合整備事業に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
著者名	神村 透						
編集機関	木曾郡町村会						
発行機関	南木曾町教育委員会						
所在地	〒399-5302 長野県木曾郡南木曾町吾妻52-4 TEL 0264(57)3335						
発行年月日	西暦1998年12月1日						
ふりがな 所在遺跡名	ふりがな 所在地	コード 町村遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
おおたがいと 太田垣外 いせき 遺跡	ながのけん 長野県 きそぐん 木曾郡 なぎそまち 南木曾町 たち 田立 もとぐみ 元組	60	30°38'27"	137°33'59"	1994.6 ~12	2,500㎡	農村基盤整備 事業に伴う 埋蔵文化財の 記録保存のため の発掘調査
遺跡名	時代	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項		
太田垣外	縄文時代		竪穴住居址 18 掘立柱建物 土坑 約1,000 配石墓 1	縄文土器（中～後期） 石器 琥珀大珠 土偶（脚部）	・花崗岩礫を取りくんだ 中期住居址群 ・花崗岩を削平して掘り こんだ墓壇柱穴群 ・琥珀大珠を埋納した 土壇墓 ・土器を副葬した配石墓		
	平安時代		竪穴住居址 1				
	中近世		焼土痕				

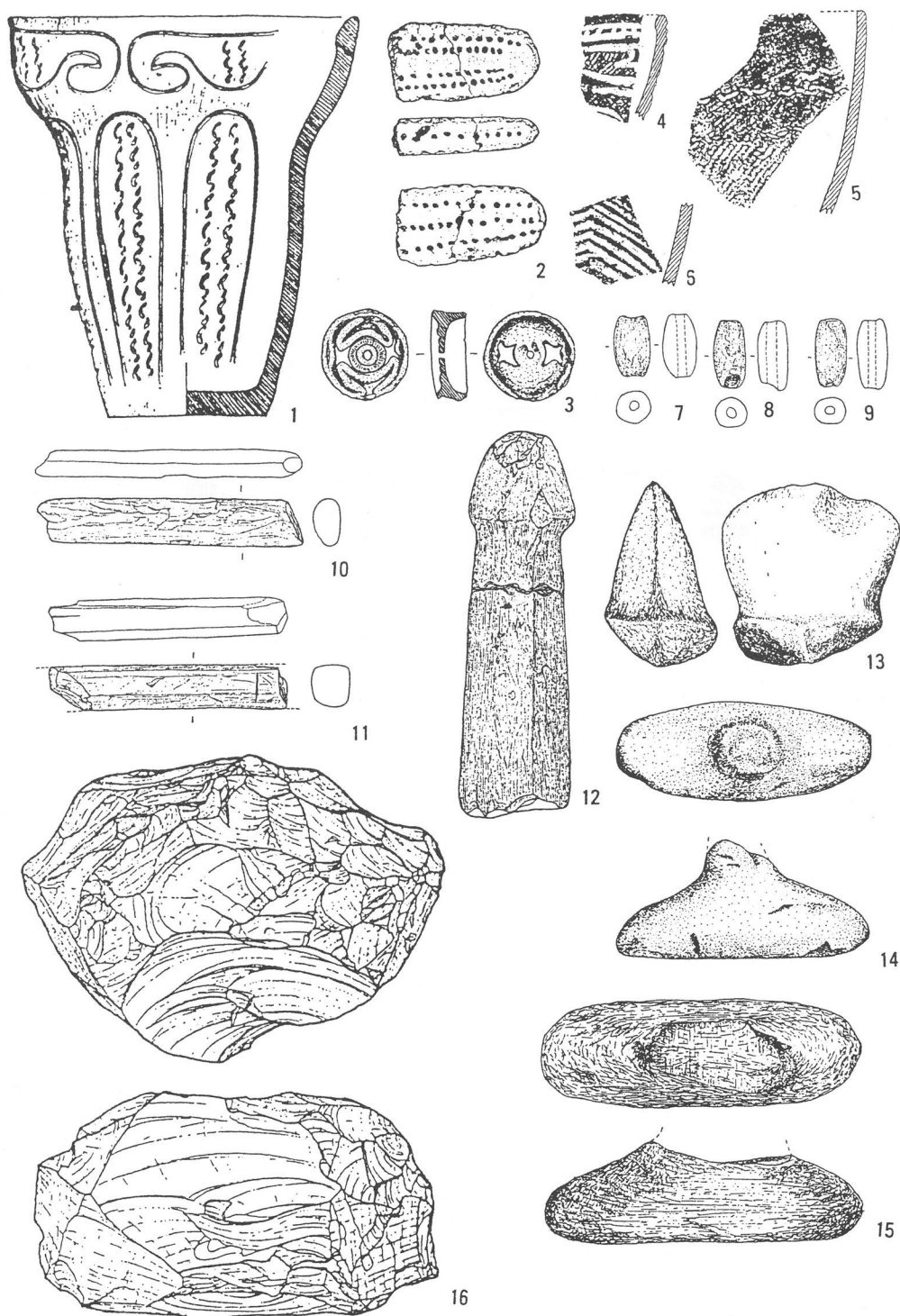


第1図 太田垣外遺跡付近地図

(1.太田垣外 2.馬留 3.原 4.川原田 5.上鐘 6.門垣外)

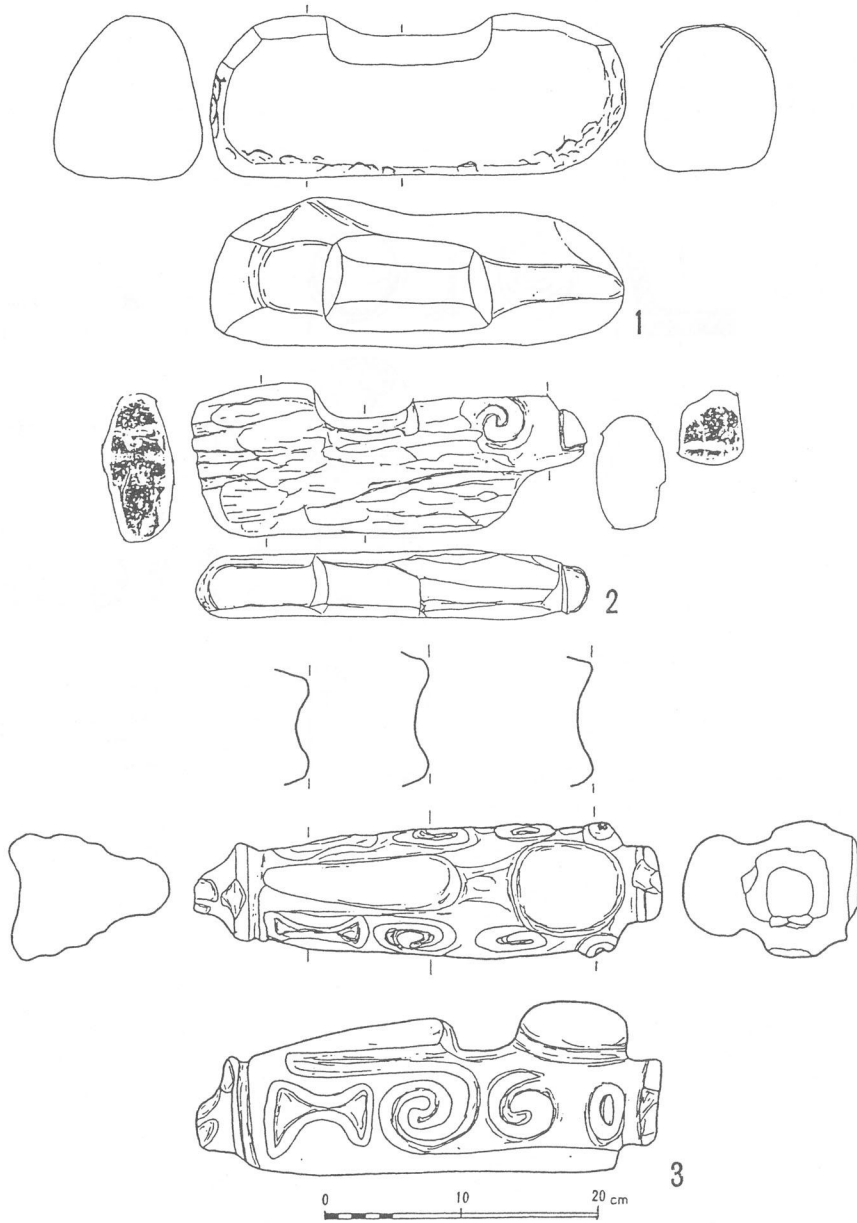


第2図 太田垣外遺跡地形図 (1:1000)

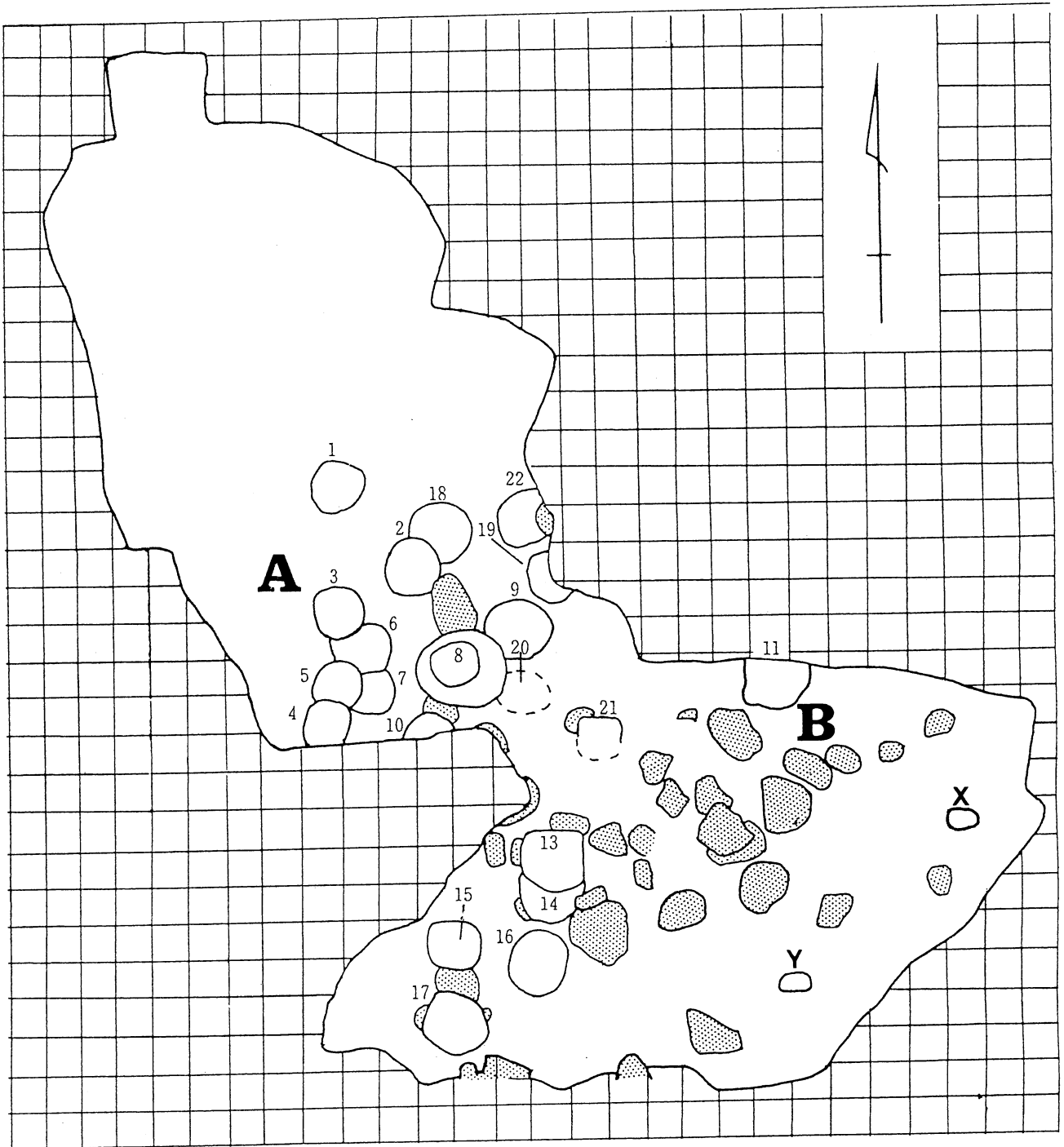


第3図 採集遺物および1次調査出土遺物

1. 17住居出土土器 2. 土偶 3. 耳飾 4・5. 晚期土器 7. 条痕文土器
7~9. 土錘 10・11. 石剣 12. 石棒 13~15. 石剣 16. 下呂石



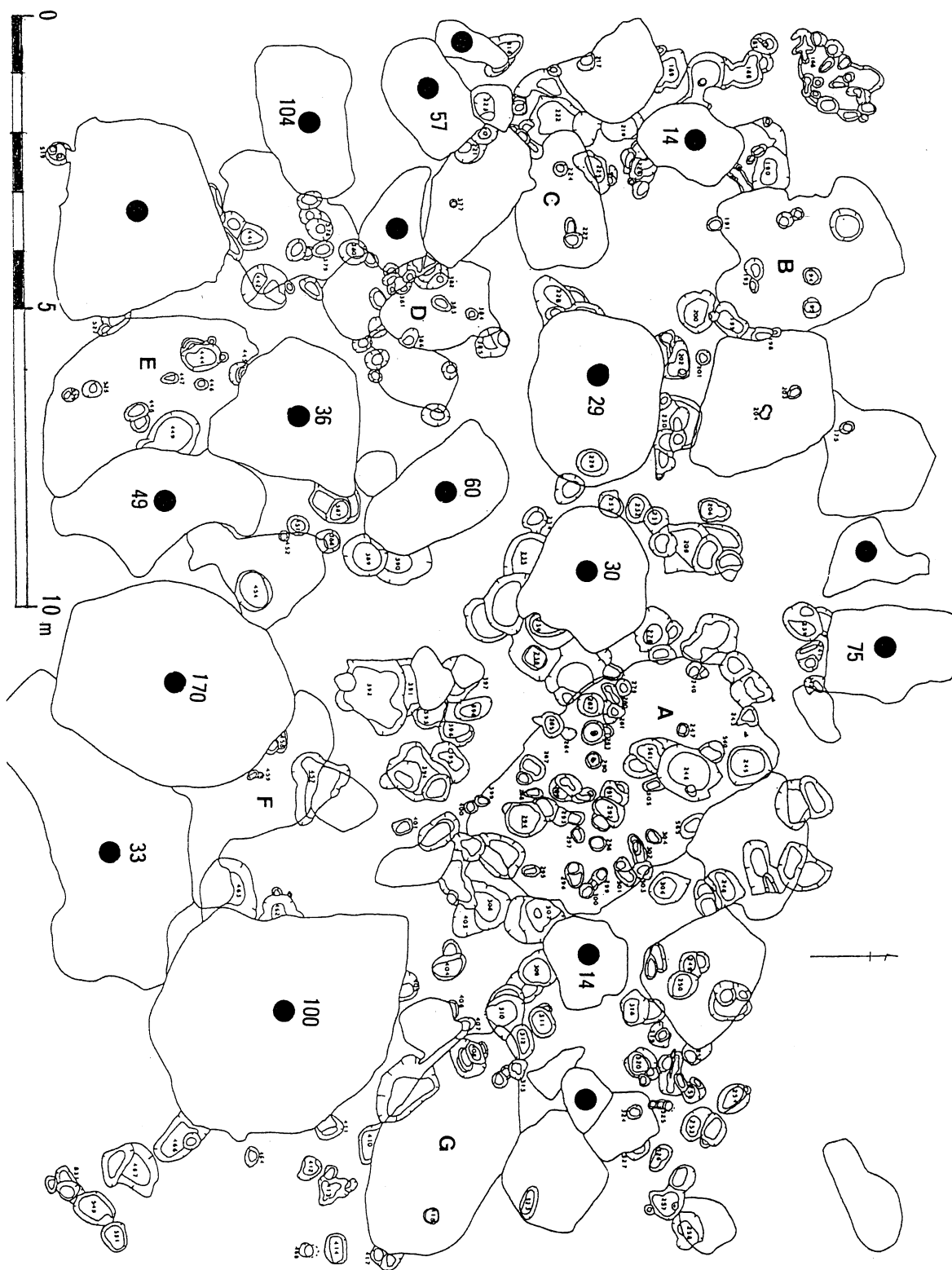
第4図 木曾出土の御物石器(1. 太田垣外, 2. 新床, 3. サンガリ)



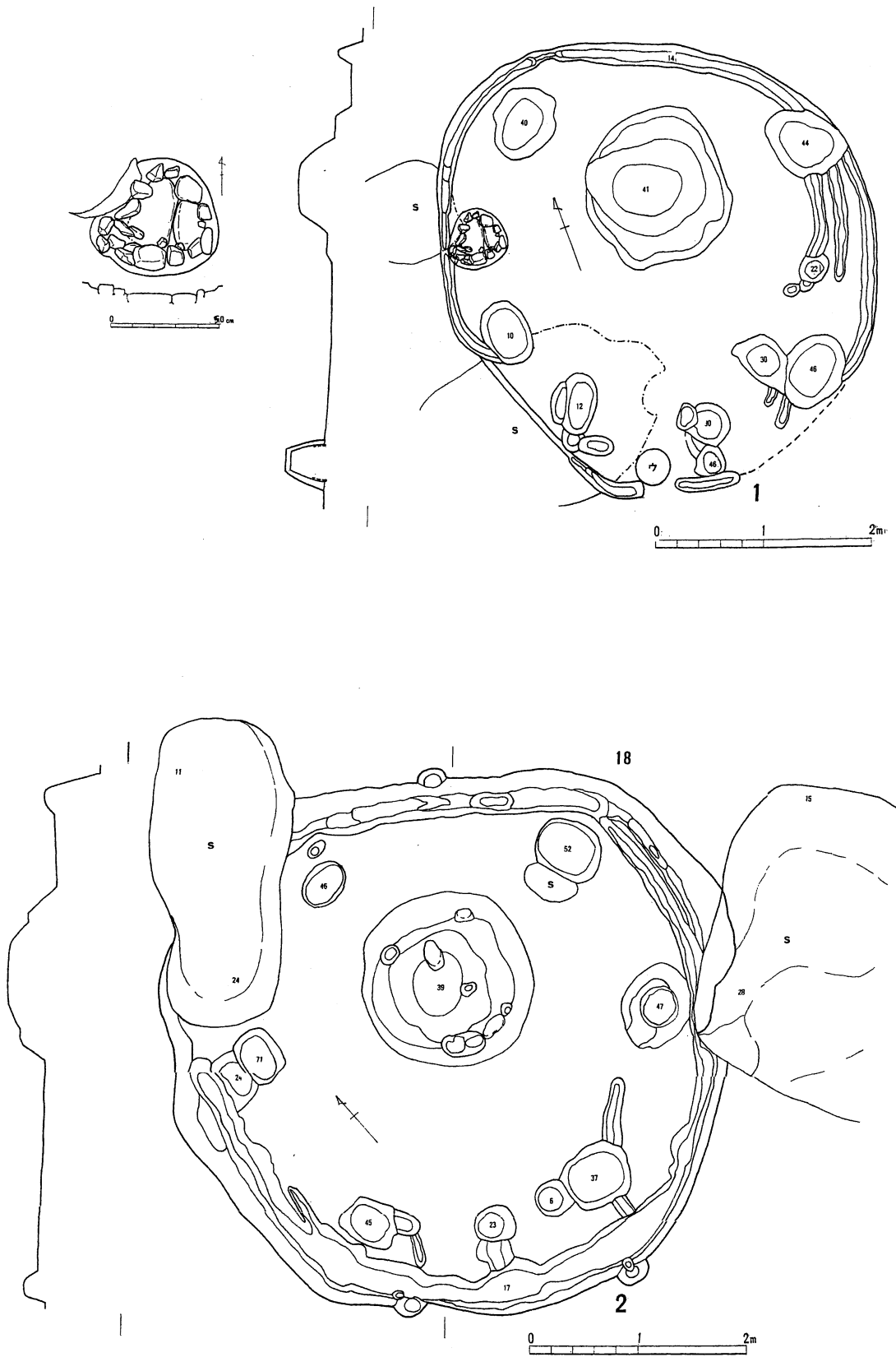
第5図 遺構配置図 (12住は欠番, X配石墓, Y土壌 802)
(スクリーントーンは花崗岩)



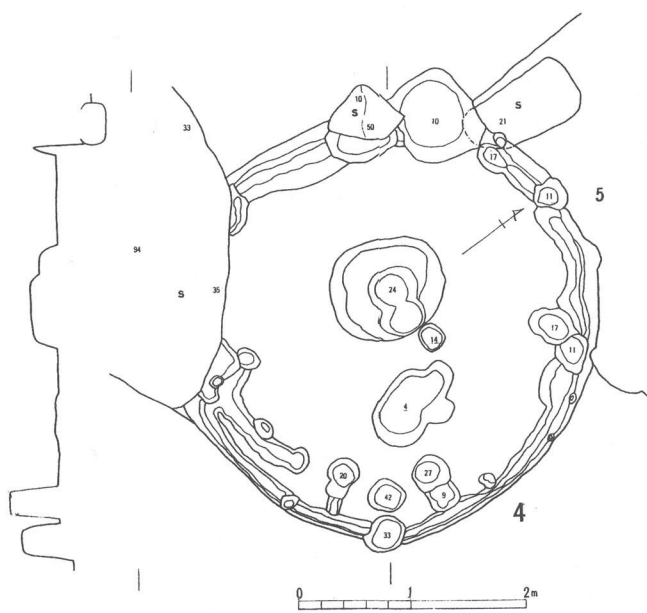
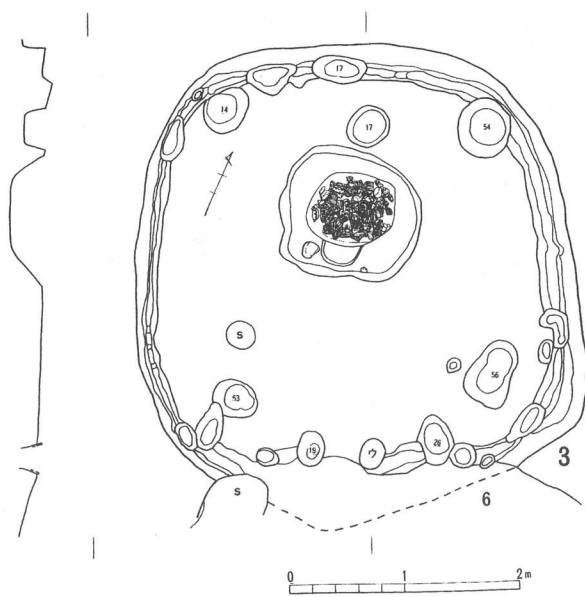
第6图 住居址配置图



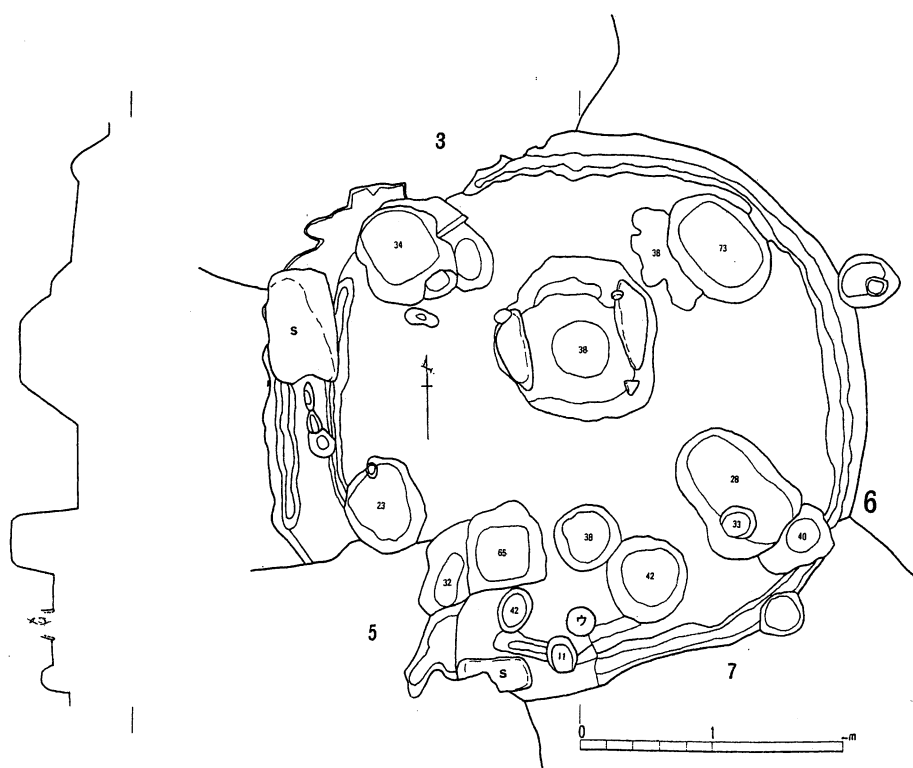
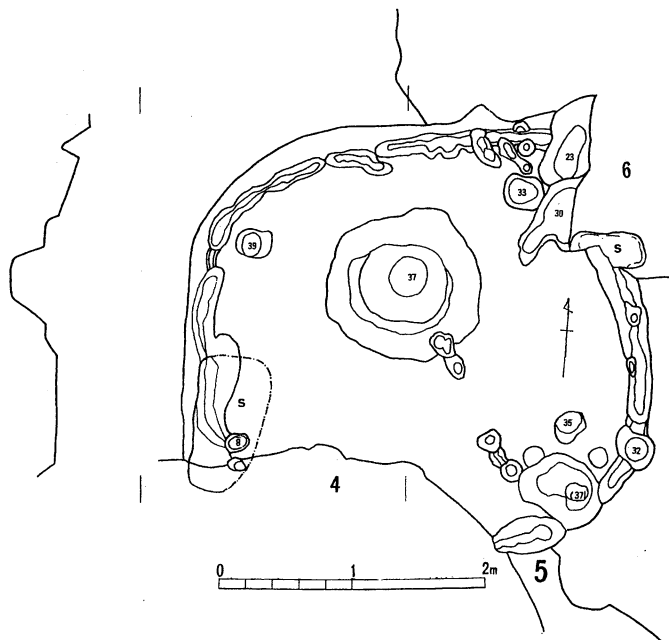
第7図 石の中の土坑群(●硬い石, 数字は比高)



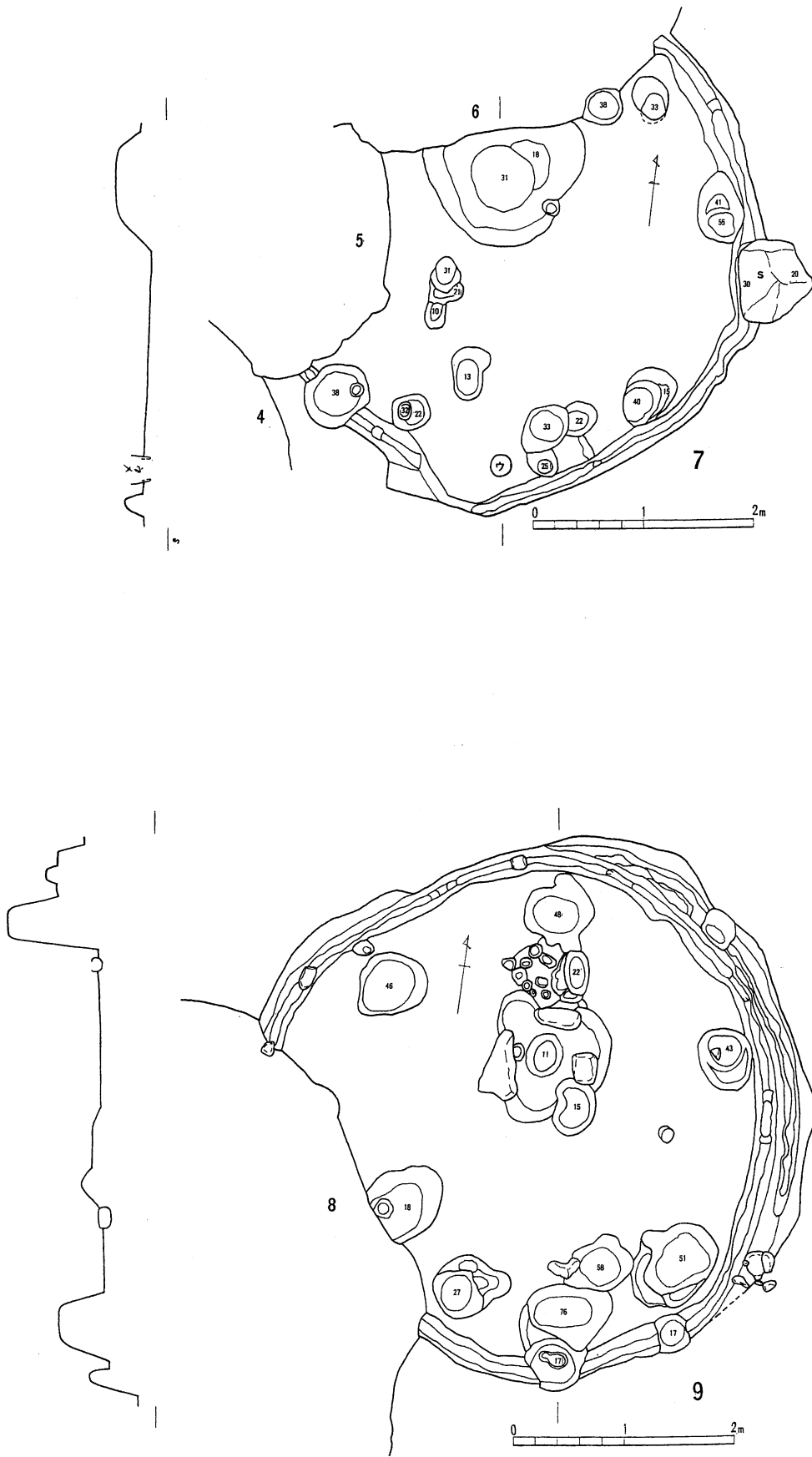
第8图 1·2号住居址



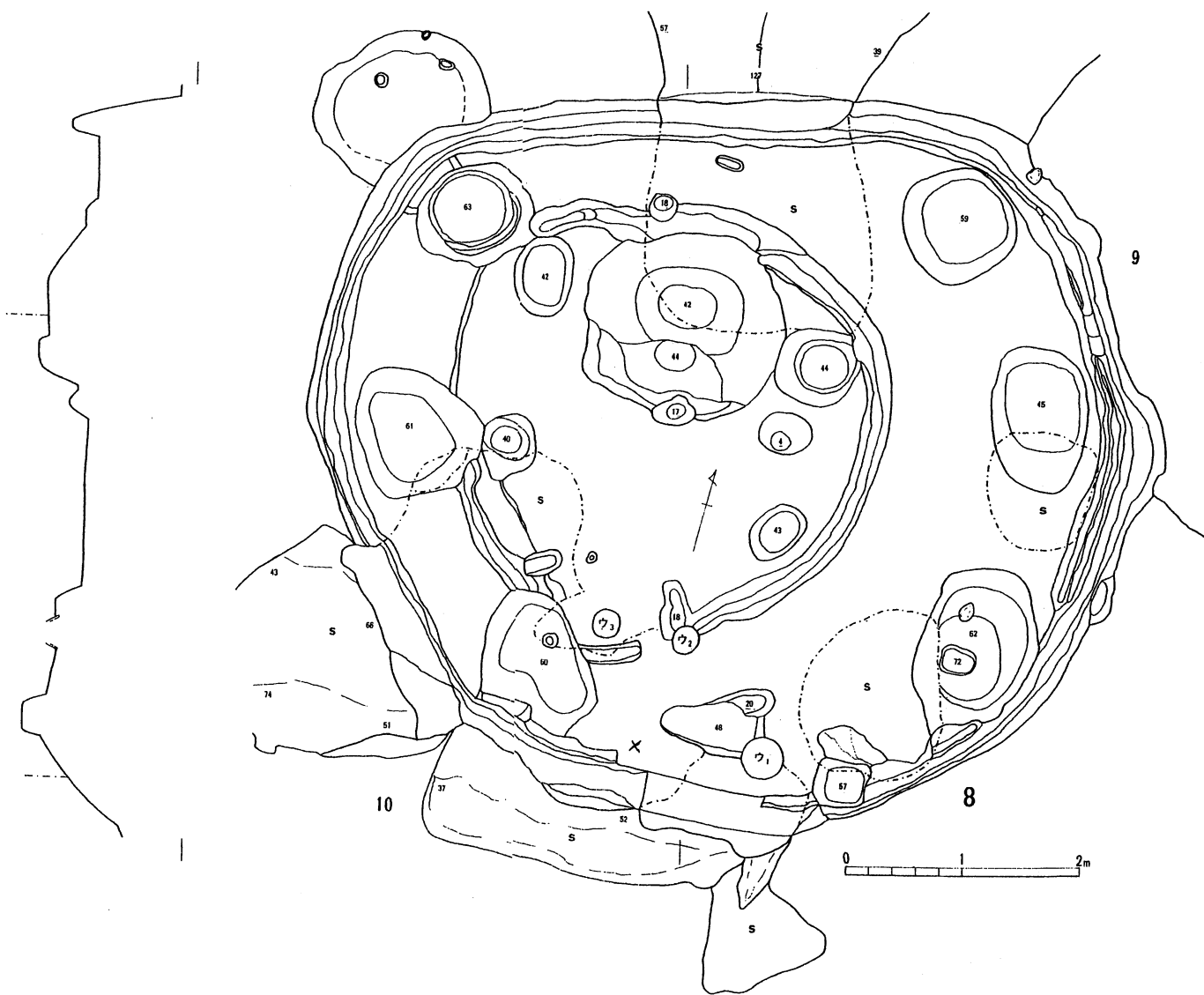
第9图 3·4号住居址



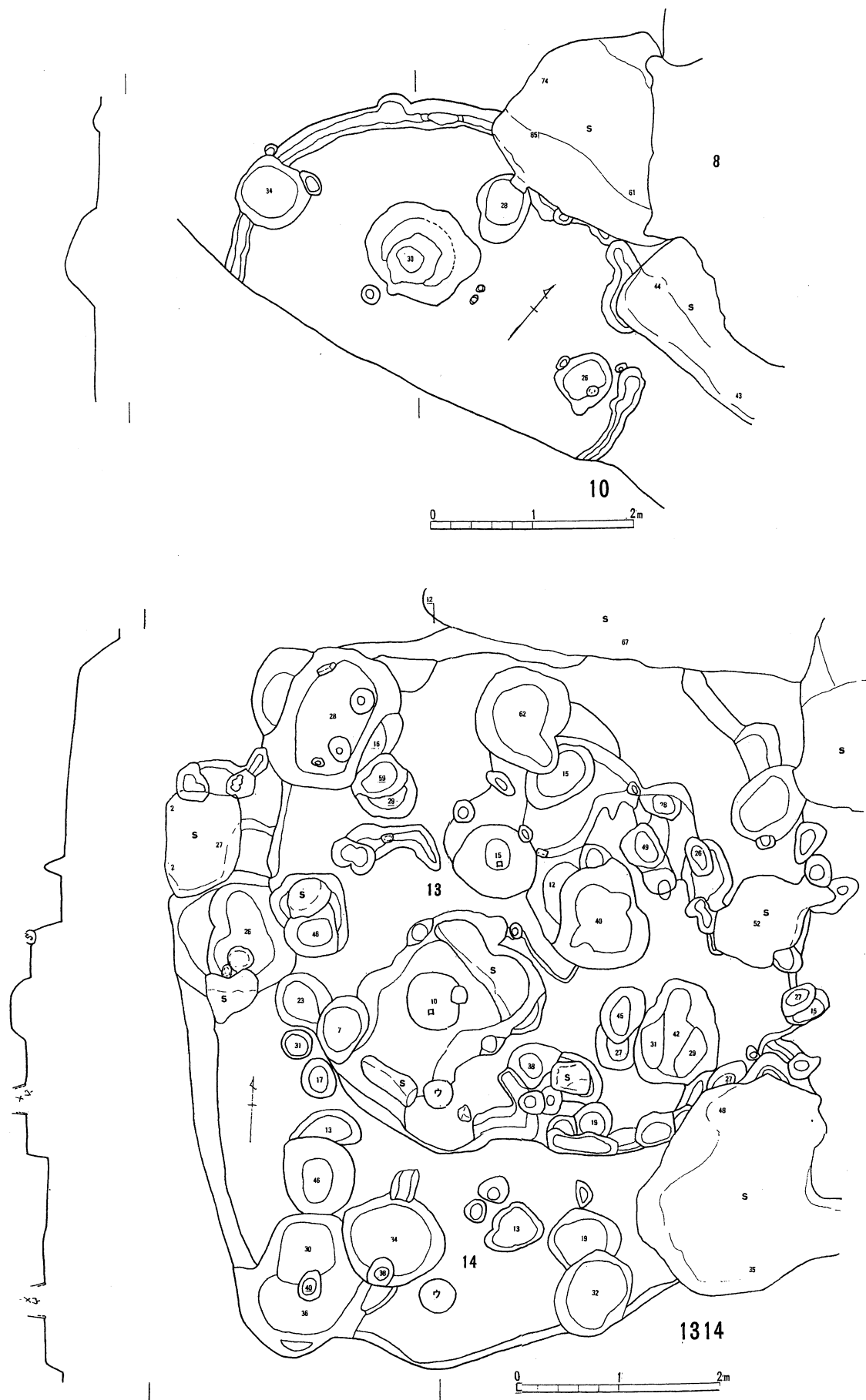
第10图 5·6号住居址



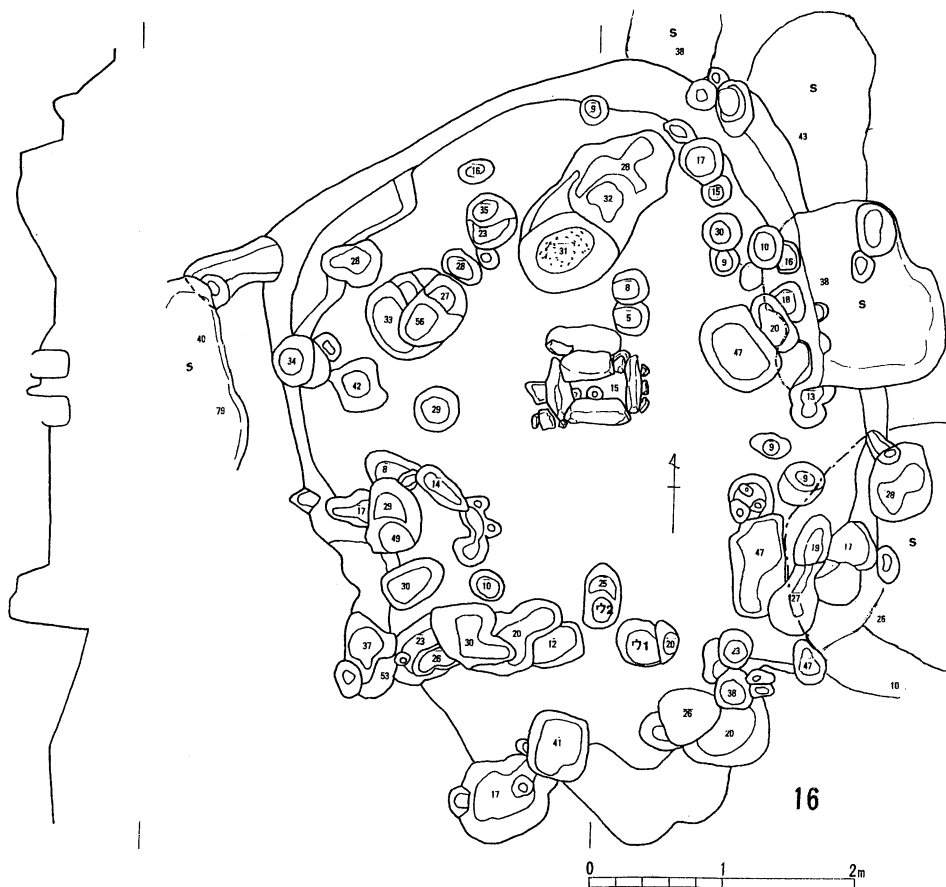
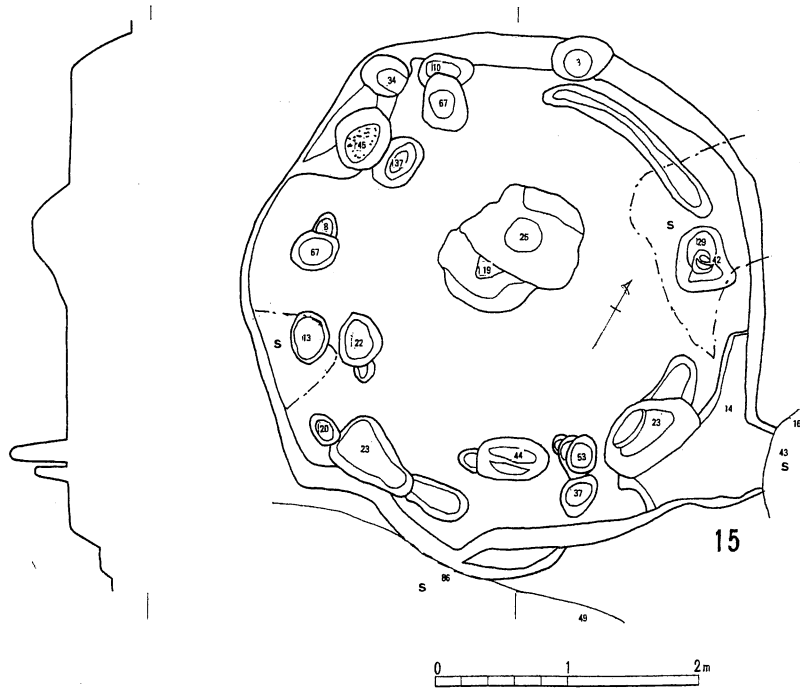
第11图 7·9号住居址



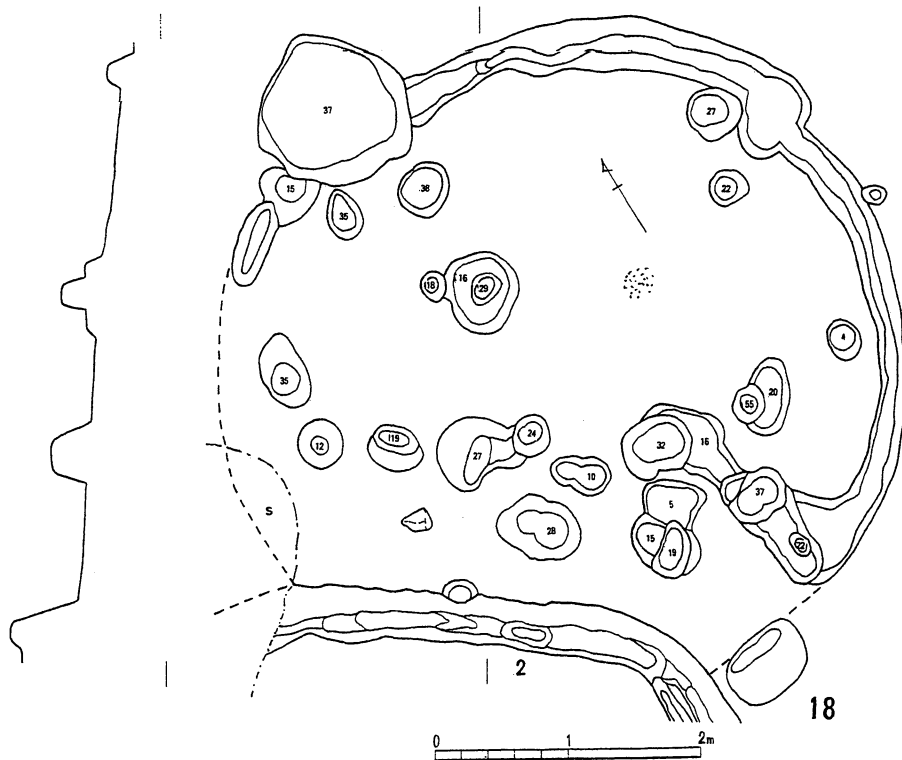
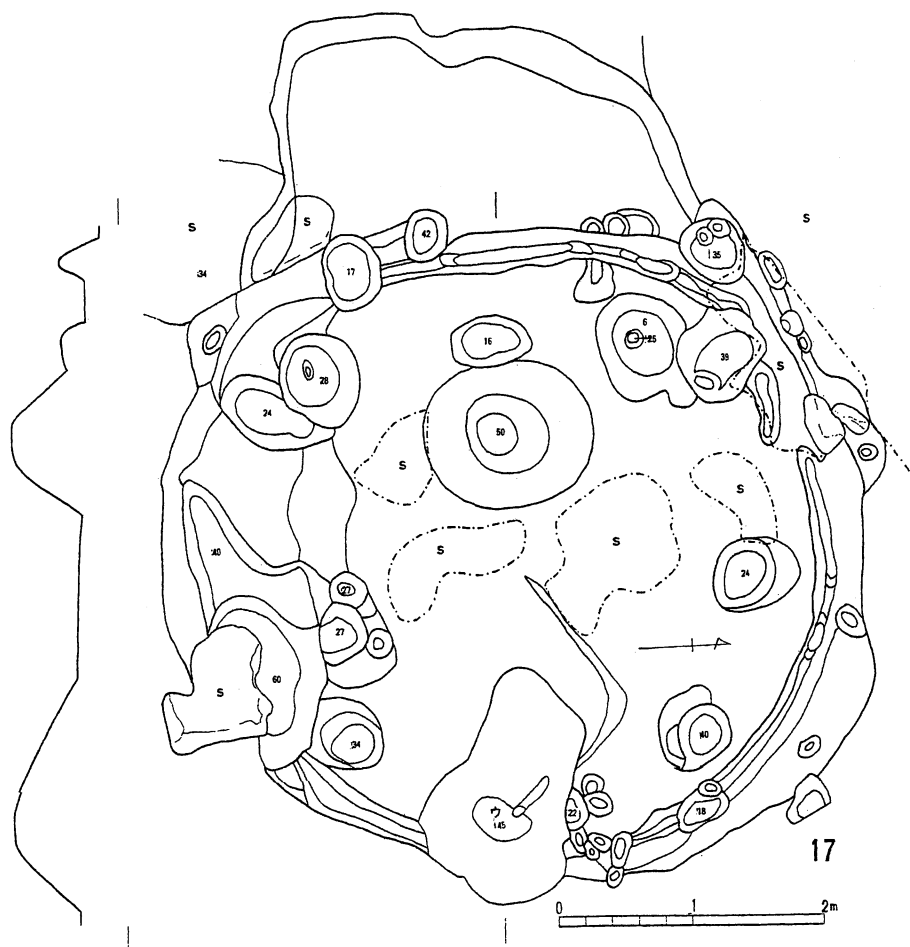
第12图 8号住居址



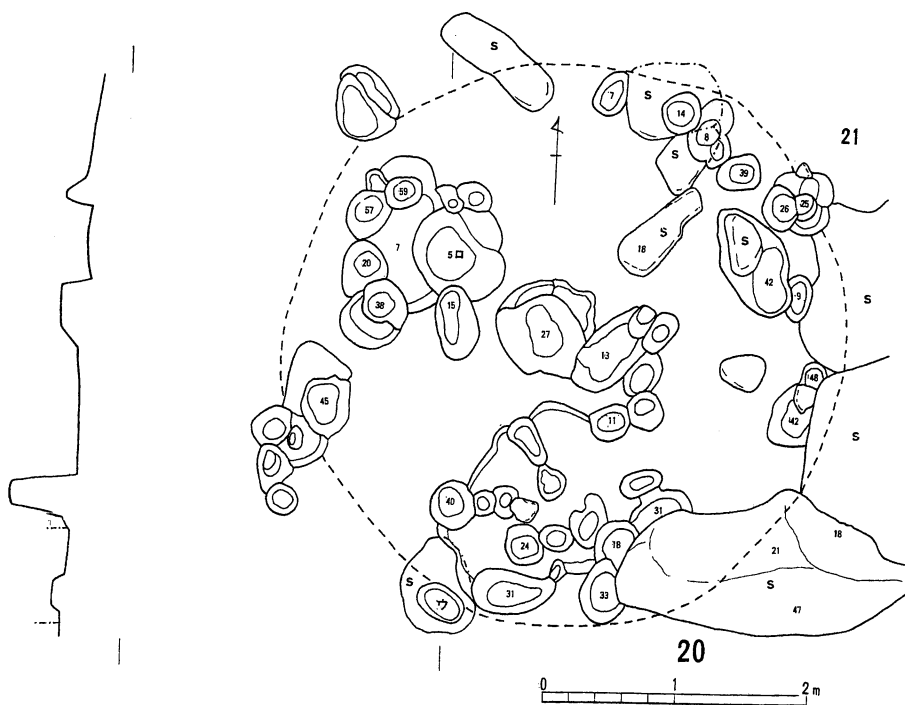
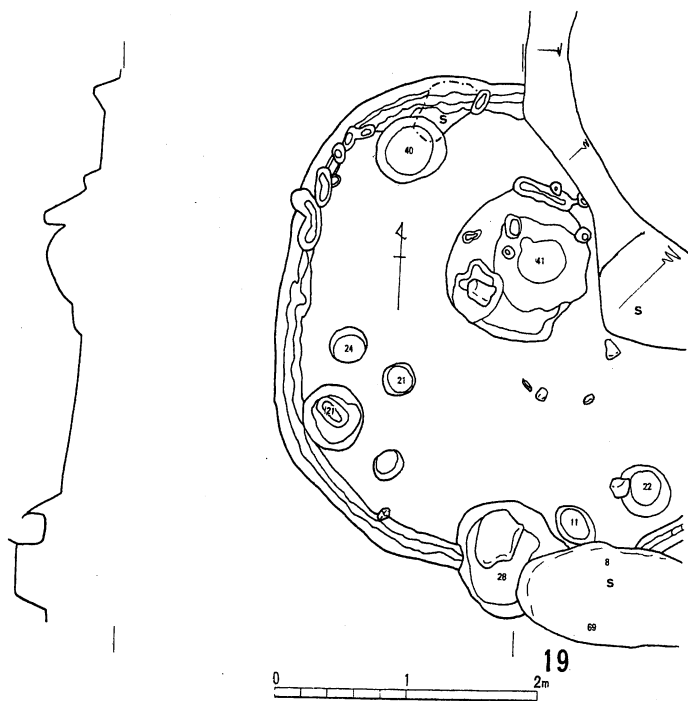
第13图 10, 13·14号住居址



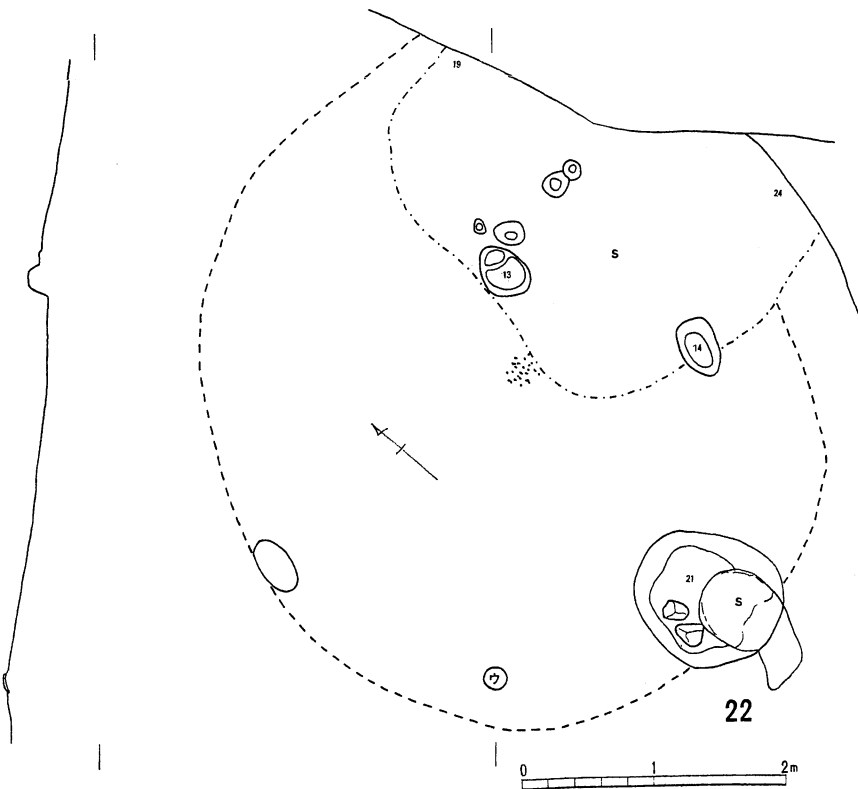
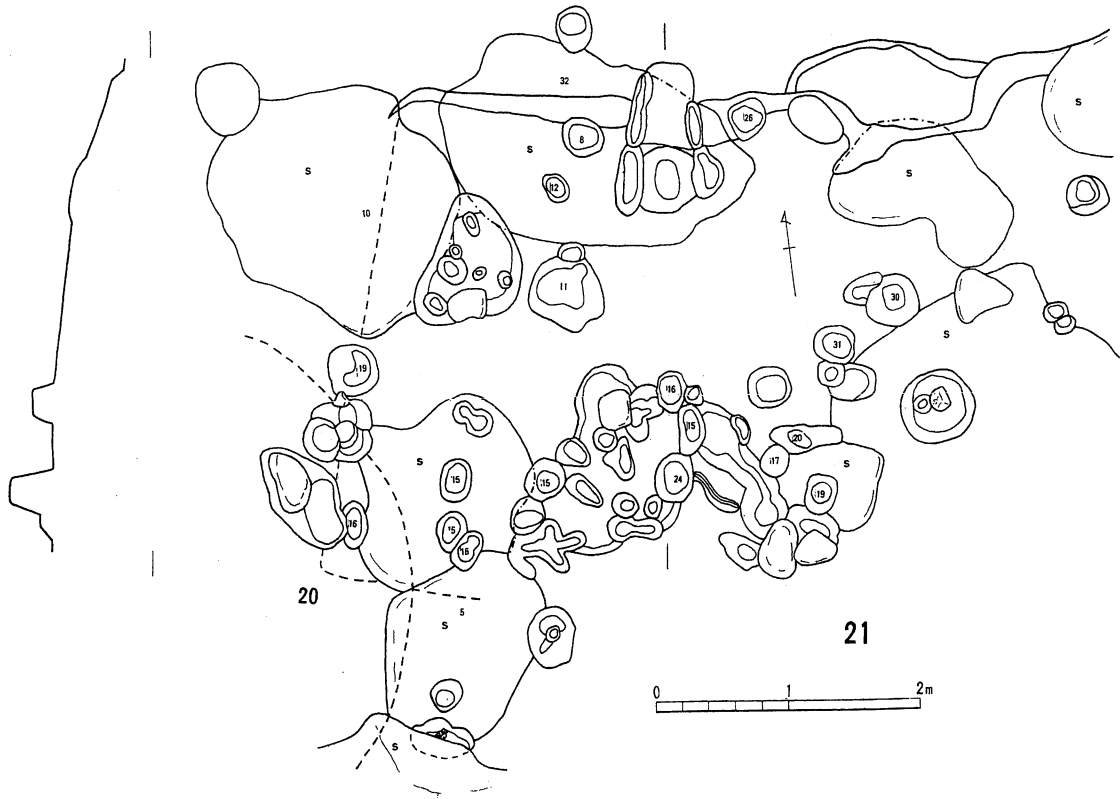
第14图 15·16号住居址



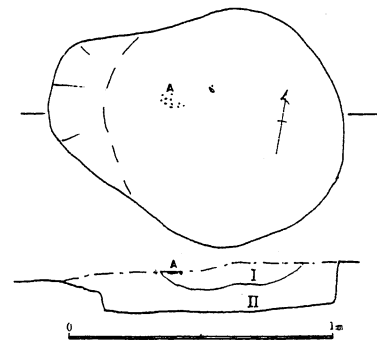
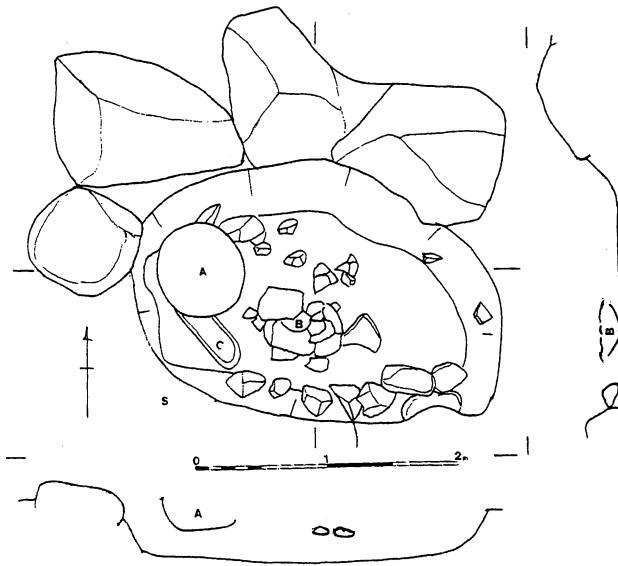
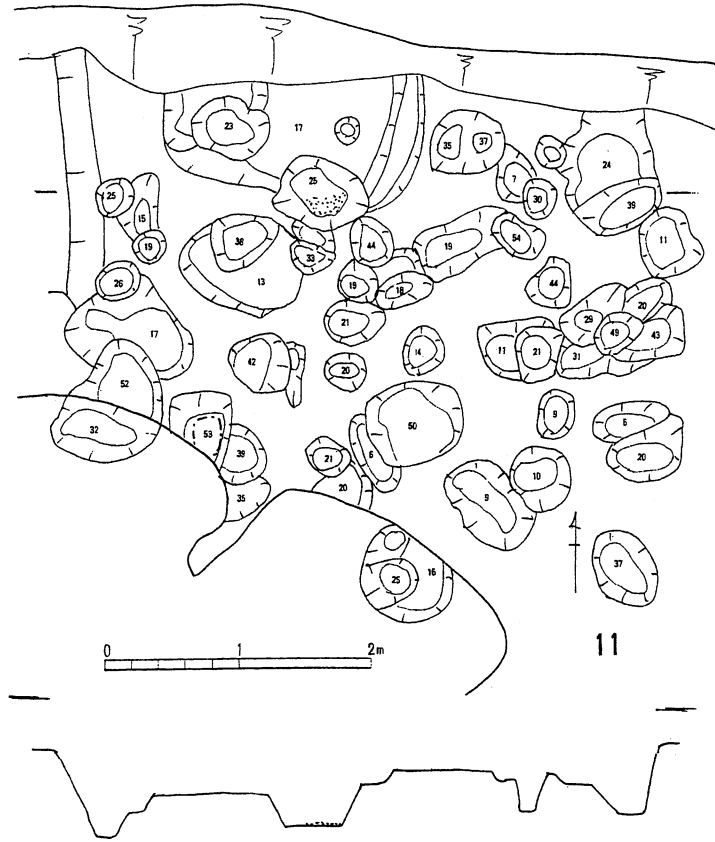
第15图 17·18号住居址



第16图 19·20号住居址

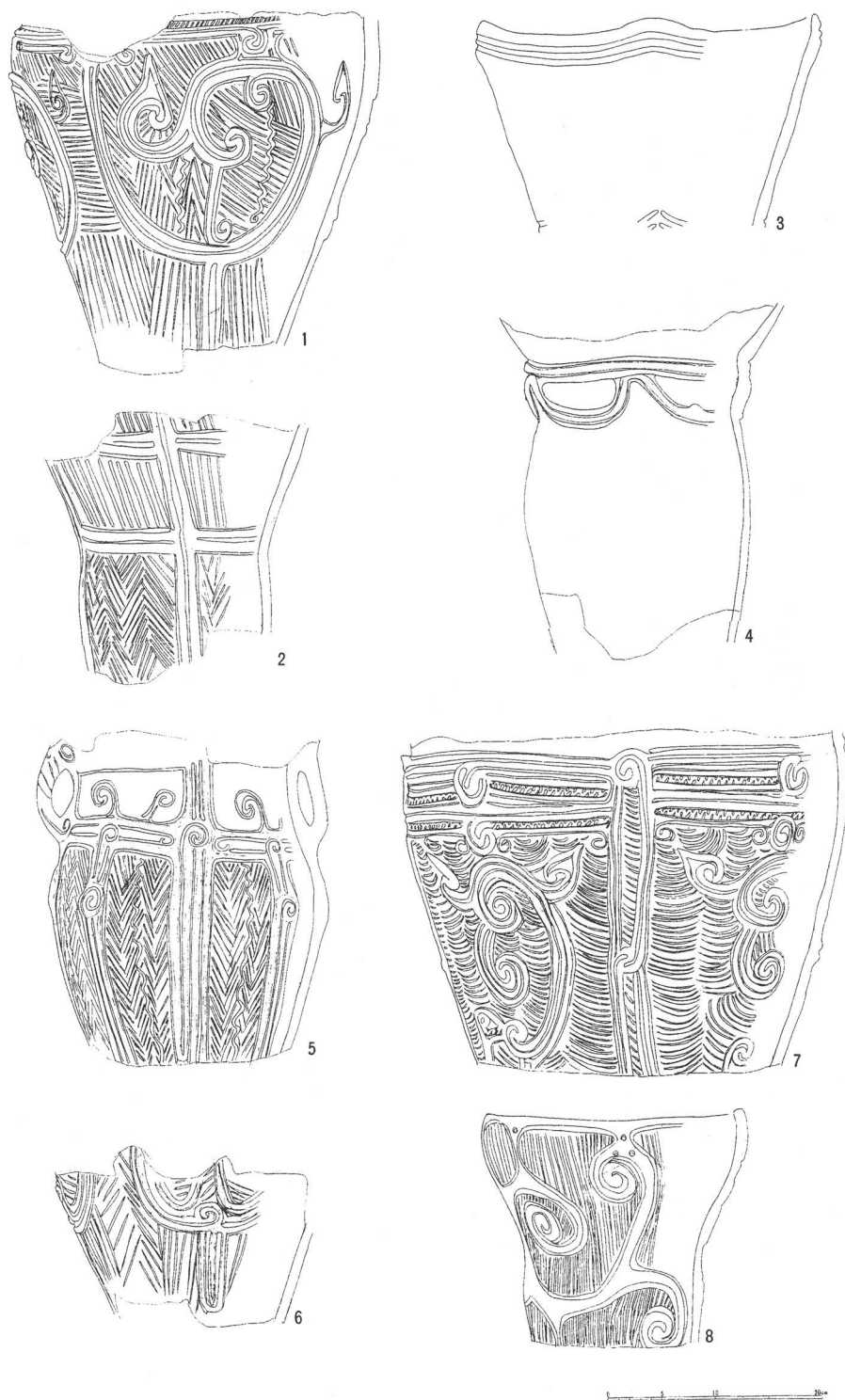


第17图 21·22号住居址



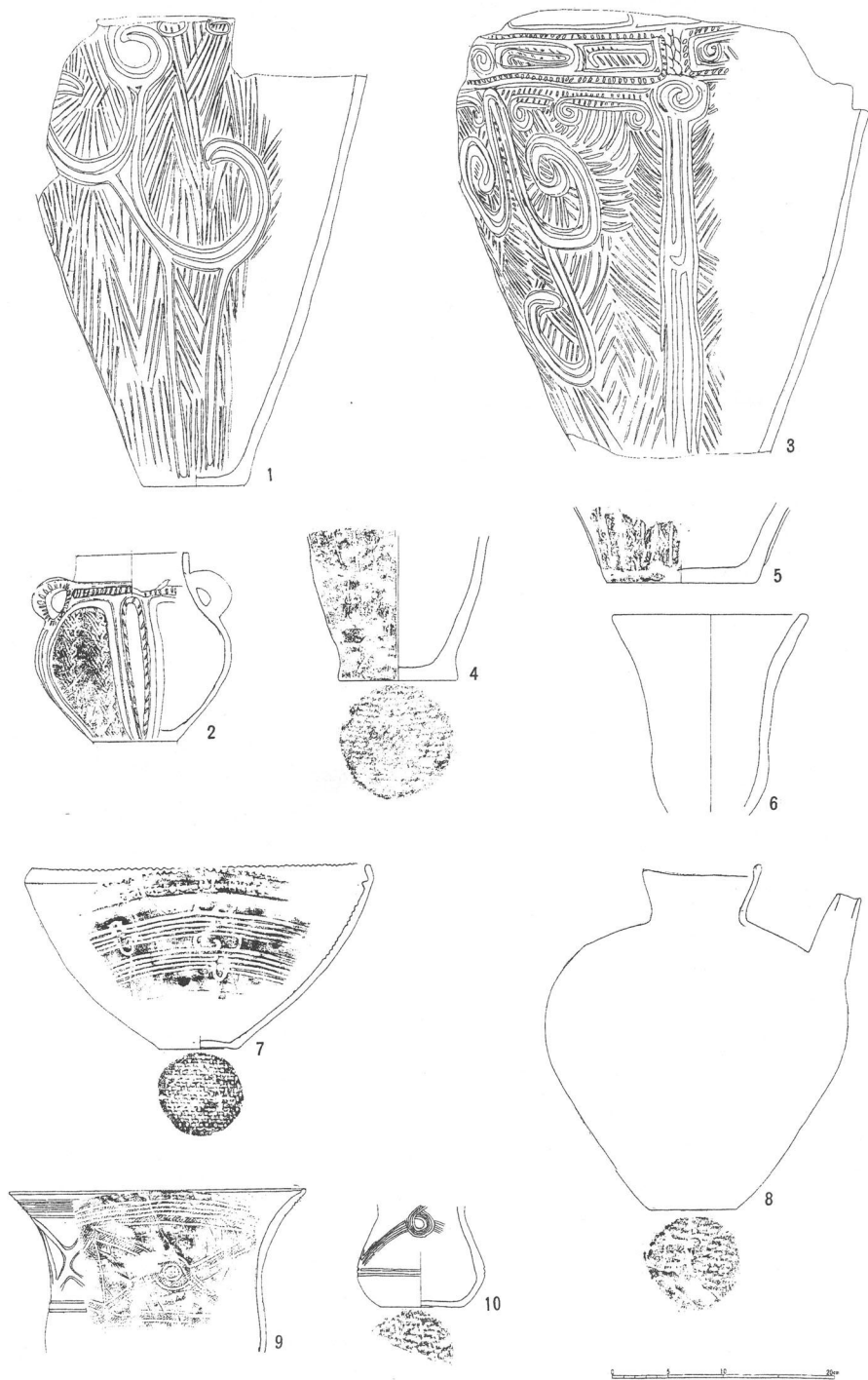
- I ローム多い褐色土
- II ローム・黒色土を含む褐色土
- A コハク玉

第18図 11号住居址, 配石墓, 土壌802号



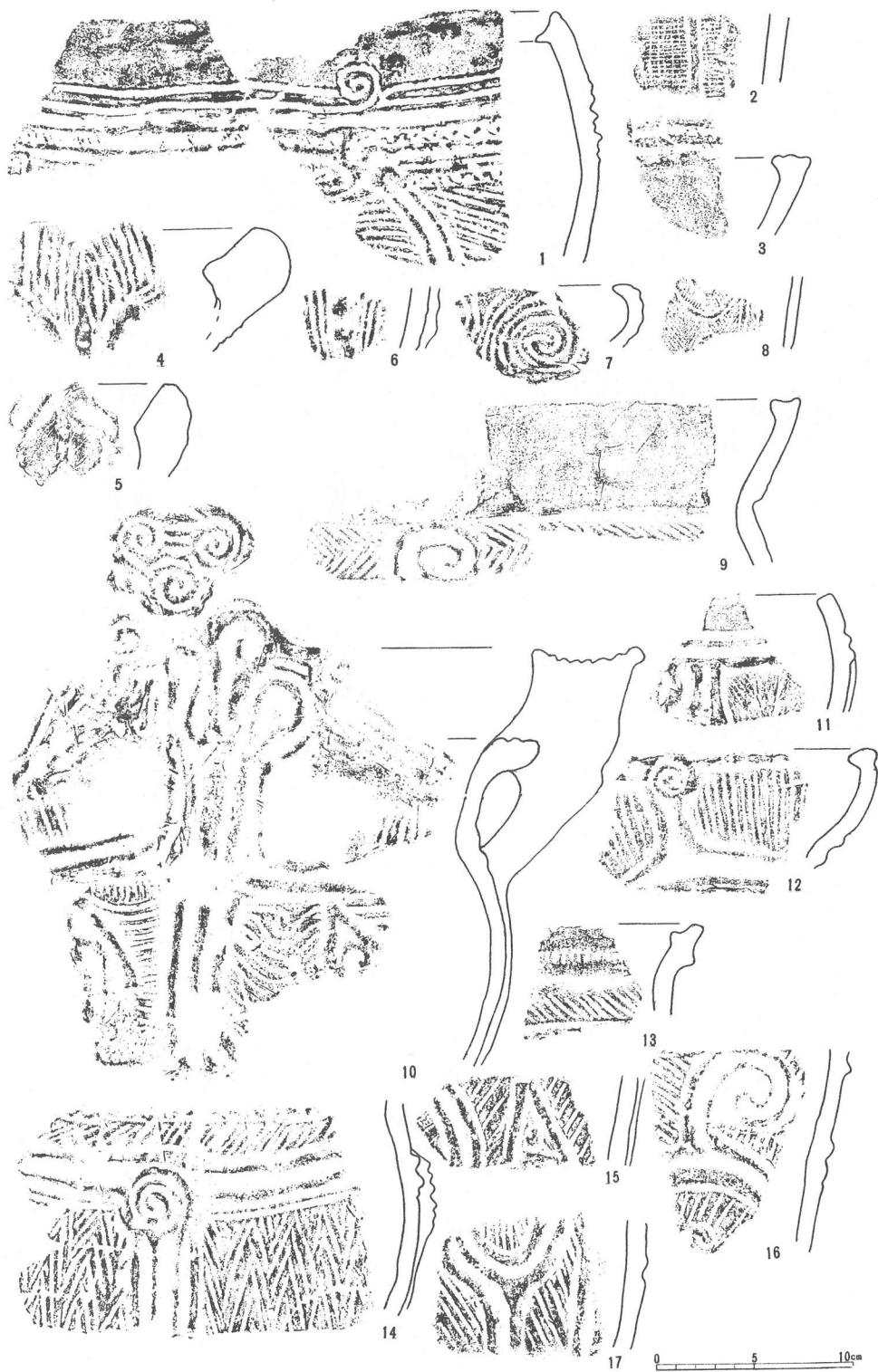
第19图 住居址出土土器实测图 1

(1-1住埋, 2-3住埋, 3-5住炉, 4-6住埋, 5-7住埋, 6-8住埋2, 7-8住埋, 1, 8-8住埋3)

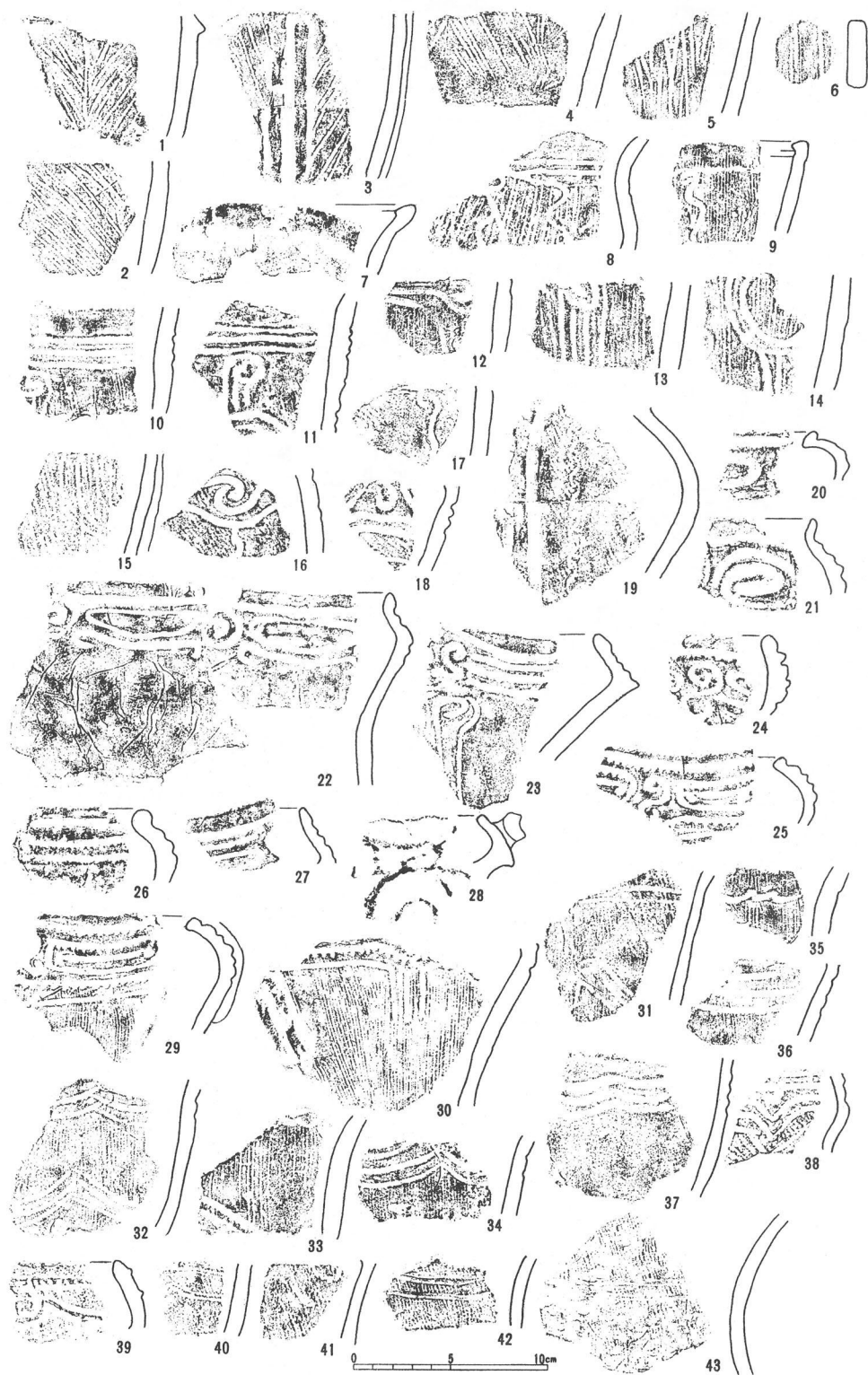


第20图 住居址他出土土器実測图 2

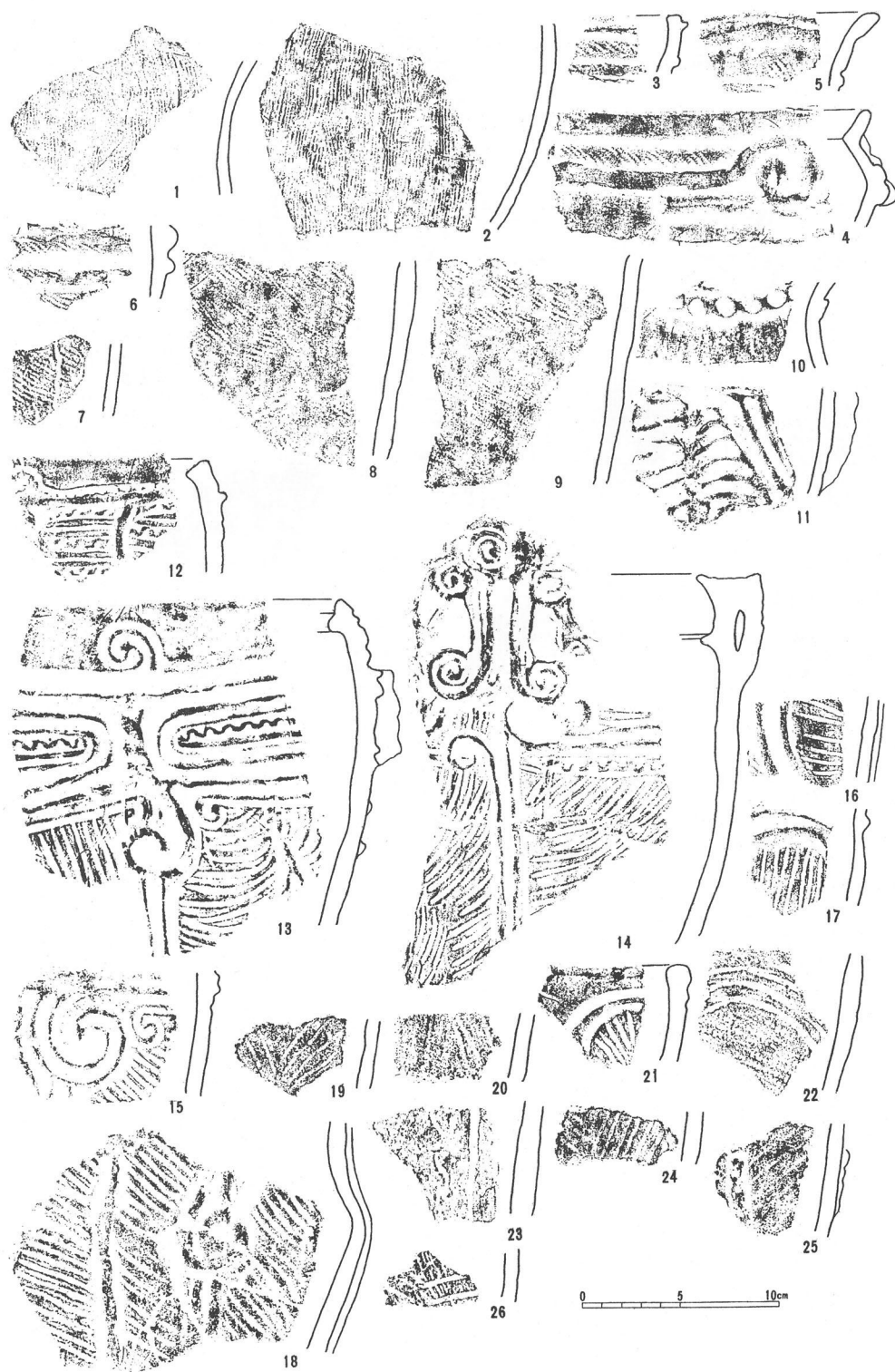
(1-13住埋, 2-13住, 3-14住埋, 4-20住埋, 5-22住埋, 6-土坑235, 7-8配石墓, 9-土坑544, 10-土坑356)



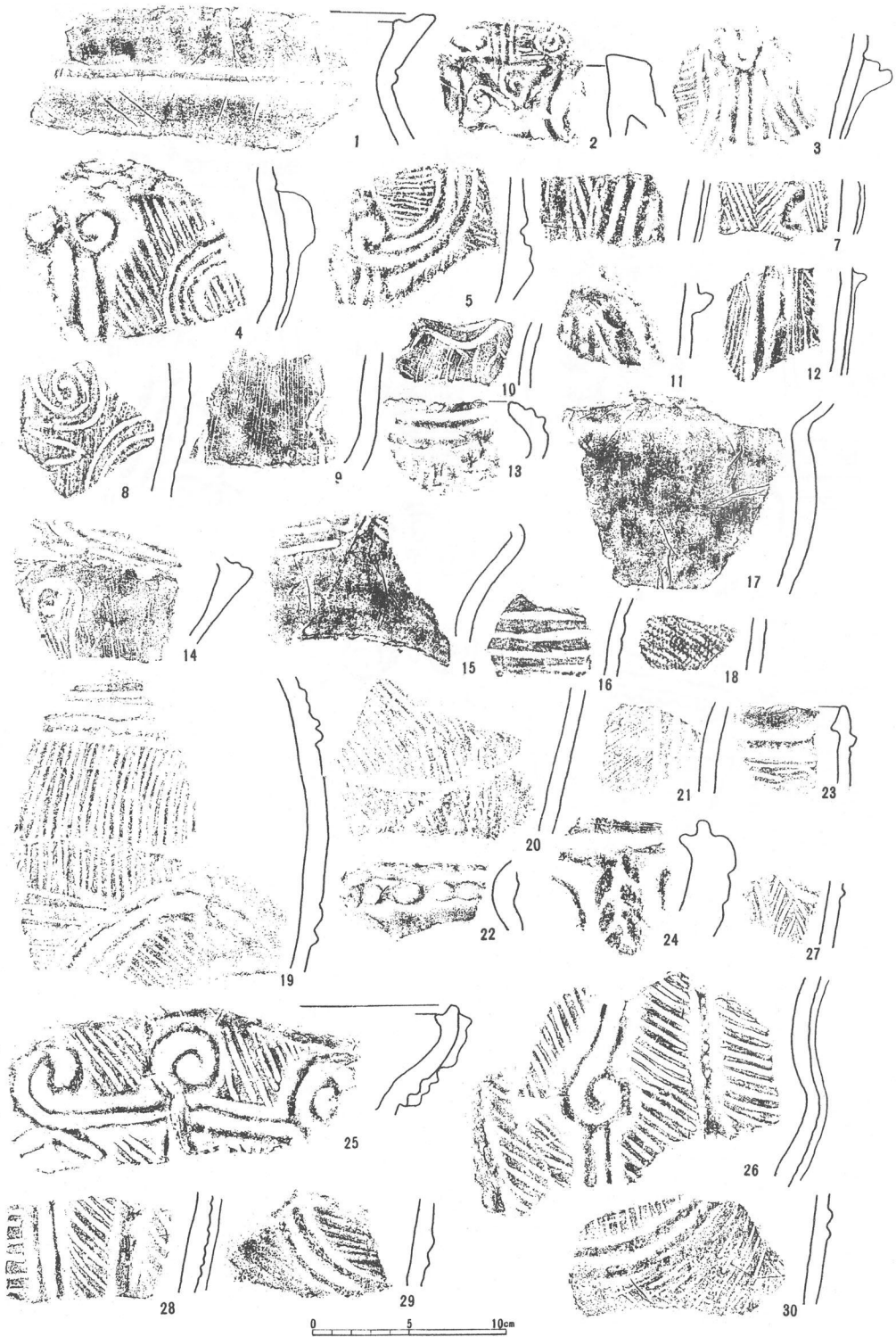
第21图 1·2号住居址出土土器拓本
(1-1住, 2-17. 2住)



第22图 2号住居址出土土器拓本



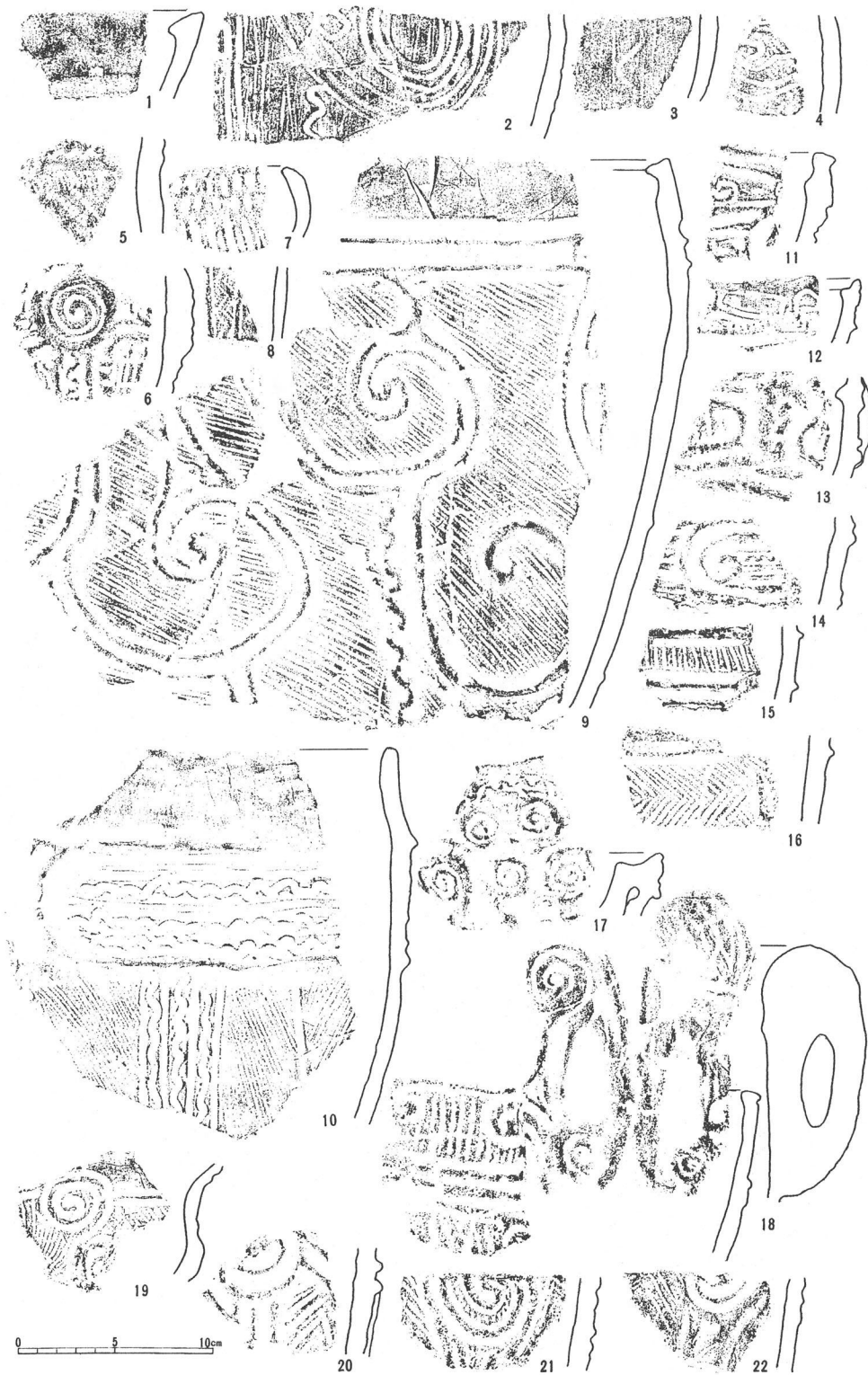
第23图 2·3号住居址出土土器拓本
(1-10. 2住, 11-26. 3号住)



第24图 4·5号住居址出土土器拓本
(1-18. 4住, 19-30. 5住)



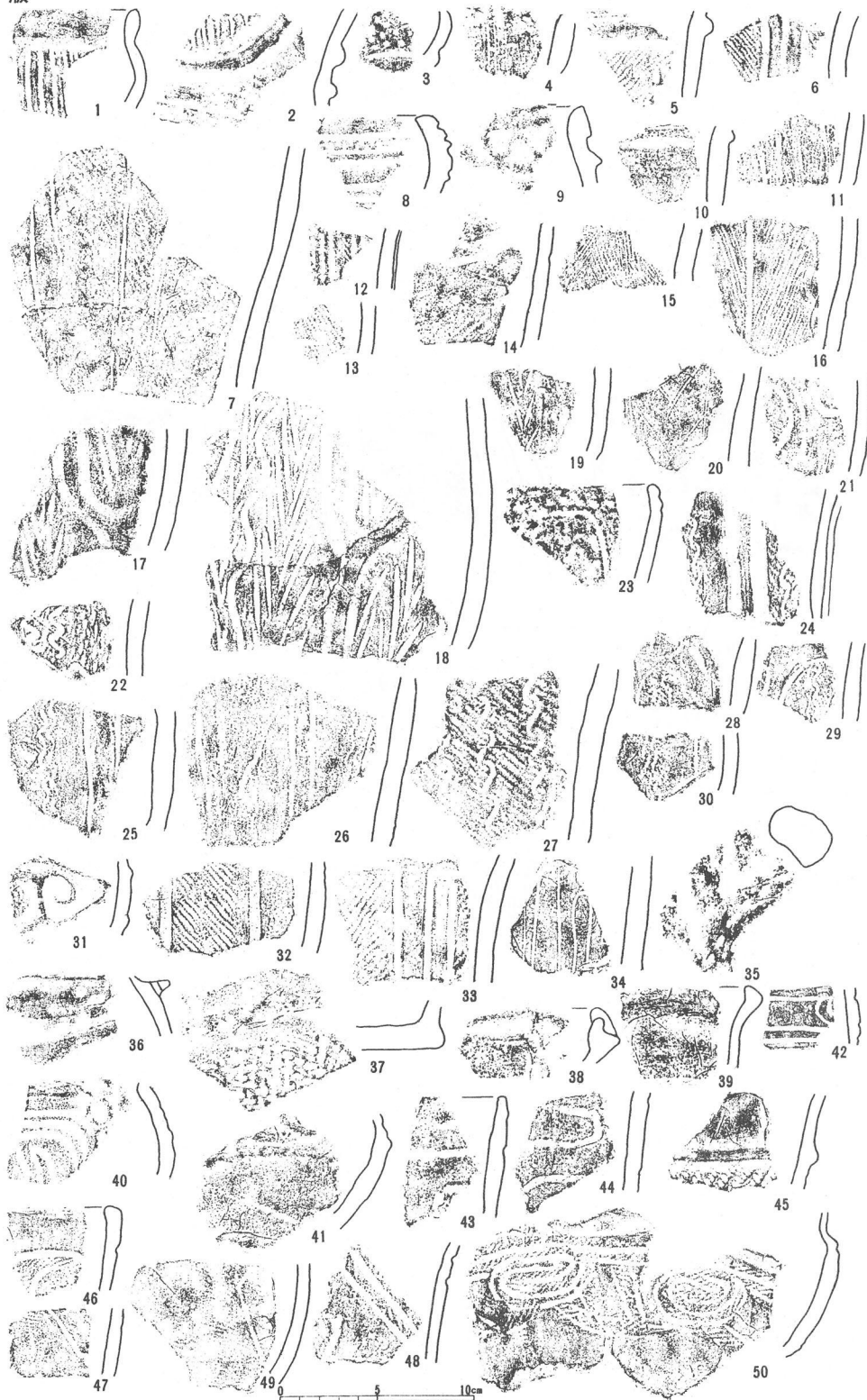
第25图 5·6号住居址出土土器拓本
(1~3.5住, 5~27.6住) (4-8住)



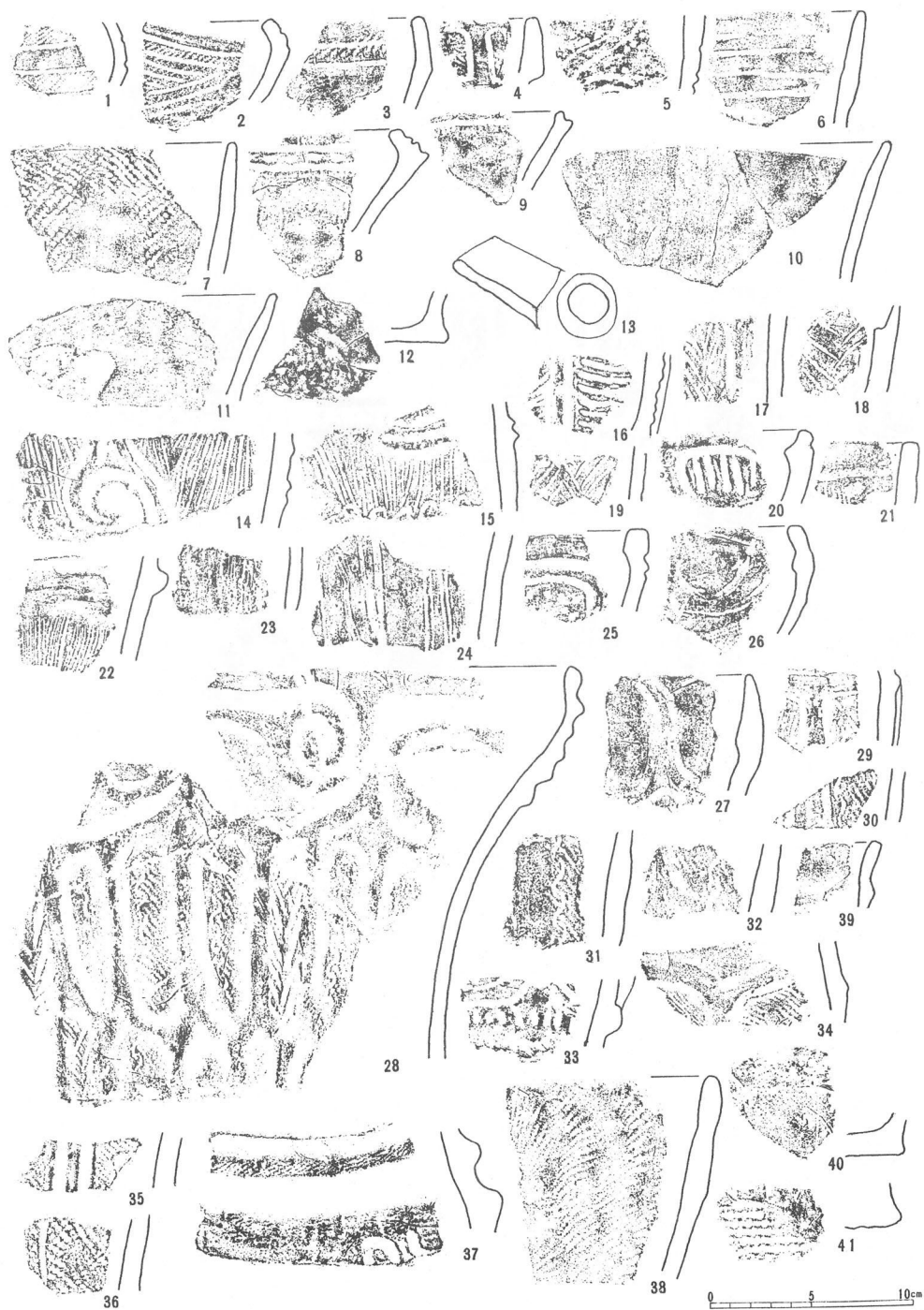
第26图 7·8号住居址出土土器拓本
(1~4. 7住, 5~22. 8住)



第27图 8号住居址出土土器拓本



第28图 9·10·11号住居址出土土器拓本
(1~7. 9住, 8~14. 10住, 15~33. 11住覆土, 34~50. 11住)



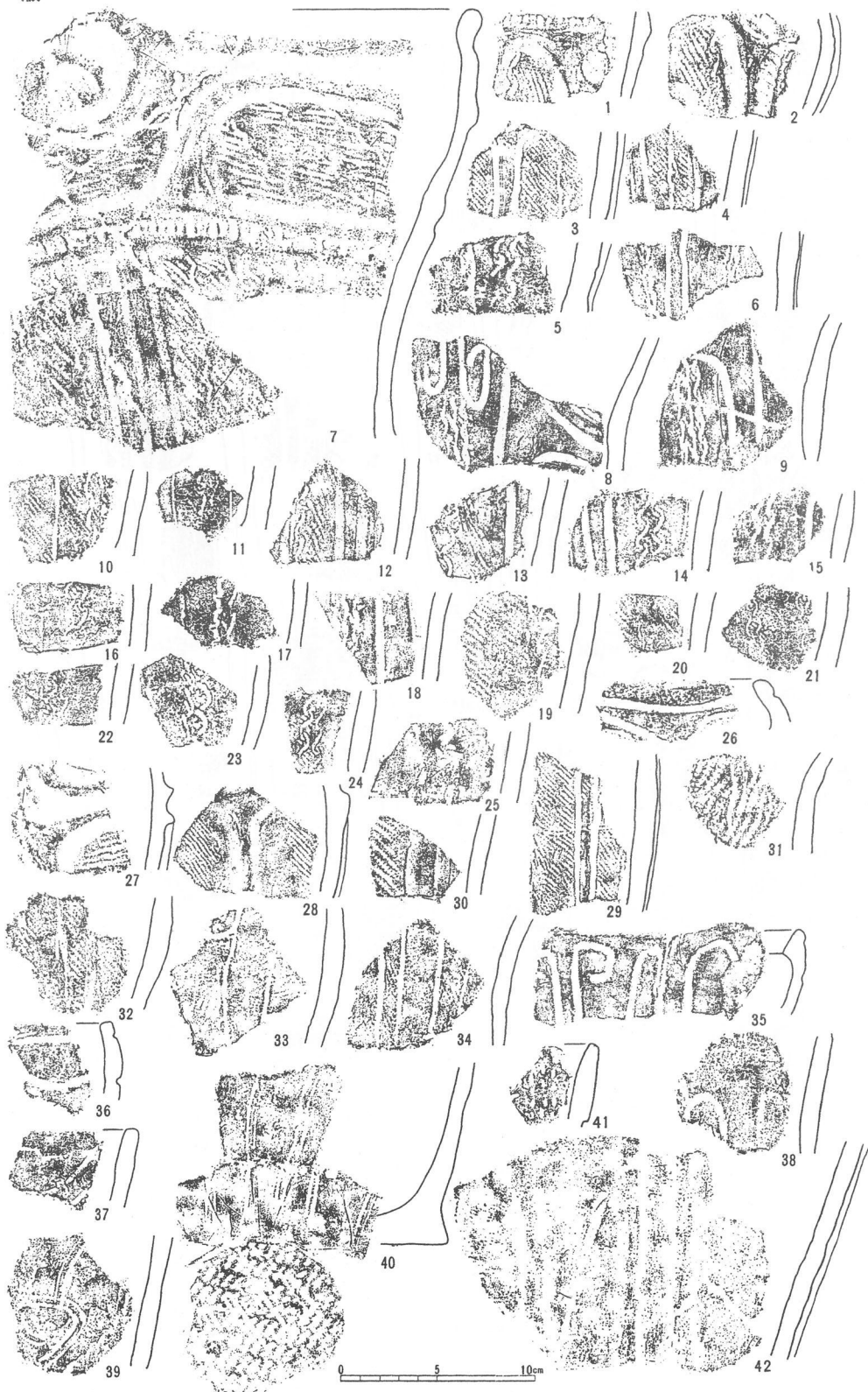
第29图 11·13号住居址出土土器拓本
(1~13. 11住, 14~41. 13住)



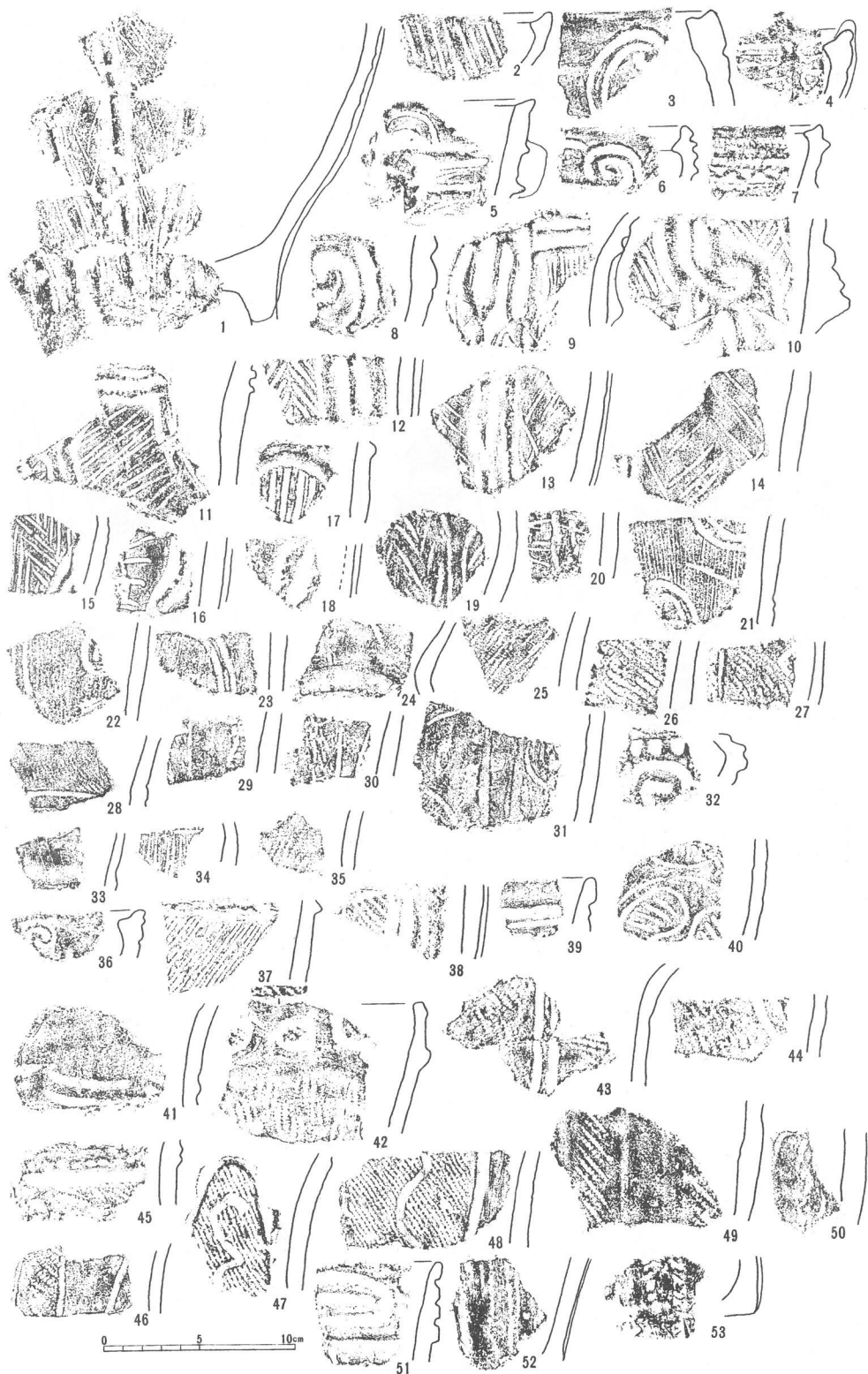
第30图 14·15号住居址出土土器拓本
(1~50.14住,51~63.15住)



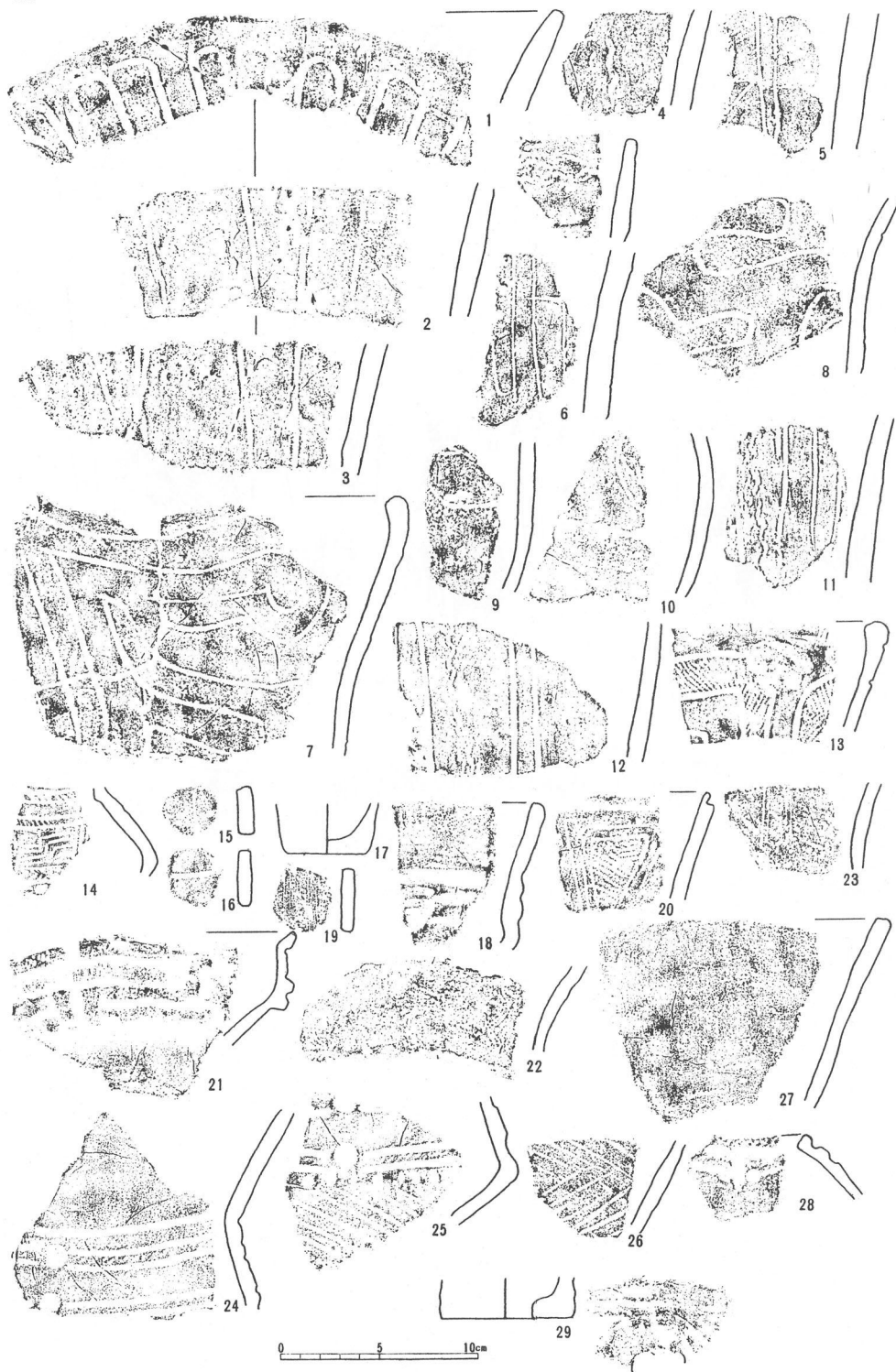
第31图 15·16号住居址出土土器拓本
(1~40.15住,41~52.16住)



第32图 16号住居址出土土器拓本



第33图 16, 17, 18, 19, 20号住居址出土土器拓本
 (1. 16住, 2~32. 17住, 33~35. 18住, 36~44. 19住, 45~53. 20住)



第34图 土坑出土土器拓本

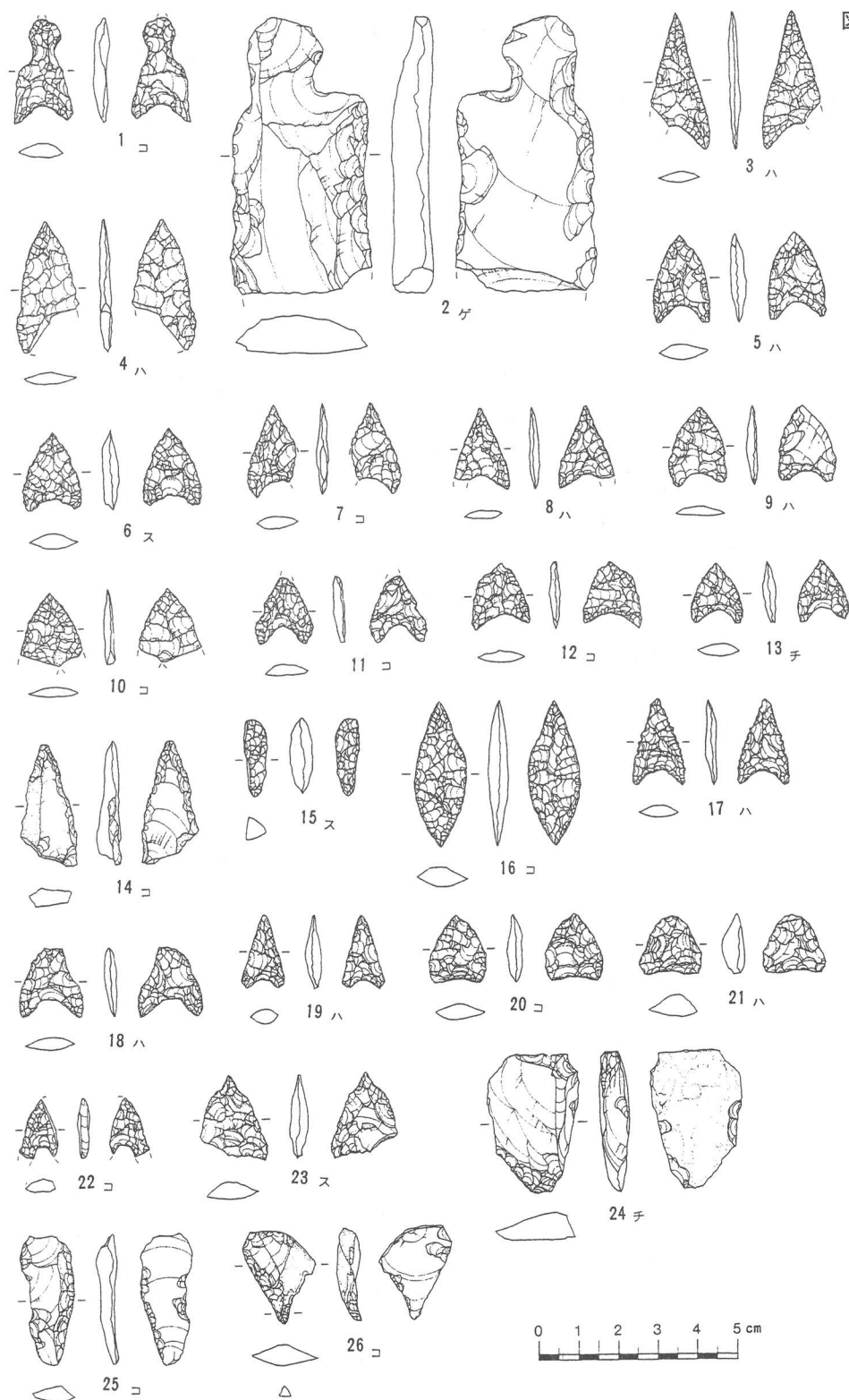
1~3. 235号, 4·5. 238号, 6. 278号, 7. 283号, 8~10. 294号, 11·12. 457号
13. 286号, 14. 362号, 15. 422号, 16·17. 427号, 18. 436号, 19. 486号, 20. 539号
21~23. 568号, 24~27. 622号, 28·29. 819号



第35图 土坑·遺構外出土器拓本
(1. 799号, 2~4. 886号, 5~36. 遺構外)

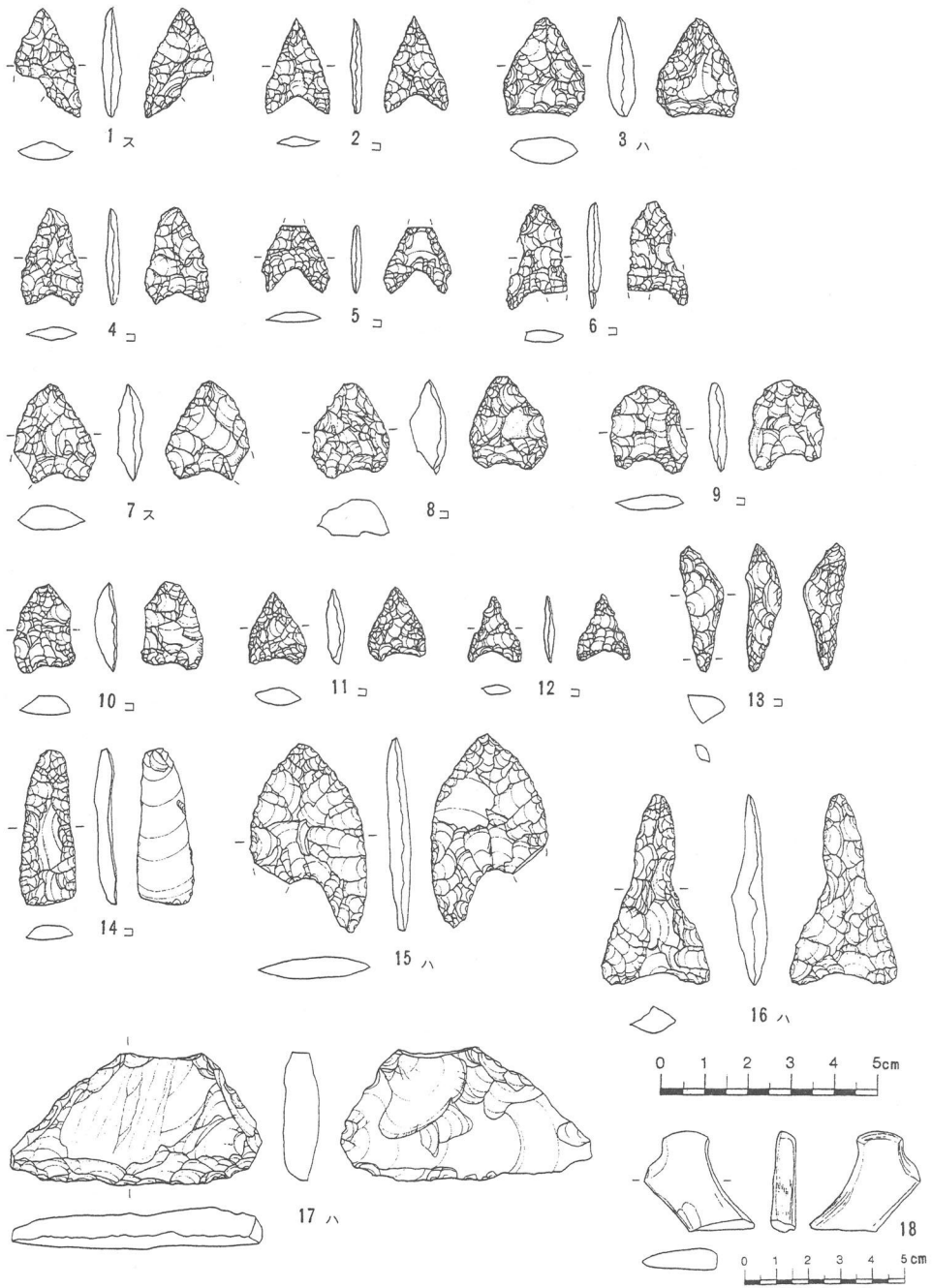


第36图 遺構外出土土器拓本

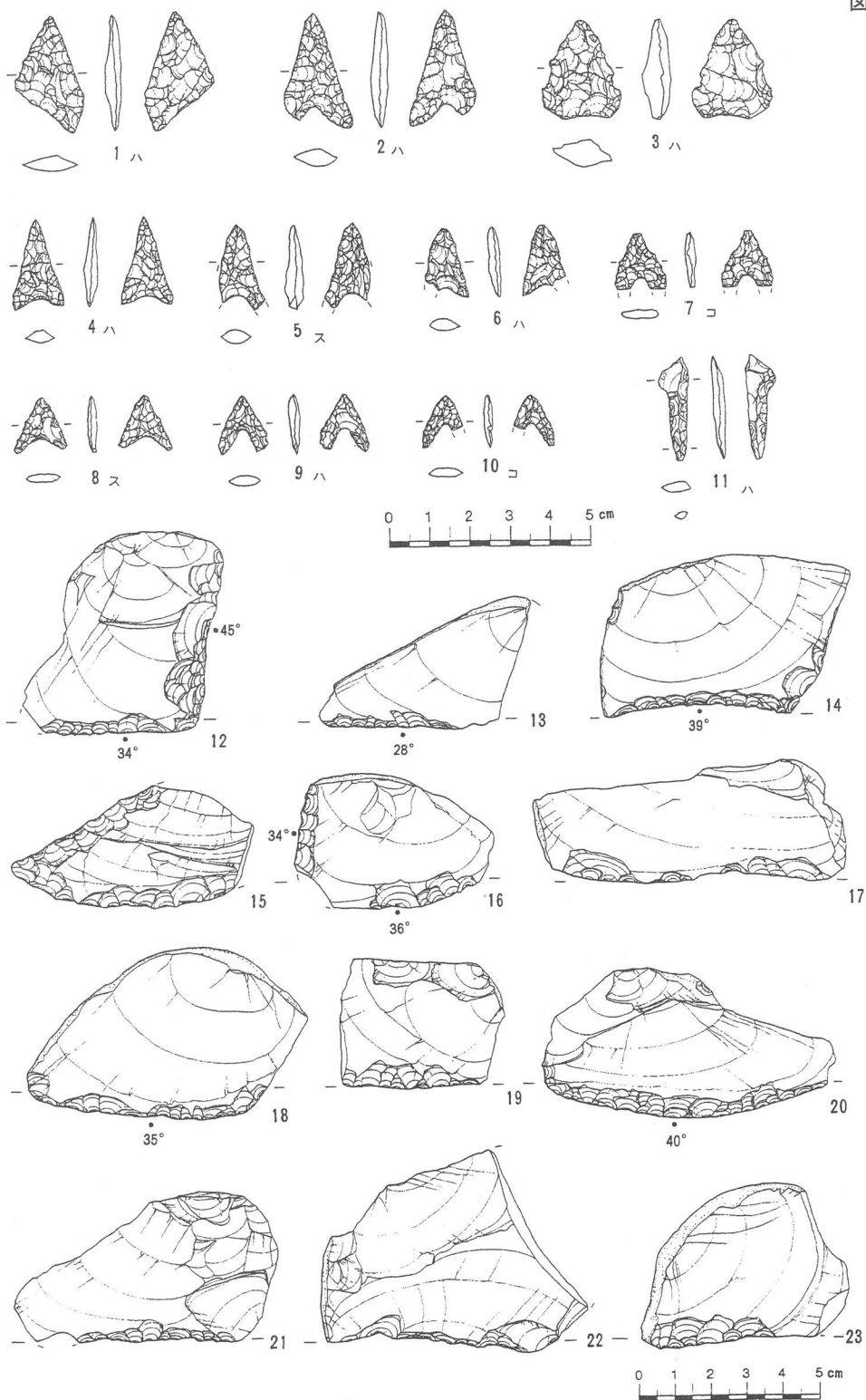


第37図 剥片石器実測図(1)

(1. 2住, 2. 4住, 3~15. 8住, 16~22. 13住, 23. 14住, 24~26. 15住)
 (ハ-ハリ質安山岩・下呂石, コ-黒曜石, チ-チャート, ス-水晶, ゲ-玄武岩)

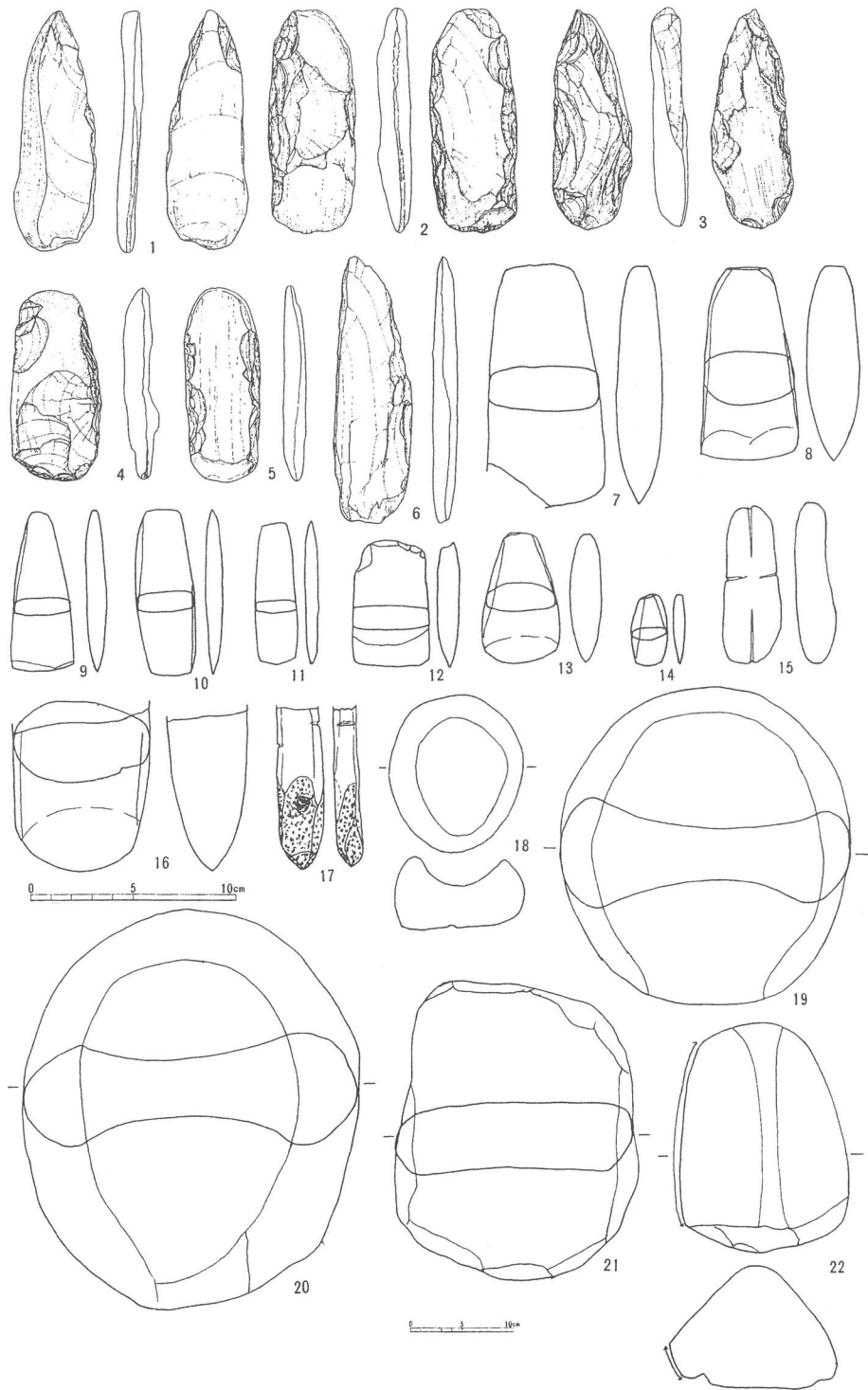


第38図 剥片石器実測図(2)
 (1~5. 15住, 6~14. 16住, 15. 20住, 16・17. 遺構外, 18. 11住)



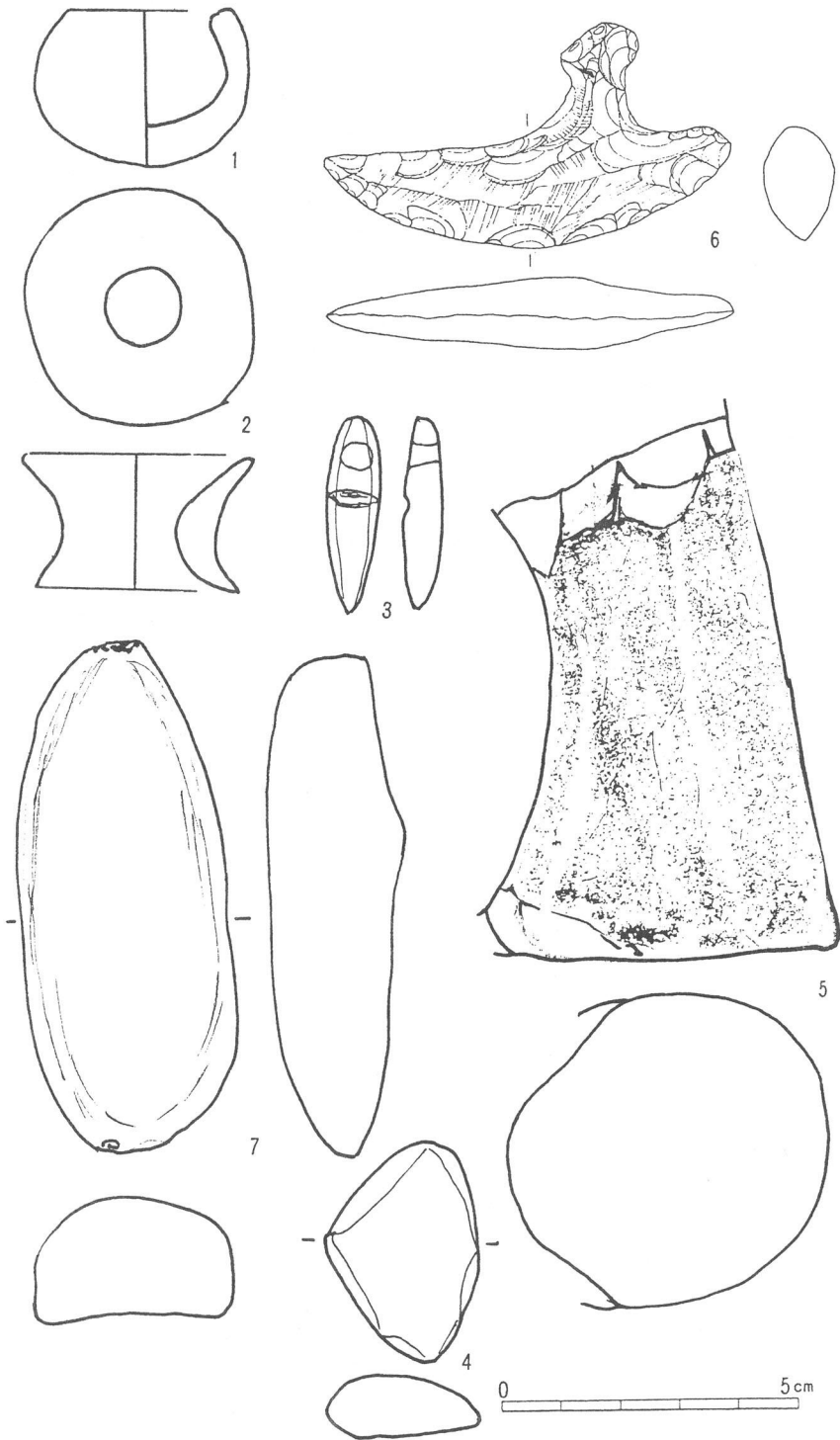
第39図 剥片石器実測図(3)

(1 ~ 11. 11住, 12. 2住, 13. 6住, 14. 4住, 15~17. 8住, 18. 10住)
 (19. 14住, 20·21. 15住, 22. 16住, 23. 17住 (12~23玄武岩))



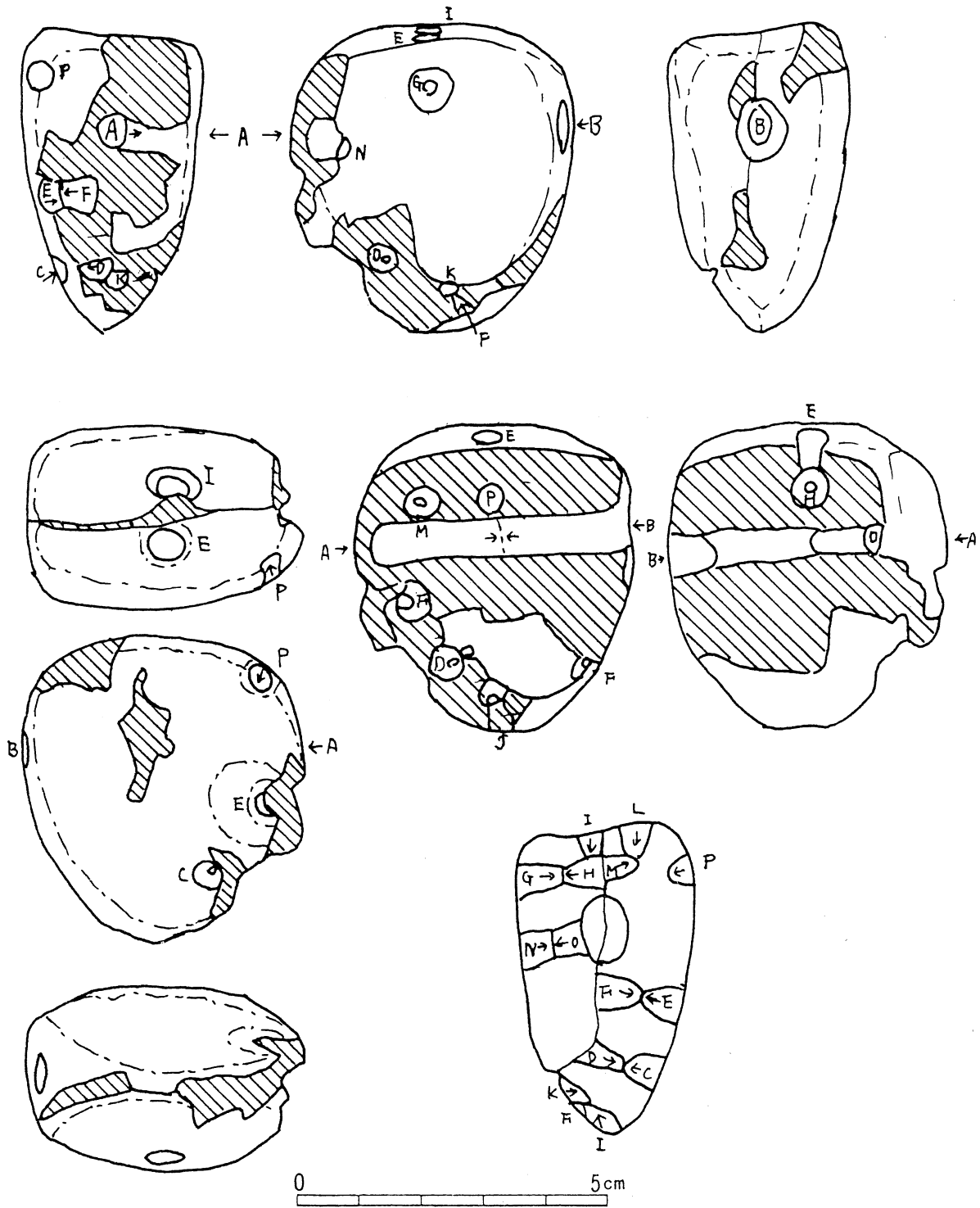
第40图 石器实测图

(1. 2住, 2. 4住, 3·4. 6住, 5~7·19~21. 8住, 8·11. 16住,
9. 土286号, 10·18. 15住, 13. 土493号, 12·14~17·22遺構外)

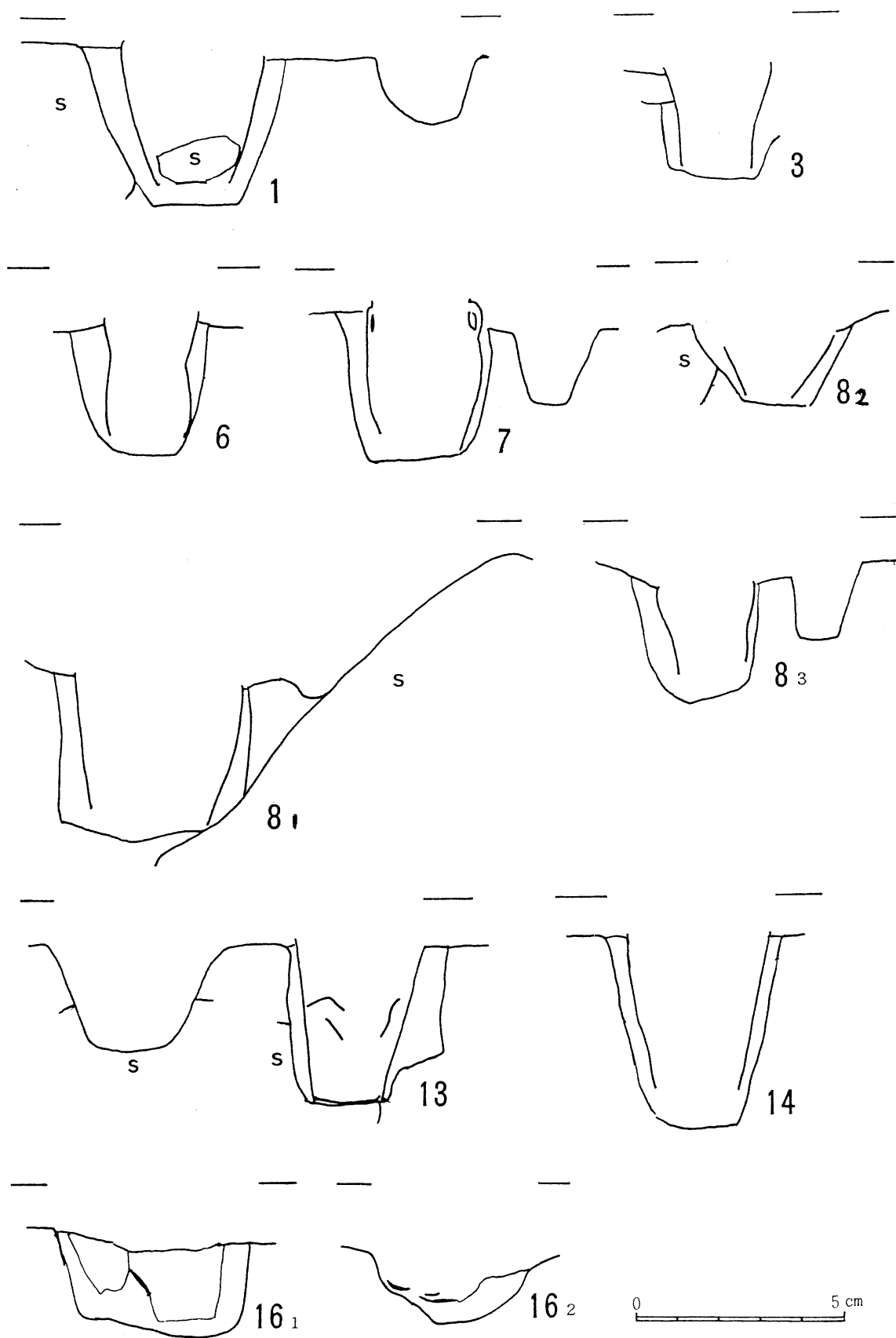


第41図 特殊な遺物実測図

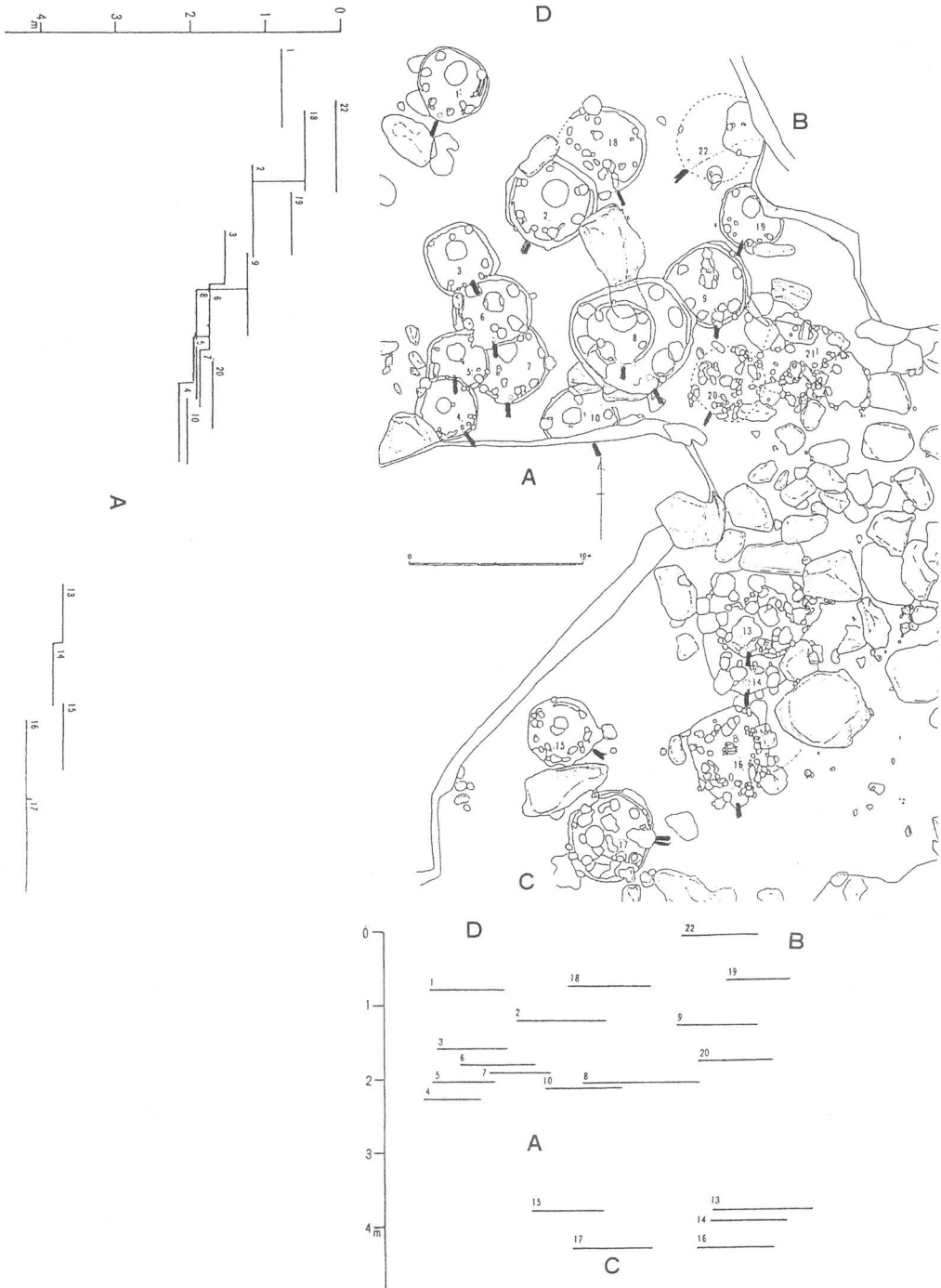
(1. 遺構外 2. 土531号 3. 土522号 4. 土572号 5. 土632号 6. 土802号 7. 配石墓)



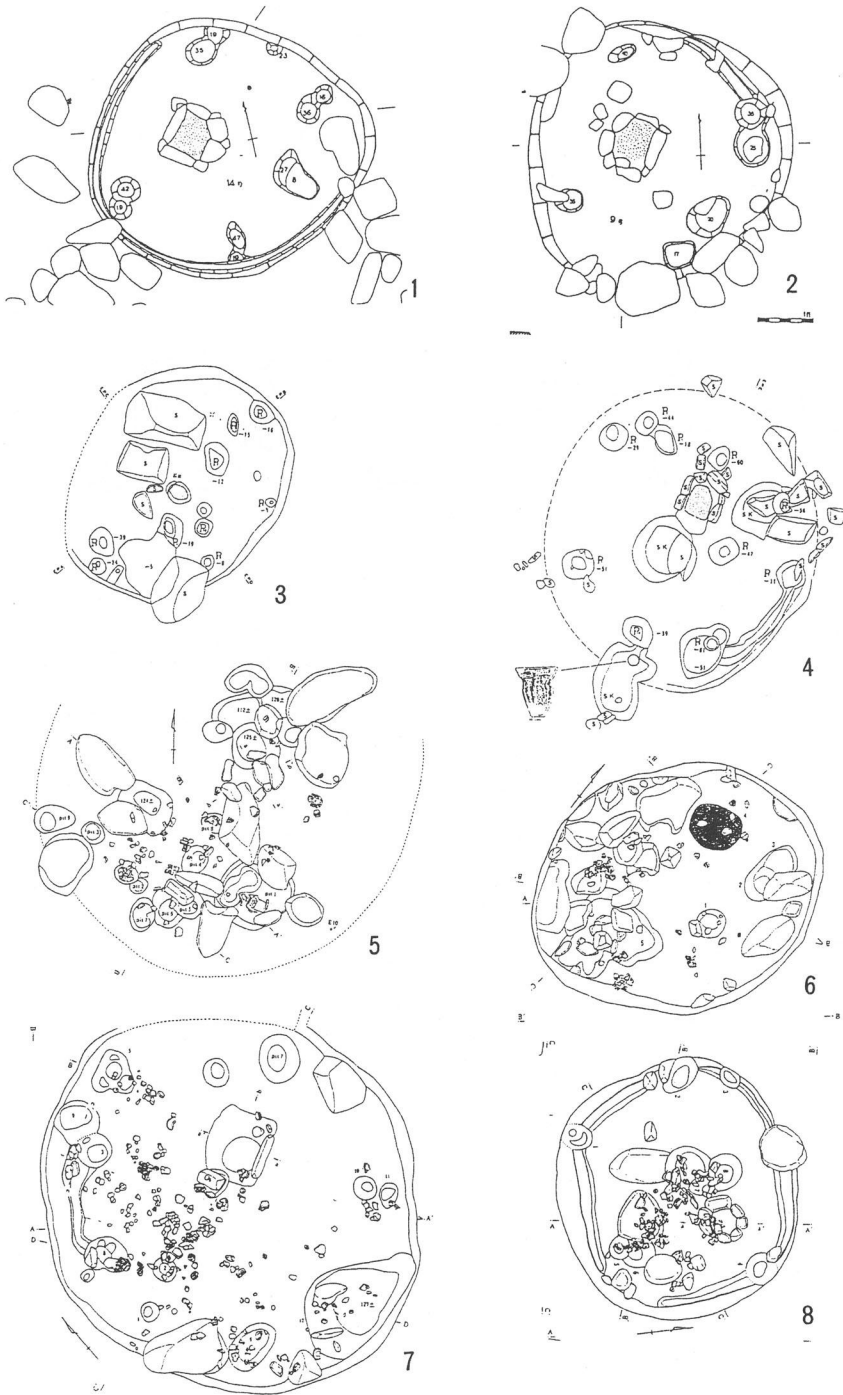
第42图 土坑802号出土琥珀玉质测图



第43图 埋甕埋設状況



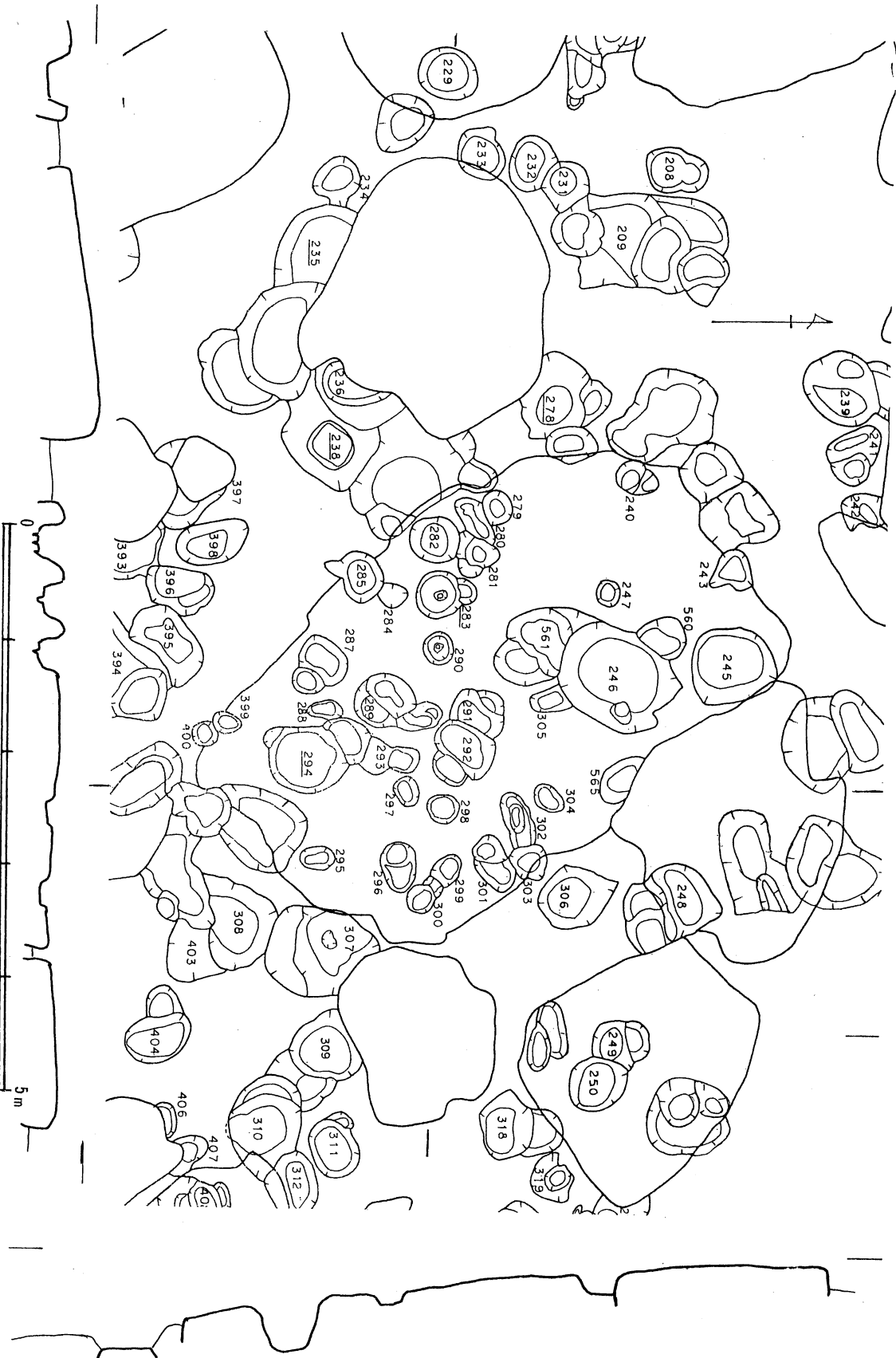
第44图 住居址比高图



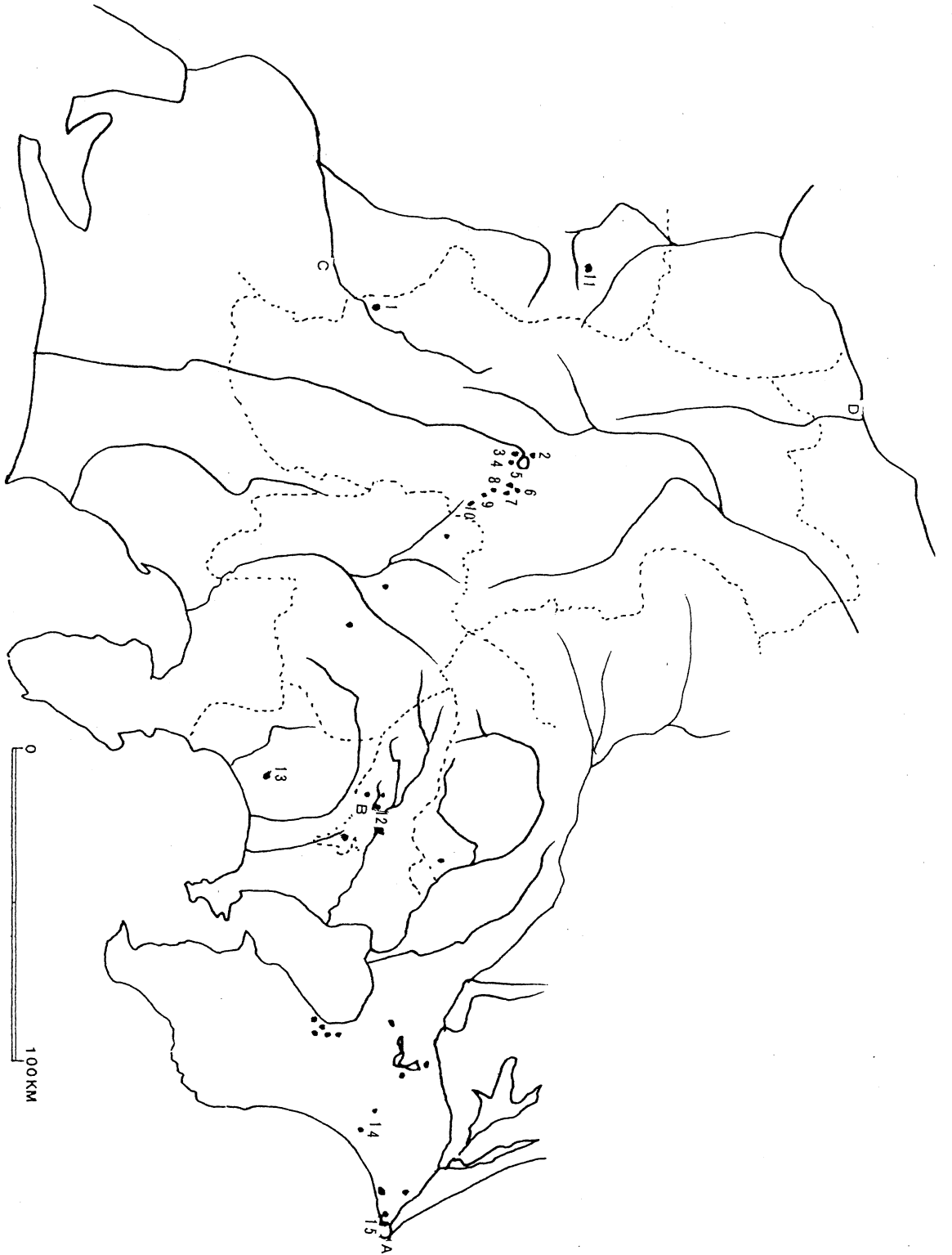
第45図 花崗岩と住居址

1・2. 飯島町尾越 3～8. 山梨県釈迦堂

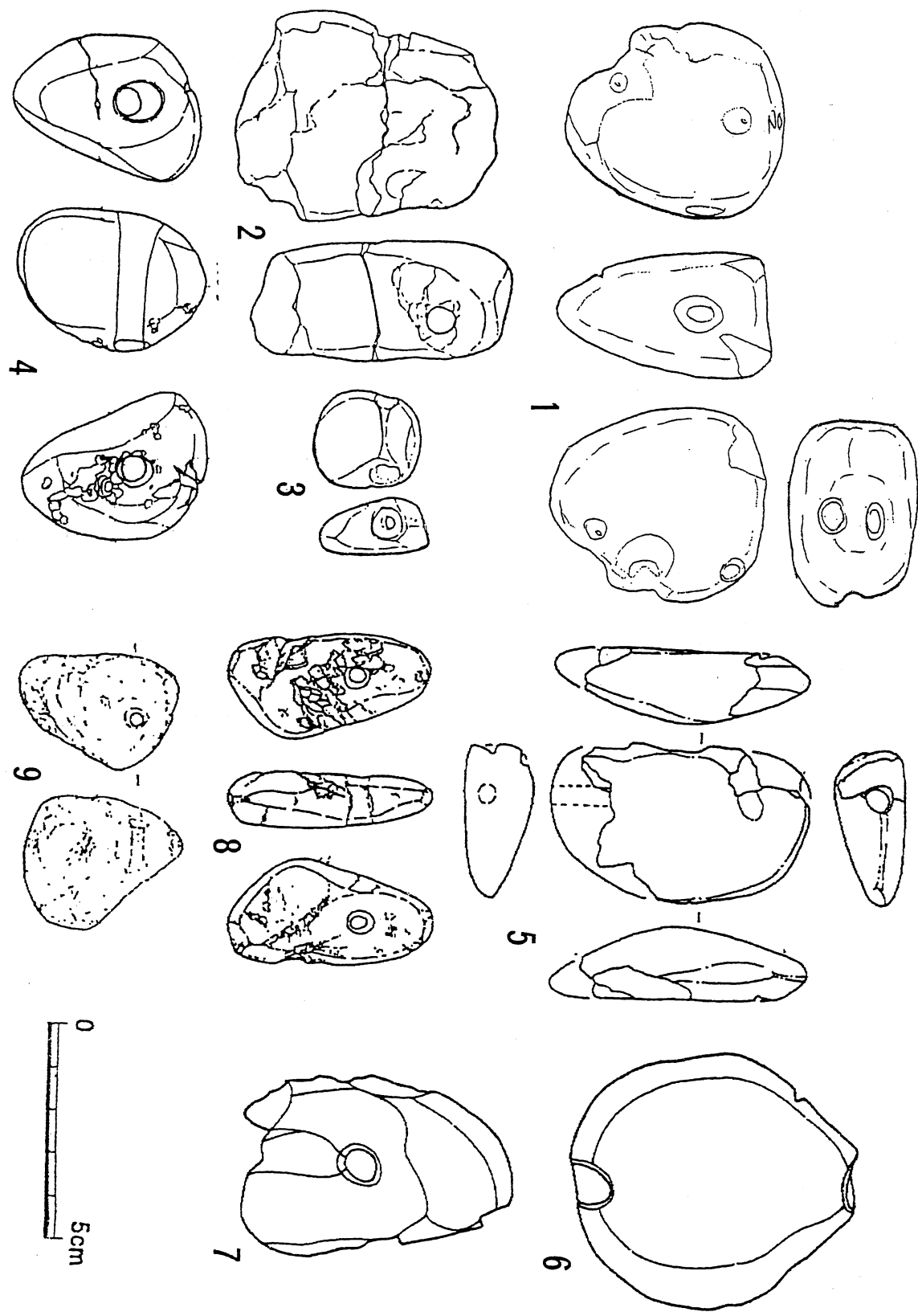
(1. 14住, 2. 9住, 3. IV60住, 5. 20住, 6. 13住, 7. 21住, 8. 15住)



第46図 花崗岩をうがつ土坑



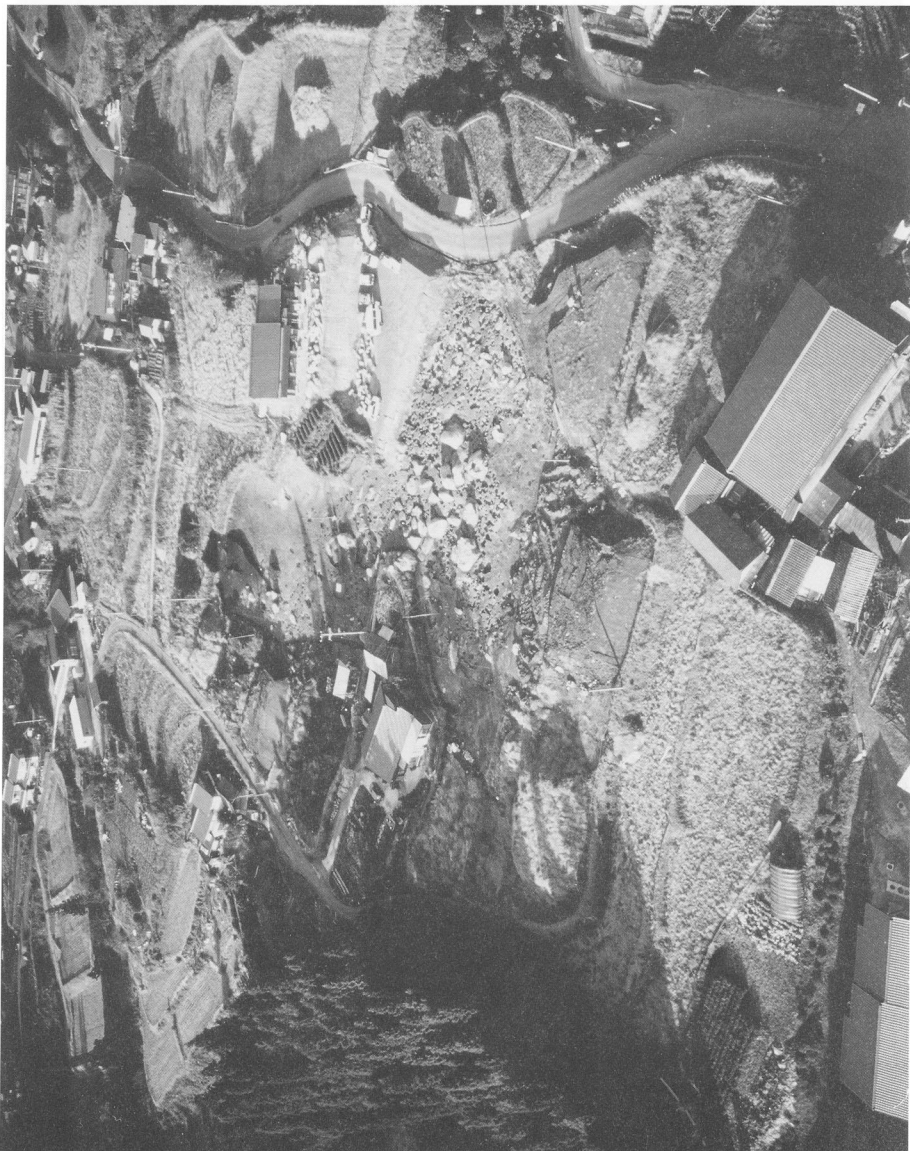
第47図 中部・関東の琥珀出土遺跡 (A. 銚子, B. 八王子, C. 瑞浪, D. 糸魚川←ヒスイ)
1. 太田垣外, 2. 梨久保, 3. 船靈社, 4. 荒神山, 5. 棚畑, 6. 中ツ原, 7. 立石, 8. 大石, 9. 南平,
10. 唐渡宮, 11. 丸山, 12. 樽原, 13. 下大槻東関戸, 14. 東長山, 15. 栗島台 (吉田格原図に加筆)



第48図 琥珀大珠
 (1. 太田垣外, 2・3. 中ツ原, 4. 棚畑, 5. 樽原, 6・7. 下大槻東関戸, 8. 栗島台, 9. 東長山)

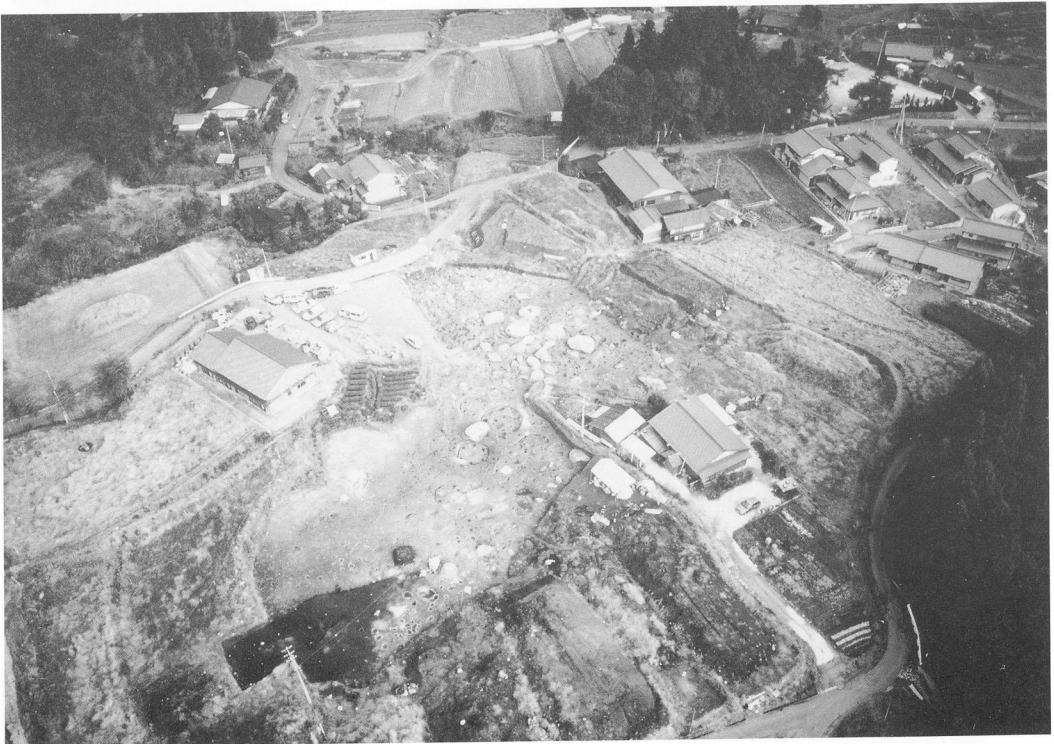


A住居群・B土坑群





南西よりみた遺跡

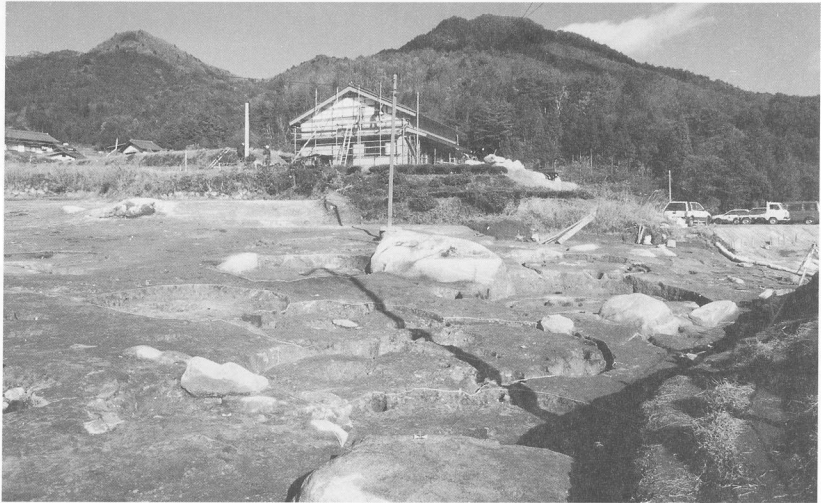


北上空よりみた遺跡

第4図版 A地区遺構検出状況



表土剥ぎ



北西より



南東より



全 体



炉



祭祀遺構



埋
甕



花崗岩に掘りこんだ柱穴